333
60

始

特219
339

女子國文大綱

備考（卷三）

平林治德著

立川書店發行

昭和五・一〇・四・三
帝國圖書

はしがき

一、備考は編者が各作品について、教授者の立場に立つて調べた所を試に書き記して教授者諸君の机邊に呈して参考に供するものであるから、一家言に過ぎないのではあるが、併し場合によつては本書活用の上に重要なる役目を演ずる事もあるから、勝手な氣焰をあげるよりは、親切に調べ、念入に考へるといふ事を根本方針とした。

一、要旨　に於ては採擇の趣旨を述べた。

一、解釋　の部は特に出來る限り調査を正確にする事に努めた。そしてなるべく詳しく記述する方針にした。教授者諸君が参考せられるか否かは勿論隨意であるから、簡に過ぎるよりは詳に過ぎる方が備考としては適當であらうと考へたからである。

一、字句の解釋については手頃の辭書の説をそのまゝ、或は要約して掲げた。引用辭書には略符を示した。これによつて或場合には一々辭書を参照される手數

を省くことが出來れば幸せである。略符左の通り。

大國	大日本國語辭典（上田・松井）
言海	言海（大槻）
廣辭	廣辭林（金澤）
大字	大字典（上田外四氏）
詳漢	詳解漢和辭典（服部・小柳）
康熙	康熙字典
辭源	辭源（上海商務印書館）
熟語	故事熟語大辭典（池田）
諺語	諺語大辭典（藤井）
百科	日本百科大辭典（三省堂）
人名	大日本人名辭書（經濟雜誌社）
國史	國史大辭典（弘文館）
地名	大日本地名辭書（吉田）

佛教	佛教大辭典（織田）
哲學	哲學辭典（岩波）
文藝	文藝百科全書（早稻田）
文辭	文藝辭典（創元社）
新式	新式辭典（藤村）
類語	日本類語大辭典（志田・佐伯）
成語	故事成語大辭典（簡野）
字源	字源（簡野）
言泉	言泉（落合）

一、小說及戲曲の一部分を採擇したものに對してはなるべくその全篇の梗概を揚げた。

一、鑑賞に於ては編者の感想を主として述べたが、批評と云つた方が適當な場合もあり、又教授上の注意を加へた事もある。

一、各章の餘白を利用して雜話を記した。前後の章に多少關係のある話を主とし

たが、直接の關係ないものも思付くまゝに入れた。諸書から拔萃したものには筆者を明らかにしておいたが、筆者の名或は書名を記さないものは編者の漫談である。何かの御參考ともならば本懷の至である。

女子國文大綱（卷三）備考目次

一　孤島の行幸……（口）……一
出所……一
要旨……一
段落……二
解釋……三
備考……一四
鑑賞……一四

二　短詩三章……（詩）……薄田泣菫……一六
作者……一六
出所……一六
要旨……一七
解釋……一七
鑑賞……一八

三　この春……（口）……北原白秋……一九
作者……一九
要旨……二一
段落……二一
解釋……二二
鑑賞……二〇
挿繪……二一

四　お遍路さん……（口）……荻原井泉水……二二
作者……二二
出所……二二
要旨……二二
段落……二二
解釋……二五
鑑賞……二四
挿繪……二四

五　淨瑠璃寺への道（口）……和辻哲郎……二四
作者……二四

出所……四三
要旨……四四
段落……四五
解釋……四六
鑑賞……五一
挿繪……五二
六 竹……（口）……芥川龍之介……五四
作者……五四
出所……五七
段落……五八
解釋……五九
鑑賞……六三
挿繪……六七
七 文藝復興期の畫家（口）……木村莊八……六七
出所……六八
要旨……六九
段落……七〇
解釋……七一
鑑賞……八三
備考……八四
挿繪……八九
八 感傷肖像……（詩）……佐藤春夫……九〇
作者……九〇
出所……九一
要旨……九三
段落……九三
解釋……九四
鑑賞……九五
備考……九五
挿繪……九六
九 先生への通信（手紙）……吉村冬彦……九八
作者……九八
出所……九八
要旨……九八
解釋……九九
一〇 會呂利新左衛門（文）……湯淺常山……一〇八

作者……一〇八
出所……一〇八
要旨……一一〇
段落……一一〇
解釋……一一一
鑑賞……一一八
挿繪……一一九
一一 磯邊の小石……（口）……相馬御風……一二〇
作者……一二〇
出所……一二一
要旨……一二一
段落……一二二
解釋……一二四
鑑賞……一二五
挿繪……一二六
一二 青空……（詩）……千家元麿……一二九
作者……一二九
出所……一二九
要旨……一三〇
解釋……一三〇
鑑賞……一三〇
一三 兄弟の對話……（口）……野上彌生子……一三一
作者……一三一
出所……一三一
要旨……一三一
段落……一三一
解釋……一三一
鑑賞……一三二
挿繪……一三二
一四 伊豫すだれ……（口）……里見弴……一三四
作者……一三四
出所……一三五
要旨……一三五
段落……一三五
解釋……一三六
備考……一三八

鑑賞……一三九
挿繪……一四〇
一五 無數の寶石……（口）……吉田絃二郎……一四一
作者……一四一
出所……一四一
要旨……一四一
段落……一四二
解釋……一四三
鑑賞……一四三
一六 熱帶の海……（口）……島崎藤村……一四五
作者……一四五
出所……一四八
要旨……一四八
段落……一四八
解釋……一五〇
鑑賞……一五四
一七 蜀山人の盆燈籠（文）……鄕庭篁村……一五五
作者……一五五
出所……一五六
要旨……一五七
段落……一五七
解釋……一五八
鑑賞批評……一七一
備考……一七二
一八 山の木と大鋸（口）……志賀直哉……一七四
作者……一七四
出所……一七八
要旨……一七八
段落……一七八
解釋……一八〇
鑑賞……一八九
挿繪……一九〇
一九 和歌……一九二
作者……一九二
出所……一九三
要旨……一九四

解釋……一九四
鑑賞……一九七
挿繪……一九八
二〇 蜃氣樓……（文）……橋南谿……一九九
作者……一九九
出所……二〇〇
要旨……二〇一
段落……二〇一
解釋……二〇二
鑑賞……二〇九
挿繪……二一〇
二一 椿……（文）……幸田露伴……二一一
作者……二一一
出所……二一一
要旨……二一一
段落……二一二
解釋……二一三
鑑賞……二一七
備考……二一八
挿繪……二一八
二二 夏の小曲……（詩）……三木露風……二二〇
作者……二二〇
出所……二二〇
要旨……二二二
段落……二二二
解釋……二二二
鑑賞……二二五
二三 富士八湖……（口）……下村宏……二二七
作者……二二七
出所……二二七
要旨……二二八
段落……二二八
解釋……二二八
挿繪……二三二
二四 精進より身延へ（口）……杉村楚人冠……二三四
作者……二三四

出所……二三四
要旨……二三四
段落……二三五
解釋……二三五
鑑賞……二三九
二五　水國の秋……（文）……德富蘆花……二四一
作者……二四一
出所……二四一
要旨……二四二
段落……二四二
解釋……二四三
鑑賞……二五一
挿繪……二五二
二六　父母の思出……（文）……新井白石……二五三
作者……二五三
出所……二五四
要旨……二五四
段落……二五五
解釋……二五六
鑑賞……二五九
挿繪……二六〇
二七　幼な正行……（劇）……坪内逍遙……二六二
作者……二六二
出所……二六三
要旨……二六四
段落……二六四
解釋……二六六
鑑賞……二六五
梗概……二六六
備考……二六九

——目次終——

女子國文大綱卷三　備考

一　孤島の行幸

出所

大阪朝日新聞、昭和二年七月二十八日發行の分から、同八月十一日發行の分に至るまで、連日の本紙及び夕刊に記載せられた記事に據つて綴つたもの、解釋の所々に引いた記事と對照せられたい。

要旨

聖上陛下には、大分縣佐伯灣沖豐後水道において行はれた聯合艦隊戰技訓練御親閲の御序を以て、奄美大島並に小笠原島に行幸遊ばされた。畏くも陛下、御登極以來多端なる御政務御親裁の傍、民情軍事の御視察に、諸般の御研究に、御寧日なく、實に尊くも感激の極みである。本文はよく御精勵にます陛下、御研究心深くます陛下、又御親しみ深き陛下、御健かにます陛下、陛下の御姿の一々がそのまゝ眼前に拜されて寔に以て畏多い。この一課こそ、國語教授者會心の教材と信ずる。希くは、大

御心の萬一を拜し、生徒をして君國青年の感謝、榮譽、自覺を痛感せしめられん事を。

今回の行幸につき關屋宮內次官の謹話。

「今回の行幸は普通の地方行幸と違つて非常に意義深いものであるが、國民全體がこの方面に一層注意するやうになつてもらひたい。北太平洋は日本の庭園である、陛下がこの暑熱を冒されて南の孤島をお訪ね遊ばされたことは、いよ〳〵意義深いものである。」(朝日新聞)

段落

一、昭和二年八月上旬……兩島民の歡喜は非常なものであつた。(二頁二行まで)

總說、開闢以來初めて陛下の行幸を仰ぐを得た兩島民の歡喜は非常なものであつた。

二、七月二十八日橫須賀軍港を後にし……海上一路佐伯灣に向つて島を離れた。(四頁終りまで)

小笠原行幸中の御模樣。

1、七月二十八日御出發、三十日小笠原の首邑大村埠頭に御上陸。

2、大村小學校、父島要塞司令部、小笠原支廳へ臨幸、歸化人村へも御微行、聯珠山に入らせられ原生植物御採集。

3、大村小學校では歸化人兒童の作文に特に御目を注がれたこと。島民赤誠の獻上品御嘉納。產物、製作品等御買上。三十一日母島沖中島民、カヌー船をかつて提灯行列。八月一日佐伯灣へ御發航

三、傳說の島……砲臺などを御巡覽遊ばされた。(八頁九行まで)

奄美大島行幸中の御模樣。

1、八月六日奄美大島へ行幸。當日正午大島名瀨港へ御上陸。大島支廳・名瀨小學校へ臨御。

2、當日黃昏時、同島西岸古仁屋へ御回航、翌七日朝御上陸、要塞司令部・小學校に臨御。午後青年團・在鄕軍人の板付競漕を天覽、御微行で薩川港へ御成り遊ばさる。八日朝、陪從の學者を召され御採集品や標本につき御研究、午後灣內御一巡。

四、奄美大島御滯在中に……菅に兩孤島の民草ばかりではないのである。(九頁四行まで)

廣大無邊の御仁慈に感泣するもの菅に兩孤島の民草ばかりではない。

五、この日午後四時……終りまで

島民の奉送歡呼聲裡に古仁屋御出發一路橫須賀に向け御歸還の途につき給ふ。

解釋

【豐後水道】豐後地藏崎と、對岸伊豫佐田岬　一　との間。古名「早吸水門(ハヤスヒノミナト)」。「水道」Water way.

海峽の長きもの。

【聯合艦隊】　艦隊二個以上を以て編成され、必要に應じ之に艦船部隊を編入し又は附屬せしめらる。「艦隊」は、軍艦二隻以上を以て編成され、必要に應じ之に驅逐隊・潛水隊・掃海隊又は驅逐艦・潛水艦・掃海艇を編入し港務部・防備隊・航空隊・特務艦等を附屬せしめらる。

【射擊】　火砲及び小銃の發射。其の目的方法等に由つて、教練射擊・戰鬪射擊・間接射擊・直接射擊・一齊射擊・各個射擊等に分つ。

言泉

【演習】　陸海軍にて、軍人一般をして、戰時における各自の責任を了得せしめ、且平素各自の習得したる教育の程度を檢し、併せてその能力を察するために行ふ假設の軍事的動作、陸軍にては、總括して、秋季機動演習といひ、海軍にては、常備艦隊演習と聯合艦隊演習とに分つ。言泉。

【御親閲】　天皇陛下親しく御檢閲あそばされること。「檢閲」は檢査し、閲覽すること。言泉。

【海里】　カイリ。Sea mile. 海上の距離を測る單位、アメリカにては六〇八六「フィート」をいひ、イギリスにては六〇八〇「フィート」をいふ。我が國の約十七町に當る。浬　廣辭

【小笠原島】　八丈島の南百二十里、文久二年小笠原貞頼の發見せし所、而してその苗字を以て島名とし、屢〻來往して物産を拾收せしも、未だ移殖開拓するに至らず、其の後八十五年にして延寶三年、將軍家綱長崎の人島谷市左衞門に命じて、此の島を探檢せしむ、降つて百十餘年、天明三年林子平三國通覽を著し、此の島の海防上要衝なるを說き識者の注意を惹けり。その後一時渡航中絶して殆ど無人島となりしが、天保元年イタリア人マテオマサルなるもの頭首となり、英・米・丁等の國人五人及び、ハワイ島の男女十七人許を率ゐ、父島に來往す。これ父島住民の始めなり。其の後嘉永六年、ペルリ我が國に來り互市を乞ふ以前已に本島を探檢せしが、後アメリカ合衆國領とし、コッフイン群島と命名したるを聞けり。徳川幕府は文久二年外國奉行水野忠徳・服部歸一に命じて島内を巡檢せしめ、外人を懷撫し、新に八丈島より男女四十人を移住せしめ衣食器具を給し、大に移民を愛撫したりしかば、漸く定住者を得、全島始めて我が管轄に歸したり。明治十三年東京府の所轄とし、同十九年島廳を置き全島を管轄せしむ。全島南北の一線上に列布し、北緯二十六度三十二分より二十七度四十三分に及び、婚島(北部)・父島(中部)・母島(南部)の三個の列島より成る。硫黄島・北硫黄島並に南島之に屬す。群島の總數九十七個、面積五方里七七、戸數一千餘、人口五千、内外國歸化人百數十人あり。(日本地理集成)

【奄美大島】　アマミオホシマ。大島の古名。大隅の國大島郡に屬する島。東方に喜界島、西南に德ノ島を控へ、琉球及び臺灣の航路に當り、汽船寄港し商業甚だ賑へり。西鄕隆盛の流謫地として名あり。全島を八ケ村に分ち人口九萬二千餘人。⊙天武天皇十一年始めて入貢す。住民の風俗は沖繩に等しく、男女共に簪をさし、平袖の衣服を著し、前には細帶を爲し、跣足を以て常とす。氣候溫和、蘇鐵・芭蕉・竹等熱帶地方產の植物繁茂す。（日本地理集成）

【七月二十八日云々】　御出發の御模樣につき週刊朝日臨時增刊號の記事を摘錄すると、

「聖上陛下には、七月二十八日午前八時半珍田侍從長、關屋次官、奈良武官長以下の供奉員を隨へさせられて赤坂離宮御出門、東京驛を午前八時五十五分橫須賀に向けて出發、お召列車は十時二十五分橫須賀驛着、安保橫須賀鎭守府長官の御先導でお召艇に召され、各艦の皇禮砲登舷禮中を約十町沖に碇泊のお召艦山城に向はせられた。午前十時四十分軍艦山城の前檣高く天皇旗ハタハタと飜る。かくて皇禮砲軍港を搖がす中を十一時三十分一路小笠原に向つて御發航あそばされた。」

【四隻の驅逐艦】　第四驅逐隊、太刀風・羽風・帆風・秋風。

【三十日の朝云々】　小笠原島御着の御模樣（週刊朝日臨時增刊號による）

「三十日午前八時二十五分、御召艦山城は御航海つゝがなく小笠原父島二見港に、供奉艦を從へてしづしづと入港した。港內に先着の特務艦春日から皇禮砲殷々と轟く內、聖上陛下には艦載水雷艇にて九時三十分大村埠頭に御上陸、こゝに小笠原島に最初の玉步を印せられた。」

【二見港】　父島の西側にある。島內第一の埠頭である。

【翻翻】　ヘンポン。旗などのひるがへるさま。

【埠頭】　フトウ。又、ホトウ。はとば（波止場）。商船の發着所「はとば」、港灣內に於ける陸岸の一部を凸字形に突出し、其兩岸に船舶を繫留して水陸の聯絡を便にする構築物。

【廣闊】

【珊瑚の淸め砂】　掃ききよめて不淨を去つた路上へ、しきつめた珊瑚の砂。珊瑚の砂礫は南島島などへ行くとその海岸一面に布き夕日之に映えて美觀云ふばかりなき由、志賀重昂氏世界山水圖說に見える。

【大村小學校云々】　大村小學校へ臨ませられた時の御模樣。（週刊朝日臨時增刊號による）

「御上陸後直に陛下には椰子の木立美しき樹下道をおひろひで大村小學校へ臨ませられた。沿道の島民はタコの木の皮で作つたゴザの上に跪坐して、うや〳〵しく奉迎し

た。小學校では峰岸校長の御案内で兒童の作品を御覽あり、校庭では平塚府知事の發聲で陛下の萬歳を三唱した。」

【父島要塞司令部に臨幸】 その御模様。

「やがて九時五十分父島要塞司令部に臨幸、安達司令官より要塞守備その他について奏上、陛下には懇なるお言葉があつた。」（週刊朝日臨時増刊號による）

「要塞」は、國防上必要なる地に設置したる永久築城、陸地要塞と海岸要塞とあり、「司令部」は司令官の事務を取扱ふ所。廣辭。

「嘉し」ヨミし。めでたゝへられ。ほめられ。廣辭。

【支廳に向はれ云々】 その御模様。

「ついで支廳に向はせられ商品陳列館階上の御休憩所にて高橋支廳長より島情を御聽取あり、終つてこの島の開發に努力した久瀬延吉・志村久次郎氏等に拜謁を賜はり、支廳長の説明で各種の物産を御覽あり、珊瑚細工その他をお買上げになつた。それより波止場近くの龜の養殖所に立ち寄らせられ正覺坊のおどけた姿に興ぜられ、十一時三十分一先づ御歸艦あそばされた。（週刊朝日臨時増刊號）

【午後は御微行で歸化人村を訪はせられ云々】 「午後一時陛下には脊廣にヘルメットといふ御輕裝で、二見灣東よりの清瀬の濱に御上陸、御微行で歸化人村を訪はせられた。（週刊朝日臨時増刊號）

「父島の歸化人村は二見灣の一番奥まつた鹽瀬から奥村に至る波靜かな海濱の一角であつて、最初にこの島に漂着したハワイ人や英・米・佛・カナダ人などが開拓したところである。殊に鹽瀬はペルリ提督が黒船を率ゐて來航した時、こゝに上陸して貯炭場を設け、鹿・豚・雞・野羊などを放し、植民の第一歩を定めた所である。維新當時は漂流外人百二三十名に上り、この島を征服して居たが、現在は四十名足らずである。（週刊朝日）

【原生植物】 太古以來その地に固有の植物。小笠原島には熱帶性のもの多く、ノヤシ・マルハチ・タコ・シコウラン・テリバヘゴ・マツバラン・リユウビンタイ・シマムロ・ヒメタニ・ワタリ・シマシヽラン等がある。

【島民心づくしの献上品】 島からは特殊植物十二種、森林植物腊葉等各種の品を献上したが支廳からはパパイヤ・マンゴウ・バナヽ・西瓜・アナナスの外フリーヂヤ・アマリヽス等の切花、更に府知事からはケンチヤ・アレカ・カラヂウム等を献上した。（週刊朝日）。

「心づくし」、は心をつくし思ふこと。

【御嘉納】 ゴカナフ。（一）よみして言を聞きいるゝこと。（二）よみして物を受けをさむること。廣辭。こゝは（二）。

【御買上げ遊された】 特に、バナヽ・西瓜

棕梠・タコの文庫・タコの葉の煙草入れなどをお買上げになつた。（週刊朝日）。

【島の果物・細工物】 果物では、バナナ・ナナス・レモン・西瓜等。細工物では、タコノキの葉で造つたものが有名である、即ち夏帽子・提鞄・敷物・卷煙草入など。「タコノキ」は高さ二丈餘の喬木、基部に大なる氣根を發出し、恰も章魚の足に似てゐるから名づけたといふ。（日本地理集成）

【沖中島民が舟を操つての提灯行列云々】 「島民等はこの夜カヌー船をかつて提灯を打振りつゝお召艦に近づき、萬歳の聲に浪さわぐ太平洋の夜はふけた。」（週刊朝日）。「カヌー船」、小笠原特有の船で細長く、左右の動揺をふせぐため右側に、小さき船の形したるものを、本船より四五尺隔てゝ、二本の支へ木で結びつけてある。女子供でも自由に操る由。

【鬼燈提灯】 ホホヅキテウチン。赤く染めたる正圓形の小提灯。酸漿提灯ともかく 廣辭

【傳說の島】 南海の離島であり、しかも點々綴々として飛石の如く、琉球・臺灣を經て支那大陸に連接し、恰も往古帆檣の時代に於てはその徑路たるに好適である、いろ〳〵の傳說も生むだであらう。東方喜界島には僧俊寛が流されたと傳へられ、近くは西郷南洲流謫の地でもある。（俊寛の流されたは硫黄島で、平家物語には誤つて鬼界島としたのである。）

【常夏の國】 トコナツのクニ。地、南方にある上、黑潮に洗はるゝため年中氣候暑く、自ら熱帶性である故にいつたのである。「常夏」は、いつも夏であること。

【黑潮】 海流の一、日本列島の近海に沿ひて流るゝ暖流にして、潮勢急駛、無風の天候にも尙ほ波浪を起こす。フィリッピン群島及び臺灣島より北方に向ひ、日本列島の近海を突破して、犬吠岬の沖に至つて沿海を離れ、遙かに太平洋の皮流に合してその踪跡を失す。日本海流。黑瀨川 廣辭。

【名瀨港の假棧橋より御上陸云々】 當時の御模樣。

「六日、お召艦山城は、先着の軍艦長良から皇禮砲響き渡る中に、名瀨灣立髮沖に着、天皇旗スラ〳〵と檣頭高く揭げられた。時に午前十一時四十五分、同五十五分、名瀨町假設棧橋に御上陸、陛下には松本鹿兒島縣知事の御先導にて、沿道多數官民の奉迎を受けさせられ、午後一時五分大島支廳にお成り、郡勢要項、並に郡情一班を御聞き取りあり、ついで有資格者のほか、特別の思召を以て龜岡豐治氏以下四名の大島開發に力を致したる功勞者、並に節婦森本つる女等に拜謁を賜はり、松本知事の御說明で、各種の物產を天覽あり、廳庭に出でさせられて、選ばれた島の乙女二人が實演する大島紬の製產工程を始め、黑砂

糖、蘇鐵の澱粉製造、毒蛇ハブの毒素採集等の實演を御覽あらせられた。」（週刊朝日）

【本島開發の功勞者】　前記龜岡豐治氏のほか產業功勞者丸田義兼・本田二次郎、教育功勞者財部寂心、地方自治功勞者沖元綱の四氏。

【節婦】　森本つる女。

【六日の黃昏時云々】　「七時頃、無事國防の第一線古仁屋の港へ御着あそばされ、八時より御旅情を御慰め奉る海上の提灯行列を御覽、同夜は古仁屋に御假泊あそばされた。（週刊朝日）。

【當局者より御聽取】　福田第六師團長、柏木要塞司令官から奏上する軍情を聽し召された。

【諸種の產物】　大島紬・眞珠貝・るりかけす・黑兎・おつとん蛙等。

【發見物】　京大田代教授が本島で發見の無名珍植物。

【御野立所】　オノダテショ。又オノダチショ。野中に、御少憩あそばされる所。「野立」は、貴人の旅行に、野中に駕籠など立てゝ小休みすること。廣辭。

【板付競漕】　板付船の競漕、古來より行はれてゐる本島特有の競技。

【島民の献上品】　かじまる、なごらん、めじろ、るりかけす鳥、くろうさぎ、大島寫眞帖、棕梠竹、あかひげ、しやりんばい、鐵砲花百合等。

【薩川港内に成らせられ云々】　「陛下には脊廣服にヘルメット帽の御輕裝、木下事務官、西園寺御用掛の二氏を從へさせられ、全くの御微行で艦載水雷艇に召され、波高き海上を薩川にお成り、世界的の良港内を隈なく御巡覽、國防の第一線として最も要害の地である所以を、先着の柏木要塞司令官から御說明申上げ、更に「いとまん」人の裸もぐりや、ダイバー達をして、珊瑚を始め海底の動植物を採集せしめられた後五時三十分御歸艦、艦内ではなほ引續き京大田代教授以下多くの專門家に依賴して採集捕獲した「てうてうご」「おつとん蛙」、文蛇毛長鼠その他大島特有の動植物學術標本、參考品數千點をそれ〳〵專門家によつて八時頃までも御研究遊ばされた。（週刊朝日）。

【陪從】　バイジュウ。はんべり從ふこと。ともをすること。又その人、とも。當時陪從の各學者は田代、大島、日野、岡島各教授。

【ワシントン會議】　有史以來始めて世界の強大國が軍備制限を行つた會議である。大正十年十一月十二日から同十一年二月六日までワシントンで開かれた。軍備制限を主眼とし同時に極東及び太平洋問題の討議を目的としたものである。調印國は日・英・米・佛・伊の

五ケ國。

○海軍々備制限條約の要點。

存置すべき主力艦噸數、英國、五八、〇四五〇、米國五〇、〇六五〇、日本、三〇、一三二〇。

代艦建造後に於ける主力艦噸數制限、英米各五二、五〇〇〇、日本、三一、五〇〇〇。佛・伊、一七、五〇〇〇。

○太平洋防備制限の要點。

日英米三國は太平洋上に於て現に領有し又將來獲得する事あるべき島嶼に何等の新要塞、新海軍根據地を設けぬ事。海軍力の修理又は維持のために現存の海軍諸設備又は沿岸防備を增大しない事。

こゝに「工事中止のまゝなる砲臺」とあるは、この太平洋防備制限條約によつて工事を中止したのである。

【備考】

【鑑賞】

【啻に】 タダに。ひとり、たゞ。下に「のみならず」といふ打消の語句、又は「のみならんや」といふ反語を伴ふ。〔言泉〕。

「還幸、」十日午後一時四十五分横須賀軍港御入港、同四時四十分東京驛御着車、長途の御旅行にいさゝかの御疲勞も拜せず御機嫌うるはしく十四日目に赤坂離宮に還幸遊ばされた。（週刊朝日）。

畏くも陛下の御事は須臾も我等國民の念頭を離れないが故に、しかも先づ新聞によるにあらずんば眼のあたり御尊容を拜し奉るを得ないが故に、我等は新聞を唯一のたのみとするものである。そしてその報道の堅實を記者各位に期待し、切にその使命の重大なるを自覺せられん事を常に祈るものである。而してこの一文は今回の盛事を傳へ得て正に十分であると確信する。茲に於て吾等はこの作者に對し今更ながら深甚の敬意を表し、聲を大にして以て國家の爲め希くは健在にと多大の感謝を捧げるものである。

げにこの一文は、陛下行幸中の一切をのべ盡し奉り、一讀三讀、畏多き事ながら吾等をして切々尊崇思慕の情に堪へさらしめるものがある。思はずも「吾等の若き日の御子」を叫ばしめる。この記事を讀んで誰か忠誠の一念に燃えないものあらう。

我等をして特に感泣久しうせしめたるは、將に御還幸に際し「濱邊に集ふ島民の眼には感謝の涙が一杯に滿ちて感激に震ふ萬歳の聲はいつまでも御召艦のあとに響き渡つてゐた」といふ末尾の一句である。兩島民の赤誠はこの一句に盡きる。

若しそれ陛下御動靜の始終に至つては、記者の言へるが如く、廣大無邊の御仁慈、御研究心、到底筆紙のよくする所でない。

二　短詩三章

作者

【薄田泣菫】　ススキダキフキン。名は淳介。明治十年五月、岡山縣淺口郡連島町に生れ、殆んど獨學でたつた人。明治三十年前後に於ける代表的詩人として、與謝野鐵幹・土井晚翠・島崎藤村と共に知られた。其隨筆小品は輕快な諷刺諧謔に富んでゐる。現に大阪毎日新聞社員として重きをなし、時々執筆してゐる。詩集に「暮笛集」「ゆく春」「二十五絃」「白玉姫」「落葉」「白羊宮」「子守唄」「十字街頭」等があるが「泣菫詩集」に其作の多くが收められてゐる。又散文には隨筆「茶話全集」上下二卷がある。

出所

【泣菫詩集】　一冊、大正十四年二月、大阪毎日新聞社發行。定價五圓。十字街頭、白羊宮、二十五絃、白玉姫、ゆく春、暮笛集、子守唄が集められてゐる。本文に採つたのは三章とも子守唄に載せられてゐるもので即明治四十一年頃の作である。

要旨

鑑賞の所にある樣に詩の稍と特殊な一態として擧げたのである。

解釋

冬の鳥

【柊】　ヒヒラギ。疼木の義。(刺、人を刺す故に云ふ)常綠木。葉は厚く末端に大刻ありて尖皆硬利なり冬枯れず。秋冬の間に小白花を開く香氣あり、果實は紫黑色なり。材白く堅く細文ありて象牙の如し。算盤玉など諸器具に作る。〔辭海〕

【ひよん】　異樣なるさま。變。狂言「はてひよんな事をおしやれまする」傾城反魂香「大名の手業にも、有るべき道具の足らぬのはひよんなもの大國

つばくろ

【法被】　半被、はんぴの轉、(一)武家の中間の上着、形羽織に似て其家の標(シルシ)などをつけたるもの、傳へて後世に至り印半纏となる。(二)能裝束の表衣の一種、袷にて胸紐もなく、形は狩衣に似たれど襟異にして袖に露(ツユ)を附けず廣辭、此所は印半纏のこと。

猿

【袈裟】　ケサ。(梵語 Kasāya の略、不正色と

譯す）僧侶の服、貪・嗔・痴の三毒を捨離したる表章として肩にかけて衣の上を被ふもの、木蘭色に染むるを正式とすといふ（無垢衣、功德衣、忍辱鎧）廣辭

【法師】　ホウシ。僧侶の通稱。廣辭。

鑑賞

なじみ易い民謠風の格調。諧謔と野趣を織りまぜた題材のえらび方、かうした所に此人獨自の境地をうかがふ事が出來る。「御嘶唄」とあるがよくあつてゐると思ふ。唄の歌や詩と異なる所に注意されたい。

補陀落や、岸うつ波はみ熊野の、那智のお山に響く瀧つ瀨、年はやう〳〵とをどをの、道をかけたる笈摺に、同行二人と記せしは、一人は大悲のかげ頼む、（歌）故郷を遙々こゝに紀三井寺、花の都も近くなるらん。「順禮に御報謝」と、いふも柔しき國訛り「テモしをらしい順禮衆、ドレドレ報謝しんぜう」と盆にしらけの志「アイ〳〵有難うどざります」と、言ふ物腰から爪はづれ、可愛らしい娘の子……　――淨瑠璃「傾城阿波の鳴門」順禮歌の段――

三この春

作者

【北原白秋】　キタハラハクシウ。名は隆吉、明治十八年一月福岡縣山門郡沖端村（柳河町の近在）生れ、早稲田大學文科に入つたが中途で退學した。新詩社同人として名を博したが、最近では、野口雨情・西條八十兩氏と共に、童謠界の第一人者である。詩集に「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩」に「白金の獨樂」「電と花火」「わすれなぐさ」「白秋小唄集」「水墨集」「日本の笛」、歌集に「桐の花」「雲母集」「雀の卵」散文集に「白秋小品」「雀の生活」「季節の窓」、童謠集に「とんぼの眼玉」「祭の笛」「羊とむじな」等頗る多い。

氏の作に對する評は色々の人によつてなされて居るが、左にその二三を掲げる。

目に見、耳に聞き、手に觸れたそのまゝをただ只管に詠み出でてゐるところに、冒すべからざる力が生じて來てゐるのである。この人の作には一切もう理窟もなく思案もなく、切端迫つたその場の感

情や、身に觸れて出る一途の官能によつて常に歌が生れてゐる。さうある事は元來人間本來の姿であつたがために、其の詠み出しの眞に迫つて出て來た時の作には、實にもう註釋のつけやうもない、所謂押しも押されもせぬ立派なものとなつて出て來る。極端な複雜と極端な單純とが一緒になつたやうな形である。それが一歩誤つて多少强ひて作爲せられた時の作となると、いかにも幼稚なわざとらしい厭味のものとなつてしまふやうである。（和歌講話――若山牧水）

白秋氏の歌はパッとした明るみの世界である。しかし明るみの中には寂しい涙が漂うてゐる。近代的な都會情調を詠んだものが非常に多い。情緒と官能の世界が多い。色彩は華やかに暖かく、調子は高くはないが、哀音惻々として、又快明煌々たるものである。作の匂ひは新鮮な果物を割いたやうな、美しく刺激に强いものである。要するに氏の神經と情緒がその作品の基調をなしてゐる。

白秋氏の特徴は、その表現に當つて、巧な譬喩を多く用ひたことにあるが、その譬喩が、直接官能から官能に訴へる態度――官能交錯の表現に成功したことである。視聽嗅觸の諸官能の機關作用を以て、部分的象徴から全體の情調を想起せしむる手法は、北原氏の象徴が尠くとも、その表現の上に、蒲原有明より更に複雜な地歩を確定したものと考へられる。（川路柳虹）

出所

〔季節の窓〕　大正十四年五月、東京アルス發行。定價金貳圓五拾錢。

内容、氏が新聞雜誌に發表した隨筆、歌話などを、十二ケ月の標題の下に順を追うて輯めたもので、「季節の窓」とはこれに因つて名づけたものと見えるが、其のはしがきに「季節ばかりを觀るのでない。凡てに私は自身を觀よう。さうして私の周圍の人と自然とに深い流通を求めよう。」と云つてゐる。本課は原文には「四月の言葉」と題して載つてゐる。

要旨

白秋氏の文によつて「たゞ俗事と云つてしまつてはならぬ、何でも己が勤めには忠實であれ」然し又「翻つて自然界を見よ、この春を見よ、何と美しく和かに又生氣溢るゝでないか」と生徒をして、田園の生活味、塵外の天地をも觀ぜしめんとしたのである。

段落

一、こゝに移り住んでから……春らしい春に出逢つたことはない。（一二頁七行まで）

こゝに移り住んでからこの春位しみじみ春を味はつたことがない。

二、ただわづかに……大きく見られたことであつた。（一四頁終りまで）

五六日の旅からかへると、あまりにも小田原の天地が、我が家のまはりが、又我が家が、急に春

らしい春に變つてゐるのに驚いた。

三、庭の花壇には……いよ〳〵紅く濕つて見えだした。（一六頁一行まで）

花壇の草花や野菜も一杯に芽生えたし、窓下の山吹も綻びたし、南天も紅く綻れてつや〳〵しくなつた。

四、つい前の……隣の春を樂しまずには居られなかつた。（一六頁九行まで）

隣や裏の小藪や丘の春をも樂しんだ。

五、つい二三日前の夜……新筍の五目飯に滿腹した。（一七頁五行まで）

蛙の遠音を聞いたり、筍を掘つたり刺身や五目飯を食つて、無上に春を樂しんだ。

六、かうしてまた……終りまで。

さて春は春として、醒つて又自分の勤めには徹夜で懸命である。

解釋

【しみじみ】よくよく。つくづく。深く心にしみて。（廣辭）

【並木】ナミキ。街道の兩側に、一列に松杉柳などの樹木を植付けたるもの。路幅を示し、又風を防ぎ、日光を遮る設けとす。列樹、行樹。（言海）。こゝは櫻の並木である。

【あの大地震】大正十二年九月一日、午前十一時五十八分、突如として關東一帶に起つたあの大地震。その震域は、東京・神奈川・靜岡・千葉・埼玉・山梨・茨城の一府六縣に亘り、最大震幅約四寸、安政大地震以後の新記錄を作る。殊に地震後、間もなく、各所に發生した火災は消防機關の全滅に乘じ、到る處猛威を逞しうし、東京市の大半、横濱・横須賀兩市の殆ど全部を烏有にし家屋人命の損傷幾くなるを知らず。我が國空前の大慘禍を見るに到つた。

【尖端】センタン。とがり。とがつたはし。

【匂ひこぼれて】あざやかにかをり出して。

【霜燒】シモヤケ。手足の端など、烈しき寒さに、傷められて、痛く、痒く、腫れて瘡（カサ）となるもの。「しもくち」「ゆきやけ」。（言海）霜燒すると、皮膚の色などが、紅潮を呈し、蒼青色を帶びるから、この鉾杉などが恰もそのやうな風を帶びてるので「霜燒した」といつたのである。

【鉾杉】ホコスギ。「ほこ」の如くのび立つた杉。「鉾」は、形槍に似て、雙刃劍形の身ある兵器。

【闌けたのに】タけたのに。たけなはになつたのに。やゝさかりをすぎたのに。

【傳肇寺】デンテウジ。小田原驛に近き天神山のほとりにある小さなバラックの寺。

【バラっク】 B.ir.ck. 粗造の假小屋。粗末な假住居。廣辭。

【蘇枋】 スハウ。（スオウと發音する）。熱地に產する喬木、黃花を著く。材は楊弓などに作り、その削屑は赤紫色の染料とす。蘇方、蘇芳、蘇木。字源

【木兎の家】 ミヽヅクのイヘ。作者、白秋氏が居住せる小田原町にある寓居の名。「木兎」は又木菟、角鴟など書く。ふくろふに似た鳥で耳のやうな毛角がある。夜間に眼の見える鳥で、出でて小鳥などを捕へて食ふ。氏の家の附近では夜な〳〵この鳥が鳴いたから名づけたのであらう。

【造花】 ザウクワ。紙又は帛などを切つて、花の形を模し造ること。又その作つた花。つくりばな。廣辭。

【眞紅】 シンク。濃い紅色。「深紅」ともかく。廣辭。

【緋桃】 ヒモヽ。桃の一種。花の緋色なるもの。廣辭。

【蕗】 フキ。菊科の多年生草本。山野に自生し、又園圃に培養せらる。匍匐せる地下莖より葉を生ず。葉は大形にして圓き腎臟形をなし、長くして中空なる葉柄あり。早春、葉に先だちて、地下莖より花莖を出す。これを蕗薹（フキノタウ）と稱す。款冬。苓。廣辭。

【棕櫚】 シュロ。棕櫚科の常綠喬木、暖地に產す。觀賞用として庭園に栽植せらる。幹は高さ二丈餘に達す、圓柱形にして直聳し、其の先端に掌狀に分裂して大形の羽團扇に似たる葉を簇生す、五六月の候、幹頭葉腋より分枝せる花穗を出し、淡黃色の小花を綴る。廣辭。

【孟宗林】 マウソウリン。孟宗竹の竹林。「孟宗竹」は竹の一種、支那江南地方の原產。我が國各地に栽培せらる。幹は高さ四五丈、周圍一尺內外に達す。圓柱形にして中空、節間短し。廣辭。

【楚々】 ソヽ。あざやかなる貌。詩、檜風、蜉蝣之羽、衣裳――」、いばらの茂りたる貌。詩、小雅「――者茨、言抽其棘。」字源。

【下萠えの深い綠】 地からふき出した若芽の濃い綠。

【なづな】 一名「べんべんぐさ」。十字花科。田園路傍庭園等到る處に多き越年生草本。四五寸乃至一尺餘の莖を抽き分枝して總狀花穗をなし開花す。花は小にして春より夏にかけて咲き、白色。（植物圖鑑）。

【さかしく】 かしこく、こざかしく。かうまんちきに。

【ひわれて】 干割れて。地面が芽生えのために、干て割れたやうに、割裂けて。

【金蓮花】 キンレンクワ。のうぜんはれん。「產地」、南米の原產にして觀賞用として栽培せらるゝ一年生草本。「形態」、莖は蔓性をなし直立せず、多く枝を出し長さ數尺に及ぶ。葉は互生し細長なる葉柄端に楯狀をなす。「花

期」、夏季。「花色」、瓣彎共に黄色、その他種々の色あり。「のうぜん」は「のうぜんかづら」の略、「はれん」は「葉蓮」にして、花は「のうぜんかづら」の如く葉は蓮の如しとの意なり。（植物圖鑑）。

【藿香蓟】　クワクカウアザミ。きく科。「產地」熱帶亞米利加原產の一年生草本。「形態」莖は高さ一二尺、葉と共に軟毛多し。葉は對生して、葉柄あり。卵形或は多少心臟形をなす。頭狀花は梢に繖房狀に相集り、管狀花のみよりなる。「花時」夏時。「花色」紫色。（植物圖鑑）。

【向日葵】　ヒマハリ。きく科。「產地」庭園に培養する一年生草本にして「メキシコ」の原產。「形態」、莖の高さ六七尺に達す葉は互生し心臟形を呈し、葉柄を具ふ。「花期」八九月頃莖頂並に枝梢の頂に大形の頭狀花を開く。「花色」、黄色。（植物圖鑑）。

【雛芥子】　ヒナゲシ。けし科。「產地」、歐洲原產にして庭園に栽培せらるゝ越年生の草本。「形態」、莖の高さ一二尺、粗毛を有す。葉は羽狀に分裂せり。「花期」、五月頃。「花色」深紅色、其の他種々の色あり。（植物圖鑑）。

【二葉】　フタバ。草木の芽出しの二枚の葉。嫩葉。廣辭。

【ひとり生え】　蒔いたのでないのに、前年散りこぼれた種から、ひとりでに生えて來たもの。

【葉雞頭】　ハゲイトウ。ひゆ科。觀賞用一年生草本。莖の高四五尺に達す。葉は「けいとう」の葉より長大にして、黄色及び紅色等の斑をなし、頗る美觀を呈す。夏秋の候、黄綠色の花を開く。（植物圖鑑）。雁來紅ともいふ。

【山吹】　ヤマブキ。いばら科。庭園の觀賞植物なれども、亦山野に自生する落葉灌木。莖の高さ四五尺、葉は互生す、新葉を生じて後開花す。單瓣と重瓣とあり。花は黄色。（植物圖鑑）。

【南天】　ナンテン。めぎ科。我が邦中部以南の諸州には自生すれど、通常庭園に栽培せらるゝ常綠灌木。莖高四五尺を常とすれど大なるは一丈に達す。多數の花を圓錐花序に排列す。小花にして、果實は球形、熟すれば通常赤色を呈す。花期は初夏にして、色は白。（植物圖鑑）。

【紅く濕つて】　ヮカくシメつて。紅く熟して來るとつやが出て「しめつた」やうに見えるのである。

【蒲公英】　タンポポ。菊科。原野に最も普通なる多年生草本。早春より通常羽狀に分裂せる根出葉を叢生す。三四月の頃、葉間に彎をぬき頭狀花を着く。花は黄色、花後果實は褐色を呈しその上部小梗狀に延び、頂に白色の冠毛を着く。（植物圖鑑）。

【つくしんぼ】　つくし。つくづくし。土筆、筆頭菜。杉菜の地下莖より生ずる子囊群の

莖。

【杉菜】　スギナ。とくさ科。到る處の荒地に多き宿根草本。胞子莖と營養莖との別あり、何れも宿根の節々に生ず。胞子莖は通常「つくし」と稱する筆頭狀のものにして、三四月の頃營養莖に先立ちて生ず。營養莖は通常「すぎな」と稱せらるゝものにして、多く枝を輪生し、退化せる葉を有すること「とくさ」に同じ。綠色を呈す。(植物圖鑑)。

【虎杖】　イタドリ。たで科。山野に多き多年生草本。莖の高さ一二尺乃至三四尺、卵狀楕圓形の有柄葉を互生す。葉腋に小花を穗狀に開く。筍狀をなせる嫩莖は食用とす。(植物圖鑑)。

【嫩芽】　ワカメ。若芽とも書く。

【御形】　オギヤウ。はゝこぐさ(鼠麴草)の異名。春の七種(ナヽクサ)の一。菊科、鼠草屬の越年生草本、高さ五六寸乃至尺餘。葉は柔くて白毛がある。秋苗を生じ、翌年春夏の頃黃色い花が咲く。(植物圖鑑)。

【蓬】　ヨモギ。山野に普通の多年生草本、莖の高さ二三尺に達し、葉は互生し、羽狀に分裂して、裏面に白毛を密生す。香氣あり。夏秋の候、莖梢の枝上に花を開く。淡褐色小形頭狀花にして穗狀を綴る。春日新苗を採り、草餅の料とす。故に「もちぐさ」の方言あり。又艾(モグサ)を製するに用ふ。(植物圖鑑)。

【みづみづし】　若く榮えて麗はし。肥えて光澤(ツヤ)あり。言海。

【ころ〳〵】　(一)ころがり行く狀にいふ語。(二)鈴の鳴る音にいふ語。(三)猫などの喉を鳴らす音にいふ語。言海。こゝは(二)。蛙の遠音が恰も鈴の鳴るやうであつたから云つたのである。

【ほの黃色い】　「ほの」は、仄(ホノカ)に、幽(カスカ)に。接頭語。

【鰹】　ムツ。鯉鰭類の魚、體は延長して「すゞき」に類し、薄き櫛狀の鱗を被る。眼大きく下顎少しく前出し、體長二尺に達す、深海魚、肉は脂肪に富む。我が國太平洋面の北東に多く產す。ろくのうを。一二月頃淺所に來り產卵す。廣辭。

【鯵】　アヂ。鯉鰭類の魚、體長一尺に達す。體は長楕圓形をなし、腹底は水平なり、鰓下より尾まで一條の刺あり、北海道より西海道に至る沿海諸所に產す。種類多し。廣辭。

【五目飯】　ゴモクメシ。魚肉又は野菜など種々のものを混ぜて焚ぎたる飯。「五目」は種々なるものの入りまじりたること。「一ずし」。「一めし」。「一づけ」。「一豆」。「一淨瑠璃」など。廣辭

【じやがたら漬】　朱欒漬。「朱欒」は夏蜜柑に類し、皮の厚さ六七分、香氣高く味美なり、之を砂糖漬にしたもの。

【ジアスターゼ】　又、ジヤスターゼ。Diastase. 酵母の一、帶黃白色・無味・無臭なる粉

末にして、その水溶液を澱粉に作用せしむる時は、謂はゆる加水分解作用を生じて、これを糊精と麥芽糖との混合物即ち飴に變ぜしむる特性を有するもの。乾燥粉碎せる麥芽を原料とし、酒精を加へて沈澱せしめて採集す。胃腸藥として用ひらる。糖化素、糖化酵素。

「タカヂァスターゼ」は藥學博士高峰讓吉の創製、「タカ」は高峰の高に因めるもの、ヂァスターゼの創製品として、最初に世に出でしもの。〔言泉〕。

【懸命】ケンメイ。いのちがけ。ちから一ぱい。一所懸命。

鑑賞

「春」を到る處に見つけて、實に愉快な文である。詩人はかうして餘裕綽々、併しこの懷しい氣持は作者の如き詩人獨自の心とのみ云ひさるべきでない。心の眼一つで誰でもが、色々の趣は味はひ得るのである。

實に、かうした文章を讀むと生徒も自ら明るい快い感じがして、その作文力もまた伸びるであらう。

修辭上について。

本課一四頁四行目から一四頁終りにわたつて最も著しい漸層法が行はれてゐることは見逃してはならぬ。

わたくしは家のはいり口……のアネモネの花をも見つけた。（第一層。）

而もそれよりもつと……姿の薄黄であつた。（第二層。）

いや、その下萠えの深い綠であつた。（第三層の一）

雨に濡れた白いなづなの花のむらがりであつた。（第三層の二）

いやまだ驚いたのは吾が子の顏であつた。（第四層の一）

姿であつた。（第四層の二）

急に目立つてさかしく大きく見られたことであつた。（第四層の三）

「而も」「それよりも」「いや」「いやまだ」と接續詞や副詞や感動詞で旨くあしらつて、一層は一層と深刻に言ひあらはしてゐる。

挿　畫

「春」（一三頁）

帝展第八回出品。堂本印象筆

堂本印象。明治廿四年京都市に生る。大正十三年以來帝展審査員となり斯界の重鎭である。

四　お遍路さん

作者

【荻原井泉水】ヲギハラ（ワラと發音）セイセンスヰ。俳人。名は藤吉、明治十七年六月、東京市芝區神明町に生れた。第一高等學校を經て、明治四十一年東京帝國大學言語學科卒業、大學院に入つて三年間研究を續けた。子規歿後、新傾向の俳句を主張し、明治四十四年機關雜誌「層雲」を創刊し、現にその主幹として、新俳句の提唱につとめてゐる。著に「自然の扉」「生命の木」「俳句提唱」「ゲーテ言行錄」「奥の細道新釋」「新しき俳句を見よ」「句作捷徑」「芭蕉句選略解」「新俳句提唱」「俳壇十年」「古人を說く」「昇る日を待つ間」「山水巡禮」、「チツクタツク」、其の外近くは「芭蕉の生活と藝術」「一茶と云ふ人の事」「芭蕉早期の作風」「詩と俳句」等を諸雜誌に發表し、俳句や詩も「層雲」や「詩聖」等に出してゐる。

氏はいふ「俳句は自然の詩だ、自然の深い心に尋ね入るべき細い道として俳句の道があると私は見る。それ故俳句は象徵詩だ。俳句の端的な表現も亦象徵的なリズムを持つべきである。私達は好ん天然を詠ふ。それと共に人間を詠ふ。人間を詠ふのは其の魂の底の自然法爾の——萬有に共通する生命を求めるからである。單に一つの美意識としての自然を詠はない。又單に或る氣分としての人間を詠はない。」と。以て其の主張を窺ふべきである。

出所

『山水巡禮』大正十年七月十五日。東京牛込區椚寺町聚英閣發行。定價金一圓八十錢

内容、氏の感想隨筆を集錄したもの。山の溫泉・夜の宿にて・高原の初秋・高原の晩秋・椿咲く島へ・島から島へ・裾野めぐり・頂上まで・浴泉雜記・山莊雜記・奥の細道の跡・淸澄詣等十二篇から成つてゐる。本課はその山莊雜記中より採擇した。

要旨

我等の周圍はあまりにも欺瞞・爭鬪が多い。たとへ信仰の念お遍路さんに及ばずともあの生活は讃美し度い。あの心は學び度い。我等も皆人生の遍路でないか。時にこの春をも味はしめるが、又一方この遍路のやうな心持にもなつて、信と愛の生活をも知らしめ度いのである。

段落

四　お遍路さん

一、りん〳〵といふ冴えた音が……女の脚では六七日かゝると云ふことである。（一九頁四行まで）

四國八十八ケ所の靈場を遍歴するのがお遍路さんである。併し四國一周は大抵の事でないから、小豆島にある八十八ケ所を一巡しても同じ功德が得られるとされて、この「島四國」を遍路するのである。

二、岡山から……彼等の先達が振つてゐるものと見える。（二〇頁三行まで）

「島四國」のお遍路さんは普通土ノ庄港へ着いて、そこから順に參詣の道を辿る。そしてその菅笠金剛杖で海の光を浴びながら麥畑の中を通る姿は一幅の繪といひ度い。

三、お遍路さんは……お遍路さんを渡して來る。（二〇頁七行まで）

そのお遍路さんは、日も長閑で又農閑でもある四月頃に一番多い。

四、一體遍路といふものが……彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。（二二頁九行まで）

お遍路さんはただ一つの眞實の道を信ずる事によつてお互に心の繋ぎがある。誠に美しい愛の世界をなしてゐる。だから到る處で愛されるし、又彼等同士も信頼する。

五、而してこの事は……終りまで。

併し私達も人生の遍路である。しかも私達の周圍はその美しさがない。私達は皆お遍路さんに學ばねばならぬ。そしてお遍路さんのやうに愛と信とで人生を歩き度い。

解　釋

【冴えた音】　澄み切つたひゞき。

【山裾】　ヤマスソ。山の麓、麓の山は「裾山」「端山（ハヤマ）」などいふ。

【山莊】　山の別莊。この文は井泉水の「山水巡禮」中の「山莊雜記」の一節であるが、それにこの山莊の事について次の如く書いてある。

「私が此の小豆島に渡つて來たのは二年越の約だつた。初めIから、內海の風光を見乍ら自分のうちに淹留するやうにといふ好意の言葉を受けて以來、其の機會を見出し得ずに今日になつたので、その今日を島の同人は喜んで呉れた、而してIは、山にある自分の別莊が、不便な事は不便だけれども私の氣に入つたならば、そこに寢泊りしてくれていゝと云つて呉れた。（中略）。此の別莊は、淵崎村の1の本宅から三丁程、山の小徑を登つた所にある一軒家だつた。山の傾斜には蜜柑の樹がみつしり植ゑてある。（中略）。此のあたりから下は一面の麥畑で、それが海に近く低くなつた裾に、淵崎村の家の屋根が並んでゐる。淵崎に續いて上から見れば一つの町であるや

うに土庄町が見える。」云々。

【お遍路さん】　四國札所を順禮する事を、四國遍路また遍路といひ、轉じて順禮者をも遍路、お遍路さんといふ。阿波・讃岐・伊豫・土佐の四國の弘法大師の靈場八十八ケ所を順禮するのである。その通路を遍路道といひ、石標を立てて里程を表記する。この遍路は四季を通じて行はれるけれど、春季に最も盛んで、男女老幼が一定の服裝をして、絡繹として衣袂相連るといふ有樣である。大概四十日乃至五十日で、八十八箇所を巡る。順禮者の飲食宿泊の設備があるけれど、同地方の人々は善根と稱して遍路道に出て、飲食を施し、且自宅に誘行して接待する　偶々乞食の混入する事があるけれど、同地方の人々は殆どこれを見誤ることがないといふ。それ故乞食は殊に遍路以外の道路に至つて供養を受ける。また癩病者などの常に巡禮を繰返してゐる者もあるが、靈場には特に彼等を收容する設備があつて、他の順禮者と區別してゐる。巡禮者は諸國人であるが、四國人に多く、殊に阿波國の人が多い。阿波國の人は男女を問はず幾回となく巡禮するものがある。未婚の女子は新裝をこらして順禮する。順禮者は男女老幼とも菅笠を戴き、白木綿の襦袢を着、金剛杖を携へ、札挾み(竪七寸、横三寸)を帶びてゐる。菅笠の表面四方に、迷故三界城、悟故十方空、本來無東西、何處有南北」の四句を

四行に分書し、襦袢の背部に「奉納四國八十八箇所靈場巡拜同行二人」と一行に記し、札挾の札にも同文を一行に書く。順禮者が一人でも必ず同行二人と書く例になつてゐる。順禮、札所に到着すれば、本尊を禮拜し、靈場の詠歌を唱へ、札挾みの札一葉を納め、襦袢の背部に靈場の印を請ひ、經料賽錢を納める。百科

【四國八十八箇所】　四國に於ける弘法大師の遺跡たる八十八箇所をいふ。大師を信ずる徒は、之を巡拜して祈願する。その起源は詳でないが、江戸時代に行はれたものである。諸國でも之に模して、新に八十八箇所の靈跡を設けるに至つたので、之を區別する爲に、特に四國八十八箇所と稱するのである百科。

【弘法大師】　眞言宗の開祖、僧空海の諡號。姓は佐伯、父を田公といひ、母は阿刀氏である。讃岐多度津の人、幼少の時出家して佛典を學び、後入唐して慧果の教を受け、大同元年歸朝した。弘仁七年高野山に金剛峰寺を建て、眞言宗を唱へて朝野の信仰を受けた。承和二年三月二十三日入寂。年六十二、延喜二十一年弘法大師の諡を賜つた。また書道に達し、三筆の一人に數へられる。本地垂迹の說はその創說するところである。百科。

【靈場】　神佛の靈驗のあらたかな土地。れいち。廣辭。

【遍歷】　諸國をめぐること。周遊、歷遊。

廣辭

【大抵】　タイテイ。（一）おほかた。おほよそ。たいがい。（大概）。（二）ひととほり。なみなみ。普通。廣辭こゝは（二）

【小豆島】　セウドシマ。讃岐大串崎の北方海中にある島。島中に寒霞溪の奇勝がある。

【功德】　クドク。佛教の語、善き作業。功力。言海。行已に足りて德外に及ぶこと。善行のめぐみ。積善の力。廣辭。

【島四國】　シマシコク。小豆島の中に四國八十八箇所に準じて八十八箇所が設けられてある。それを巡禮するのを島四國といふ。

【土庄港】　トノシヤウミナト。小豆島の西南端鹿島の南にある。高松から十二海里、岡山から十八海里である。

【發足】　ホツソク。かどで。たびだち。出立。首途。廣辭。ハツソクとも讀む。大觀

【札所】　フダショ。三十三所の觀音詣の其の觀音堂を稱する語、詣づる者、詣でたる證に札を受く。言海。三十三箇所又は八十八箇所等の靈場。參詣者が參詣の證として札を受けし所廣辭

【辿る】　タドる。〔手取る義〕（一）尋ね探り取る。摸索。（二）知らぬ道を色々と迷ひ尋ね行く。尋。（三）知り分けんと樣々に思ふ。尋思。言海。こゝは（二）。

【菅笠】　スゲガサ。すげ（草の名、形狀すべて茅に似て、滑にて毛なし）の葉で編める笠。言海　菅の葉の廣きものを笠とし、狹きを簑とす。因て、簑ー、笠ー、の稱あり。言海。

【裾をからげて】　着物の裾を端折つて。裾などの端を折つて帶に挾む。

【手廻りの物】　テマハリのモノ。手廻り荷物、旅などに、手近に置く荷物。廣辭。

【紐】　ヒモ。

【札箱】　フダバコ。納經帳に自分の名が書込んであるものが入れてある箱。この箱は胸につるしてゐる。

【塔婆】　タフバ。卒塔婆の略。〔梵語、高線の義、方墳などと意譯す〕佛高顯の物を好むとて木石にて地水火風空の五層の高き物を作りて佛に供するもの、高く家に作れるを、更に略して塔とのみいふも是れなり。言海。墓の後に立つる、上部の塔形をなしたる細長き板、經又は梵語などをしるせるもの。廣辭

【塔婆形に刻んだ金剛杖】　頭の部分を卒塔婆の形に作つた金剛杖。金剛杖は修驗者などの持つ杖。白木で八角なもの、堅固の信念を表して名づけたもの。金剛は佛經にいふ七寶の一で堅固を表する。廣辭

【先達】　センダツ。（先立の湯桶讀か）（一）藝術に最も長けて、同輩の師となるべきもの。（二）修驗者の勤行を積みて、峯入の時など、同行に先立ちて先導するもの。言海。こゝは（二）。同行の先導者の意。

【長閑】　ノドカ。（一）ゆつたりしてあること、おちつきてしづかなること（悠然）。（二）空晴れて天氣うららかなること。日和のおだやかなること（晴和）。廣辭。こゝは（二）。

【大師の教門を弘くする】　弘法大師の宗門を世にひろめる

【信念】　（一）信仰の念、宗教心。（二）自信力。廣辭こゝは（一）。

【信頼】　信じたよること。廣辭。

【扶助】　フジョ。力をそへること。たすけること。廣辭。

【紛失】　フンシツ。まぎれうすること。物のなくなること。言海　生徒は紛失などと誤記し易い。

【眞實の道】　いつはりのない、まことの道。

【繋がる】　ツナがる。つらなる。つゞく。

【意識】　イシキ。かんがへ。心理學上の語で、心の作用の一切。又、心の覺醒してある狀態。廣辭。

【この道】　この眞實の道。

【參ずる】　まじはり加はる。

【南無大師遍照金剛】　「南無」は梵語、歸命頂禮の義、佛に祈る時に發語の如く用ひる。「―阿彌陀佛」「―三寶」言海。歸依する佛菩薩などに祈る時、冒頭に用ひる辭。廣辭「遍照金剛」は空海が宗門に入り、登壇灌頂して受けた名號である。南無弘法大師様といふ程の意。

【讃仰】　サンガウ。仰いでほめたゝふること。（無我山房佛教辭典）普通の辭典には鑽仰の文字はあるが、讃仰の方は見えない。言泉の「さんがう」の條に、鑽仰の文字を出し（一）〔佛〕研鑽し渴仰すること。（二）さんぎやう（鑽仰）を見よとしてある。そして「鑽仰（ガウ）の峯に攀ヂ」の句のところに、太平記を引いて「三諦（タイ）止觀の月を弄び、讃仰の峯に攀ぢて」となつてゐる。「鑽仰」については廣辭・詳漢に下の通り出てゐる。サンカウ。サンギヤウ。教をうけてその德をあふぎしたふこと。論語に「仰レ之彌高（ゲバ）鑽レ之彌堅（キレバ）」とあり。廣辭。學德を仰ぎ尊むこと。詳漢。

【欺瞞】　キマン。あざむきすかすこと。だますこと。廣辭・言泉。ギマンと濁るは非。

【人生の遍路】　人の一生は、丁度遍路をしてゐるやうなものであるとの意。

【銘々】　メイ〳〵。各自。おの〳〵。

【負はねばならぬもの】　義理人情などをさす。

【行事】　ギヤウジ。（一）古、朝廷の儀式・佛事などに主としてその事をとりあつかひし役。（二）又その行ふ事から。こゝは（二）より轉じたもの。

【暗示】　アンシ。アンジ。（清音で示したもの言泉・字源、並記したもの詳漢。（一）理由又は意志を明瞭に擧示せず、擧動・容貌等によりて、これを他人

に傳へること。卽ちそれとなくをしへ示すこと。(二)(Suggestion)心理學上の語、意志の媒介を經ずして、直接に精神的又は身體的の活動を開發する觀念作用。こゝは(一)。

鑑賞

情味豐かな感想文である。讀者をして眞にしみじみとさせる。純眞のお遍路さんを外觀から、精神から描寫して、詩のやうに美しく繪のやうに鮮かである。末尾「私達は皆人生の遍路である。しかも私達の周圍にはこのお遍路さんに見るやうな信賴と扶助が行はれてゐるだらうか。」といふ部分には深い省察がある。

挿繪

「お遍路さん」(二十一頁)

栗原玉葉筆　文展第九回出品「お鶴」

栗原玉葉。名は文子。明治十九年長崎に生る　女子美術學校を卒業し寺崎廣業の門に入る。爾來母校で教鞭をとつてゐた。

五　淨瑠璃寺への道

作者

【和辻哲郎】ワツジテツラウ。思想家・評論家。明治二十二年三月一日、兵庫縣神崎郡砥堀村大字仁豊野に生れた。姫路中學、第一高等學校を經て、明治四十五年東京帝國大學文科大學哲學科卒業。大正八年東洋大學教授となり、日本倫理史を擔當したが、現在は京都帝國大學助教授である。篤實な少壯學者として、又新進論客として知られてゐる。著に「ニイチェ研究」「ゼエレン・キエルケゴール」「偶像再興」「古寺巡禮」「日本古代文化」等の外、小說、飜譯もある。

出所

〔古寺巡禮〕大正八年五月二十三日、東京神田區南神保町岩波書店發行。定價金貳圓五拾錢。

內容、作者が京都奈良を中心とせる附近の古寺を探つた時の旅行記感想記である。巡つた寺々に於て見聞した彫刻・繪畫・佛像等の藝術品及び之を通して見たその時代々々に對する感想・批評等を書

いたものである。

「元來この書は旅行記であり、感想の集錄であつて、嚴密な學問の書ではない。印象を叙述するために多少考證に亘つたところもあるが、それは旅行の途次に得た空想を根據附けようとする努力に外ならぬ。……しかしこの書が自分にとつて多くの研究の動機を含んでゐることは、こゝに告白して置かなくてはならない。この書に於て感想空想に過ぎぬものもやがては學問的に精密な歴史的理解或は藝術や文化に關する理論に生育すべき芽である。」とは作者のはしがきにある言葉である。一、アヂャンター壁畫の模寫、――希臘との關係。宗教畫としての意味。――波斯使臣の畫。二、哀愁のこゝろ。三、南禪寺の夜。四、若王寺の家……本章はその七に出て居る。この他鹿野苑の幻想・奈良博物館・數多き觀音像・天平の彫刻家・伎樂面・法隆寺天蓋の鳳凰と天人・光明后施浴の傳說・天平の女・天平の僧尼・唐僧鑑眞・奈良朝と平安初期・金堂藥師如來・藥師寺に就いて・久米寺・岡寺・東大寺南大門・法隆寺・五重塔の運動・金堂壁畫・夢殿・中宮寺等四十七篇から成つてゐる。

要旨

作者が南山城に於ける古刹淨瑠璃寺へ出かけた時の旅行感想記である。先づ挿入の大和名所圖繪所載の同寺の圖によつて、遠くこの山上の名刹を想起せしめ、然る後靜かに熟讀して作者が、この道中に於て又平和な山上の寺に於て抱いたその心境を十分に味はゝせ度い。そして曾遊の地、神社佛閣等に於ける各自の體驗を喚起せしめるなど、姑くそのゆかしい追憶に耽らしめ度い。

段落

一、今日は淨瑠璃寺へ行つた……また案外面白かつた。（二四頁四行まで）
　淨瑠璃寺へ行つたが案外面白かつた。（總說）。

二、奈良の北の郊外は……飽きずに車の上からこの景色を眺めてゐた。（二六頁七行まで）
　奈良市の北、奈良坂を越えるともう大和とは違つた氣がする。道は小山の中腹を通ずるが、山は砂山めいた禿山で雜木や小松の外、木らしい木はなく、その間々につゝじが咲亂れ、南大和では到底見られない景色であつた。この禿山の景色が古馴染らしい親しい感じを與へた。

三、この途の感じが……やうやく淨瑠璃寺についたのである。（二一頁九行まで）。
　この道中はなか〳〵遠かつた。始は畑と山との美しい色の取合せを俥上から賞めて居たが、雨上りのでこぼこ道に、とう〳〵我慢がしきれなくなつて車を下りた。そして汗をふき〳〵、新綠を見ながら、坂を攀ぢ坦道を拾つて、漸く長閑な山上の村の一隅に淨瑠璃寺を見つけた。思ひがけない所にあつた。併し平和ないゝ氣持であつた。

四、さてこの山村の麥畑の間に立つて……終りまで。

1、周圍と調和したこの寺の外觀も、內らの庭も、本堂も、三重塔も、そんな筈はないのだが、どうも初めて接した感じではないやうな氣がした。

2、そしてこの山上の凡ての物が祕めやかな魅力を以て我々の心を動かした。桃源とか淨土とかいふ事は昔の逸民の空想として一顧の價値も認めなかつたが、この寺を見るに及んでその夢想に共鳴する或物を持つてゐる事に氣がついた。

解　釋

【淨瑠璃寺】 眞言律宗の寺。山城相樂郡當尾村大字西小にあり。西小田原山と號す。俗に九體寺といふ。聖武天皇　天平三年行基に勅してこれを建立し、藥師如來の像を安置す。光明皇后御不豫の時、この本尊に祈誓して忽に平癒あり。叡感のあまり吉祥天女の像を彫刻して寄附し給ふ。天祿二年源滿仲、母の心願により定朝佛工をして九體の阿彌陀佛を彫刻して丈六堂を建立してこれを安置す。故に九體寺といふ。本堂は間口十三間、奥行五間、向拜二間、屋根は四注造、本瓦葺なり。又三重の塔婆あり。共に明治三十年特別保護建造物に指定せらる。寺內多くの國寶あり。南山城に於ける名刹にして殊に九品佛の古像の存するは唯この寺のみなるべし。〔百科〕。

【ひよろ〳〵】 (一)足のふみどのたしかならざるさま。(蹌踉。蹣跚。(二)勢なげに長く伸びたるさま。(三)進行の勢なげなるさま。「清盛がひよろ〳〵矢」〔廣辭〕。こゝは(二)。

【赤松】 一名「めまつ」。松の種類中最も普通のものにして、樹皮の赤色を以て名づけらる。幹は高さ十丈に達することあり。葉は針狀にして二本づつ叢生し、稍柔軟なり。雌雄同樣にして新芽の頂端に二三個の雌花叢をつけ、其の下部に黃色米粒狀をなせる多數の雄花叢あり。毬果は卵形を呈し翌秋に至りて熟す。花期五月頃。(日本植物圖鑑)。

【雜木】 ザフキ。種々雜ざりたる粗末なる木。取りまぜて薪とする散木。〔廣辭〕。

【山の肌】 山の表面。

【しがみつく】 力をこめて勢急にとりつく。むしやぶりつく。

【その南の方の山々】 畝傍山や多武峰・吉野山などをいふ。

【柏餅】 カシハモチ。(一)餅菓子の名。糝粉又は糝粉に糯粉とを雜ぜたるものを蒸して揑ね、圓形扁平狀のものに作り、これを二つに折りて、中に餡を入れ、柏の葉に包みて蒸したるもの。五月節句の供物とす。(二)一枚の蒲團にくるまりて寢ること。〔廣辭〕。こゝは(一)。

【柏】 カシハ。山地に自生すれども、亦人家

に栽植する落葉喬木。葉は濶大なる倒卵形にして長さ四五寸に達し邊緣に波狀の鈍齒を有し、下面に褐色の毛を生ず。此の葉長く枝上に存し、翌年嫩芽開出するに先だちて脫落するを常とす。葉と共に花を開く。穀斗は淺くして平椀狀をなす。花期四五月頃。花色、黃褐色。葉は餅に包むに用ふ。（日本植物圖鑑）。

【燒餅薔薇】　ヤキモチバラ。恐らく方言であらう。普通の辭書や植物學の書に見當らない。或は「さるとりいばら」のことかと思はれる。

「さるとりいばら」は、百合科牛尾菜（シホデ）屬の落葉灌木。蔓莖を有し他物に攀緣し　多く刺を有す。葉は卵形又は楕圓形、托葉は變じて卷鬚となれり。初夏、黃綠色の花を開き、繖形花序に排列す。我が國、各地の山野に自生す。地下部を藥用に供す。いぎんどう。いぶついばら。おほうばう。（大國）。

【蟬の聲が何となく心細さを誘ふまで】　日の入りになると蟬もあわただしいやうな鳴き方をするが、どことなく力なく、ある寂しさを帶びて來る、その頃まで。

【妙に】　どういふわけか不思議に。

【櫟林】　クヌギバヤシ。「櫟」は穀斗科の落葉喬木、樹皮は暗褐色で深く縱裂してゐる。葉は長楕圓形又は披針形で、先端尖り鋸齒があつて栗の葉に似てゐる。果實は「どんぐり」

（團栗）と俗にいふ丸形のものである。

【本道】　ホンダウ、正しい道路。

【峰づたひの坦々たる道】　峰に沿うてゆく平かな道。「一づたひ」は名詞に添へて、これにつたはる意を表する語。「石づたひ」「濱づたひ」。「坦坦」は平かなるさま

【石地藏】　「地藏」は地藏菩薩の略。地藏菩薩は釋迦佛の付囑をうけ、その入滅より彌勒佛出世に至る間の六道能化にあたると稱せらるる菩薩、我が國にては多く鬚髮を剃除し袈裟を被たる形相圓滿なる頭陀の像を石にてきざみこれを路傍に建つ。石にてきざみあるを以て「石地藏」といふ。（廣辭）

【幽邃】　イウスヰ　景色のおくぶかくして、いとしづかなること。

【はみ出してゐる】　餘つて間から外へあらはれ出てゐる。「はみ」は、食（ア）み。

【だらだら上り】　なだらかな上り道。「一下（オ）り」はなだらかな下り阪。

【この村の寺らしく納まつてゐた】　この長閑な平和な村の檀那寺かのやうにおちつきすまして建つてゐた。名刹であるからもつと堂々たるものであると豫想して居つたのに。

【野趣】　ヤシュ。ゐなかのおもむき。のはらのおもむき。

【風情】　フゼイ。（一）あぢはひ。おもむき。（二）あしらひ。もてなし。「何の風情も御座なく」。（三）同種類のものども。「私――」。「藝

人――」きやつ等――」廣辭。こゝは(一)。「けしき」「ながめ」又、(一)の意味の時は「フウジヤウ」とも訓む。

【本堂】　寺院の本尊を安置する殿堂

【塔】　タフ。(一)イ、或は舍利を藏するため、或は供養のため、或は報恩のため、或は靈地を表するために設くる建築物、土石を積み又は木材を構へ層高く作り、三重・五重乃至十三重等とす　眞言宗にては大日如來の三摩耶形とし、一切衆生に無限の功德利益を與ふべき萬德總攝の結晶體として最も貴重せらる。ロ、そとば、たふば。(二)高く顯はれ聳えたる建築物。「紀念―」「廣告―」。廣辭。こゝは(一)のイ。

【しつくり】(一)物のよく合ふさま。「體にしつくりあふ」。(二)事のおだやかに治まるさま。「もめがしつくり治まる」。廣辭。こゝは(一)。

【下界】　天上に對して、此の世界の稱。人間界。

【抱合つて】　しつくり合つて。

【和らぎ】　むつまじき親しさ。平和。

【祕めやかな魅力】　祕してこつそりもつてゐた人をひきつける力。

【桃源の夢想】　夢にみる桃源のおもひ。「桃源」は、世間を離れた別天地、仙境、陶潛の桃花源記に「晉の太元年中武陵の人其の地の桃林中に小孔あるを見て、これに入りける

に、別天地ありて先世秦の亂を避けたるものの子孫のみ住居し、少しも世の變遷を知らず」とあるに出づ。

【淨土の幻想】　幻にうかぶ極樂淨土のおもひ。「淨土」は、佛・菩薩の居所にして、三毒五濁の惡業なき清淨なる國土。三世十方の佛菩薩の數は無量なるが故に、從つて淨土の數も亦無量なりとす。極樂淨土の如きも亦其の一なり。然れども極樂往生の說盛に唱へらるゝに及び、單に淨土といへば極樂淨土を指すに至れり。廣辭。

【山上の地を擇ばせ云々】　桃源の夢想と淨土の幻想とが結びついて、昔の人にこの山上の地を特に選擇させこの池のほとりのお堂を建てさせたのであらうといふのである。

【共鳴】　他の行動を感受して、心に其の影響の生ずること。昔の人は、かういふ處が淨土や桃源であらうと幻想し夢想してこの堂を建てたらしいが、我々もその夢想には、なるほどと共鳴するといふのである。

鑑賞

この叙景とこの感想を以てせられると、もう淨瑠璃寺への道も、その寺も、その山上の平和な村も、幻のやうに浮ぶ。そして作者の「我々の心が和らぎと休息とを求めて居る時には、平凡な光景も、祕めやかな魅力で我々の心の底のあるものを動かす」といふ心境に自ら共鳴し、今更の如く敎へ

られる。

發端に「今日は」とあるので、作者が連日、かうした古い寺々へ出かけてゐる事がわかるし、又、途中の景色から二十年前の幼時を偲んだり、あれこそ寺だらうと思つてさて行つてみると水車小屋だつたとか、山の下から眺めた時遙かに絶頂の近くに見上げた屋根がこれだつたらしいとか、もうそんなに高く登つたのかと後をふりかへつてみたり、この村の一隅にこの村の寺らしく納まつてゐた、といふあたりは誠に吾等の體驗を喚起せしめて、恍惚たらしめる。

多くの期待もかけずに出かけたらしいこの寺ではあつたが案外に作者の心を惹き、そして「やがて藝術や文化に關する理論に生育すべき芽」の一つであつたらう事は十分に想察する事が出來る。

この一文から、「古寺巡禮」を一本備へる生徒もあらうし、又、機をこしらへて淨瑠璃寺へ出掛けるものもあらう。

挿繪

「淨瑠璃寺の圖」、(二十七頁)帝展八回出品。竹内無憂樹筆

「淨瑠璃寺吉祥天女」(三一頁)

淨瑠璃寺にある九品阿彌陀佛以上に著名なのが此立像である。吉祥天は美の神と稱せられて、常に豐滿豐麗な表　を持つてゐるものである。彫法の自由で優美な事と、色彩の華麗な事と瓔珞、頭飾の精妙な事では、我國の彫刻中比類ない微妙な作品と云ふ事が出來るが、其製作時代では種々の說があつて奈良朝といひ藤原時代と稱し一定し難いが藤原時代の代表的傑作と稱してよからうと思ふ。(世界美術十一卷より)

予は道義を說く、愛を說く。或人はそれを陳腐と呼ぶだらう。しかし予は陳腐なるものの內に新しい生命を見出した喜びを語るのである。陳腐なる殼のうちに秘められたる漿液のうまさを傳へやうとするのである。陳腐なるものは生命を持たないとする固定觀念に捉はれたものは、先づその鈍麻した感覺をゆり起して自らの殼を破るがいゝ。さうしてその殼を破るために鐵槌を振ふがいゝ。その時に初めて偶像再興に對する新しい感覺が目ざめて來るだらう。

しかし予はただ「古きものの復活」を目ざしてゐるのではない。古きものを蘇へらされた時には古い殼をぬいで新しい生命に輝いてゐる。そこにはもはや時間の制約はない。それは永遠に若く永遠に新しい。予の目ざすのはかくの如き永遠に現在なる生命の顯揚である　予はあらゆる偶像の胸を通ずる一つの大いなる道を豫感する。さうして過去未來に亘る全人類の努力が必竟この道に向つて集まつてゐることを感ずる　永遠に現在なる生命はこの道の上にあつて勇躍するのである。予はその光景を描き得むことを願ふ。和辻哲郎――偶像再興

六竹

作者

【芥川龍之介】アクタガハリユウノスケ。文學者、俳號を我鬼といふ。明治二十五年（一八五二）三月東京京橋に生れ、第一高等學校を經て、東京帝國大學英文學科卒業、海軍機關學校に教鞭を執つてゐたが、大正八年四月辭して、大阪毎日新聞に入つた。昭和二年七月廿四日「或舊友に送る手記」の遺書一篇を草し、毒を仰いで死んだ。年三十六。著に「羅生門」「煙草と惡魔」「傀儡師」「偸盜」「影燈籠」「黃雀風」「夜來の花」「將軍」「春服」「沙羅の花」「點心」等非常に多い。昭和二年十一月から岩波書店で「芥川龍之介全集」八卷を發行することになつた。

氏は非常に多讀家で記憶がよく、支那の小說にも精通し、支那趣味が豊かである。其の作は材を歴史にとつたものが多く、一種の哲學を背景とし、技巧に優れ、機智に長けてゐる。或人は氏を「新理智派」と呼び、或人は、鷗外・漱石の俤ある作家であると評してゐる。「傀儡師」に收められた十一篇

の小說は、端正高雅で、之を取扱ふ手法に於ても描寫の文體に於ても、各篇各樣の趣を有し、氏の才能の深甚さを窺はしめるものがある。

傑作鈔――明治より大正へ」には氏の文を評して、「芥川龍之介氏は新技巧派を以て呼ばれてゐる。氏の作品には無駄がない。あらゆる蕪雜なものはすつかり刈りすてられて、立派な渾成した藝術境をまとめ上げてゐる。上品で淸純明朗、玉のやうに琢かれたのや、淡彩の山水畫のやうな瀟洒な感じのするもの、時には絢爛眼を眩する錦繡を織りなしたやうなものも見られる。氣の利いた機智のあらはれや、俳味のあるロマンチック期から、深刻な人生の現實を示し、人間の心理を解剖する現實的傾向に進んで來た。氏の文や趣や味が一種の風をもつてゐる事は、氏の藝術觀から來てゐるが、直接に氏の技巧から見得られる。聰明な氏の理智は、文を行るに簡潔と周匝との適度を以てする。抑揚緩急縱横の筆致で、和漢洋の文脈の種々相を渾融して、豊富な語彙を嚴選して、表現の整然たることによつて、文調と情調とを釀し出してゐる……一體に氏の題材は古典から多く採られて、それに新しい生命を盛つたものが多い。」と言つてある。

宮島新三郎氏は大正文學十四講に氏の作を評して下の如く述べてゐる。

氏の名作「芋粥」に就いて漱石が、芥川氏への書翰で「細叙絮說に過ぎ」「ベタ塗りの蒔繪を施

し」といつたのは適評である。一言一句の表現には、非常な努力を折込んだと思はれる割合に、情景の躍如たるものが無い。餘りにつくり過ぎて生氣をなくして了つたともいへる。刺身の上乘なる點はその生きにある。所が見た眼を美しくせんが爲に、とりつくろひ、却つてその生きを殺す料理人がある。芥川氏には、單にこの「芋粥」に限らず一般にこの弊がある。それは、ああでもない、かうでもないといふ理智が餘りに働き過ぎる結果である。その理智は單に表現の上にだけ働くのでなく、觀察の上にも、見方の上にも著しく作用する。從つて芥川氏の藝術からは直觀が比較的少く感ぜられ、理智美が比較的多く感ぜられる。理智的人生の表現とでも言ふのか、芥川氏の藝術のタッチは、冷透である。針鋭である。ふつくらとした藝術的人生の表現がない。

芥川氏は好んで人間の內的心理を描く。自然派の動作のみに重きを置いたとは全く正反對である。けれども其の心理が自然に尤もらしく生々と描き出された例が甚だ尠くはないかと思はれる。「藪の中」「秋」等は或時或場合の女性の心理を深く描いてゐるが、多くの場合に於て心理の說明であり、心理の型を見せてゐるに過ぎない。芥川氏の藝術は理智の藝術であり、秩序の藝術であり、メカニズムの藝術である。從つて其の感觸は金屬的で峻冷的で、固定的である。人間の心理を描いても、メカニツクであつて心理的でない。油のある間は動くが、それがきれると運轉を中止する機械といつたやうな人物が多い。名作と言はれる「或日の大石內藏之助」でも、大石の心理が、有機的に巧に描けてゐるとはいへない。何處かに機械的な感じを添ふ所がある。畢竟芥川氏は心理學者ではなく、物語作者である。とは言ふものの「藪の中」は或程度までは、オルガニズムの作品、情緒の作品、複雜性の結晶と言へやしないかと思ふ。

出　所

【芥川龍之介全集】 全八卷昭和三年八月岩波書店發行。定價四圓。此は第六卷「京都日記」より。

又〔點心〕大正十一年五月二十日、東京神田區表神保町金星堂發行。定價金壹圓八拾錢にも載つてゐる。

點心は芥川氏の隨筆集である。序文に「點心とは、早飯前及び午前午後哺前の小食を指すやうである。小說や戲曲を飯とすれば、これらの隨筆集は點心に過ぎぬ。のみならずわたしはこの四五年、丁度點心でも喫するやうに、時々これらの隨筆を艸した。この書に題して點心と云ふのも、畢竟こんな理由に出でたのである云々。」といつてゐる。點心。本の事・雜筆・藝術その他・漢文漢詩の面白味・短歌雜感・骨董羹・東京小品・京都日記・後世・軍艦金剛航海記・窓・着物・問に答へて・人の印象・一つの作が出來上るまで・文學好きの家庭から・一茶句集の後に等三十二篇を集めてある。

京都は竹までが京都らしく出來上つてゐると、たま〳〵或雨上りの夜、印象の深かつた竹をとり入

れて京都情調を描いた隨筆である。この筆はその情趣を傳へるにあつて見聞を傳へることを目的としたものではない。この京の情趣を想像せしめると共に、明晰な高雅なそして輕妙なその筆致を十分味はゝせ度い。

段落

一、或雨あがりの晩に……到底滿足につける事は出來ないであらう。（三五頁一行まで）。
　或雨上りの晩、京の町を伸で通つた。宿の名は知つてゐたが町名を知らなかつたので、車夫もつけやうがなくて困つたといふ事があつた。

二、困つたなと思つてゐると……今日でもはつきり覺えてゐる。（三七頁二行まで）
　車夫がこの邊ではないかといふから、よく見ると竹藪があつたから、こんな竹藪のあるやうな田舍ではないと云つたが、後で、それは建仁寺の竹藪で、その竹藪が陽氣な祇園と向ひ合つてる事に氣がついた。併し當時は狐につまされた感じであつた。

三、それ以來……自分の眼前へとび出して來たものである。（三八頁二行まで）。
　その後よく氣をつけて見ると、京都の界隈には、どんな賑かな町中にでも竹藪がある。

四、が慣れて見ると……猶更以て結構だと思ふ。（三九頁五行まで）
　慣れてみると、この京の竹は町慣れたやさしい竹だ。こんな竹なら祇園のまん中にあつたら猶結構だ。

五、裸根も春雨竹の靑さかな……終りまで。
　其の後大阪で、友人に何か書けと云はれたから、印象の最も深かつた竹を思ひ出して一句書いた位だ。

解釋

【桐油】　トウユ。（一）油桐（アブラギリ）の種子よりしぼり採りたる濃稠なる乾性油。黃色又は褐色を呈す。油紙に延（ヒ）き、又わただね油を雜へて燈油とし、又假漆（ニス）を作る材料に供せらる。きりあぶら。（二）とうゆがみ、とうゆガツパ（廣辭）。こゝは（二）で「とうゆガツパ。」桐油紙（トウユガミ）（桐油を延（ヒ）いた紙）は雨を凌ぎ濕氣を防ぐ故、合羽（ガツパ）を作り、又物をつゝみおほふに用ひる。この桐油紙で作つたのが「とうゆガツパ」である。

【往來】　ワウライ。（一）ゆきき。ゆきかへり。（二）ゆききする道。街道。往還。道路。（二）應酬（ヤリトリ）の書簡の文案を記したる書に名づくる語。（禮尙往來之意）「一尺素往來」「明衡往來」。「庭訓往來」。「消息往來」。（四）熱の差し引き。寒熱往來」（言海）こゝは（二）。

【さう云はれて見ると云々】　あの宿と、宿

の名さへ云つたら京の町中の車夫なら知つてゐるものと心得て居つたので、今この車夫に「そのお宿がわかりません」と思ひがけなくやられて　始めてそれと氣づき急にまごついたのである。

【つける】　宿へ車をつける。

【桐油をはづして云々】　合羽越しではあやしいから合羽をはづして念を入れたのである。

【竹藪】　タケヤブ。タカヤブ。竹の多く生じたる所。竹の林。たかむら。やぶ。たかばやし。大國。「藪」は本來はくさむらの義、たけやぶの意に用ひるのは國訓である。「籔」は十六斗入の竹器、我が國では藪に通じてヤブと

訓ずる。大字　併し「やぶ」の時には「藪」方を用ひる方がよい。

【萬竿の青を列ねて】　バンカンのセイをツラねて。無數の竹が青々とそろつて立つてゐて。

【大へんな所】　思ひもよらぬとんでもない所。

【横町】　ヨコチョウ。ヨコマチ。横に通じた路。廣辭。横路なる町、横街。言海。

【呆れた】　アキれた。

【糊塗】　コト。はつきりと處置せざること。曖昧にしておくこと。分明にせざること。廣辭。

【とつつき】　とりつき　はじめ。初手。廣辭。

【歌舞練場】　カブレンジョウ。京都の歌伎の歌や舞を練習する場所。京都祇園花見小路にある。毎年四月上旬から下旬まで京都名物の都踊がこゝで催される。

【都踊】　ミヤコヲドリ。前記歌舞練場で催される大舞踊、舞臺の背景・裝飾は年々新作される舞踊の歌曲に因んだ意匠を活用し、登場人員は地方十一人、囃方十人、踊子三十二人を一隊とする。踊は郭中の妙齡美貌の歌妓を選び、揃ひの華麗な衣裳をつけ、彩扇又は花枝などを持つて、歌曲につれて兩花道からねり出し、舞臺に登つて舞踊を行ふもの。

【暗】　ヤミ。くらやみ。

【狐につまゝれたやうな心もち】　狐にばかされたやうな氣もち。「狐に抓まる」（俚諺）茫然として自失せる狀。狐にばかされる。狐は性狡猾でよく人をばかすといふ

【界隈】　カイワイ。あたりきんじよ。廣辭。

【こればかりは云々】　まさかこの町の眞中に竹藪なんかあるまいと思つてゐると思ひがけなくあつたりして油斷が出來ない。

【一つ家並を外れたと思ふと】　ちよっと家のならんだ所を外れたなと思ふと。「家並はイヘナミ」（一）家のならびたること。又その場所。（二）いへごと。かどなみ。廣辭。やなみ。屋並）ともいふ。こゝは（一）の場所。

【棒喝】　ボウカツ。禪家の問答でさとりをひらかぬ者をしかつて棒でうつ修行。字源　棒

喝の如く自分の眼前へとび出して」は京都の界隈にはどこへ行つても竹藪がある事はわかつてゐるのに、まださうとさとらぬかと云はんばかりに、自分の眼前へとび出して來るの意。

【剛健な氣がしない】　竹といふものは屈せず撓まずいかにもつよさうに勢よく見えるものであるのに、この京の竹はどうもさういふふうな所がないやうに思はれる。

【蒔繪】　マキエ　漆と金銀粉とにて畫を作る技、器の面に、先つ漆にて畫をかき其の漆の乾かぬ間に、金銀の粉を蒔きつけ、後に磨きて光を生ぜしむ、丈を高く作るを「高蒔繪」といひ器の全體に作るを「比多蒔繪」といふ。「描金」ともかく。〔言海〕　金銀粉を用ひて漆器の面に描きたる繪畫。平蒔繪、高蒔繪、研出蒔繪の三種に大別す。〔廣辭〕。

鑑賞

まことに味の深い文章である。材も文も如何にも京の都に相應しい。建仁寺、祇園、琳派の畫家、光悅の蒔繪などみな京都のものである。そしてそれ等がいつの間にか出て來るので、少からず連想がいゝ。思ひ出すまゝ書き綴つたのではあらうが、誠によく味はふべき文である

【玉立】　ギョクリツ。美しく立つこと。

【裸根も春雨竹の靑さかな】「裸根」は露出してゐる根。春雨に、さなきだに靑い竹がいよいよのびて靑さを增し、裸根までも目ざむるばかり靑くたとへやうなき美事さである。

「棒喝の如くとび出る」とか、「萬竿の靑を列ねて」とか、「暗を拂つてる竹藪」とか勢のいゝ比喩が諸所にあるのは見のがすべきでなからう。

「裸根も」の一句もただ添へたかの如く見えるが亦味はふべきである。

挿繪

「藪の圖」（三五頁）日本美術院第十一回出品。「京洛十題」近藤浩一路筆の中の其九大原野立夏と題されたものである。

近藤浩一路。名は（ひろし）明治十七年山梨縣に生れ、四十三年東京美術學校西洋畫科を卒業し、讀賣新聞等に漫畫を書いて其一種異つてゐる畫風で廣く知られてゐる。文展へは第七回に「下京の夜」を出し、大正七年赤甕會同人となり、又美術院の同人となつた。大正十二年「鵜飼六題」を出品した。

「龍之介筆蹟」（三七頁）芥川龍之介全集、別冊のみかへし。（芥川さんが蠟燭の火さきをにじませて畫くことを覺えて喜んだ樣子だけは存じて居ります——小穴隆一—

此俳句は別冊の詩歌の蕩々帖の中に入つてゐる。

「梅の圖」（三八頁）白梅圖屏風。尾形光琳筆。東京津輕伯爵家藏。「紅白梅屏風」の半雙である。

光琳は此畫因を德川達道伯藏の宗達作「梅花圖屏風」から得たものであり、又宗達の手法で特に著しい綠青のたらしこみをも借用してゐる。……斯くの如く此圖は光琳と宗達との密接な關係を語るものであるが、決して模倣ではなく、光琳は光琳としての聰明さを十分に現してゐる。兩端にある紅白梅は一は幹の全部を露すに反して他は枝を以て之に代へ、中央の水はよく此間にあつて變化と均衡とに役立つてゐる。……そして又此圖の裝飾的なる事は光琳の眞面目を發揮するものである。……特に中央の流水は豪宕にして典雅、一寸他にその比をみないものであるが、之は特殊な手段を以て銀を燻ぶしたものである。（世界美術卷廿三所載）

「光悅書畫卷」（三九頁）古藝術界の巨人光悅、多藝多能な天才光悅が最もよくその風格を現はし、最もよくその眞價を發揮したものは、工藝にあらず、鑑定淨拭にあらず、實に絕世の珍寶と云はれ、萬金を積むとも猶自由にならぬと稱される書畫卷である。「書ならば我れ」と自負し、天下の人また一字を千金で爭ふ光悅の書に、壯重優雅な下繪を加へた一卷、この貴重至極な一卷は實業界の名流小倉常吉氏の祕藏する所であり、世人が最も鑑賞慾を唆られる極上の名品である。

書は公任の朗詠集より雁、虫、露の二條を拔萃したもので、卷頭には先づ

萬里人南去、三秋雁北飛、不知何歲月、得與汝同歸

と雁の一聯が書かれ、野蹟道風から出て、忽ち書界を風靡した光悅流の墨蹟は、高低の筆調のまゝに流れて往く、寫眞に現れた部分は

山館多時鳴自暗、野亭風處織猶寒

と云ふ虫の條に續く露である、奧書には

「寬永三年九月　日　鷹ケ峰虛無庵歲六十九」とあり、最も潑墨枯淡を誇る晩年の作であり、識者から鷹ケ蜂以前に光悅なしとまで禮讃される時代、巨匠が入神の藝術品として、まことに推しも推されもせぬ至寶である。

書風は、如何にも枯れてはゐるが骨つぽく、流麗な中にも何程か硬直味を感ぜしむるけれども、また一方では、如何にも高僧聖哲の風貌に接するの心持を與へ、どことなく物さびた風趣、優越を語る氣骨がある。

下繪は老若の青竹、これを金泥のみで描くこと暢達奔放、大膽な筆致、堅實な畫格を示し、むしろ「筆よりも下繪にかなし大虛庵」と云ひたい位で、恰も竹を割るが如き名人の心境そのまゝ、眞に壯快極まりなきものである。說に據れば宗達の繪ではないかといふことである。（日本名寶物語第二輯讀賣新聞社編）

六　竹

七　文藝復興期の畫家

作　者

【木村莊八】　キムラサウハチ。明治二十六年八月東京市日本橋區吉川町に生れた。京華中學校卒業後は專ら繪畫に親しみ、又、翻譯をなし文筆を弄んだ。初めはフューザン會に據り大正五年岸田劉生氏等と草土社を起し、其の作品を、主としてこの會に出品したが、その數質に數百點の多きに達し見る人をして驚歎せしめた。又泰西の美術に關する論評や翻譯に從事し、「宗教革命期之畫家デューラァー」「ロダン藝術「藝術の革命」「ミケル・アンジェロ」「少年藝術史ニール河の草」「ヴン・ゴォホの手紙」「生活と美術」「ボッテイチエリ」「エル・グレコ」「レオナルド」「デューラーの手記」「ヂョット」「後期印象派」「ファン・アイク兄弟」「ギリシヤ」等の著がある。尙ほ木下杢太郎氏と共に支那大同の石佛寺に遊び、その研究の結果を集めて「大同石佛寺」の大著を出し斯界に有益な參考資料を與へた。また「子供の爲の美術史」を書いた。大正十三年四月春陽會展覽會に出品した「玄蕃立去る」は美術界の評判となつた。

出所

【ニール河の草】　委しくは、少年藝術史ニール河の草、一冊、東京洛陽堂發行。大正十一年八月、第五版を發行してゐる。定價參圓五拾錢。

目次は、

古代の話（一　原始、二　エヂプトとヘブライ、三　ギリシアとローマ、四　キリスト）
中世の話（一　中世の諸國、二　十字軍、三　ルネツサンス、四　多くの新發見）
近古の話（一　偉い學生とその國、二　宗教改革とその後、三　ネーデルランド）
近世の話（一　フランス革命、二　歴史と偉人、三　フランス美術、四　現代）

に分ち、更に各の項を必要に從ひ數節に分けてある。なほ、附錄として、主として此の本に出る人の生死年表を附してある。

本課は右の「ルネツサンス」の項から抄錄し、可なり多く文章を改めたのである。

本書の「はしがき」に次の如く記されてゐる。

此の本には西洋の藝術（主に繪）の話を、歴史の順につれてわかりやすくかきました。此の本の名を「ニール河の草」としたのはせめて私がみなさんの「ニール河の草」になりたいと思つたからです。昔エヂプトの人民はニール河に生えてゐた、パピルスと云ふ草を使つて小屋の柱に代へ、その形を學んで後にはエヂプト建築の柱を工夫いたしました。私の此の本も讀むみなさんにとつて後には何かになる、その「ニール河の草」になればいゝと念じます。私はこの本を第一にはみなさん――少年少女諸君に讀んでいただくつもりでかきました。私は私自身が少年の頃に、もしも誰か年うへの人が「かう云ふ本をかいておいてくれたらどんなにうれしかつたであらうと思ふ、その「かう云ふ本」をかきたいと思つて熱中しました。然しかく事がかく事ですから自づとその爲にはむづかしくなつた個所もあるかも知れない。それは私が惡いのですから幾重にもお詫びします。と同時に此の本はみなさんの兄さんに讀まれてもいゝしお父さんに讀まれても、殊に繪の好きなお母さん達は或はみなさんより熱心に此の本をよく讀んで下さるかも知れない。どうか誰でもよんで下さい。私はこの本を讀むどなたの心にもはいつて、出來ればそこに後には美の建築の柱ともなる一つの緣になりたいと思ふ。ではこれで、あとは本文に移つて、一しよにお話しませう。

大正八年十月

要旨

文藝復興期に於ける世界的大藝術の復興した所以とその經過、及び代表的畫家と、その作品等につ

いて叙べたものである。その世界的と云はれるほどの大家にはやはりその幼時からどこか天才的の閃きがあり、氣高い性格をもち、ある賢さを皆持つて居つたものである等の事を知らしめて、ある刺戟を與へ深く省察する所あらしめたい。

尙この一文に出て來る畫家やその傑作をうかがはしめ鑑賞せしめる爲多くの寫眞を挿入した。畫家やその作品については解釋の條に力めて委しく記してあるから御參照の上特に説明を願ひたい。

段落

一、往古の大帝國……イタリヤ半島に逃れて來ました。（四〇頁一〇行まで）

前提、東ローマ帝國が滅亡したので、この地のギリシヤ系藝術家や學者は戰亂を避けてイタリヤ半島に逃れた。

二、當時十三世紀の初……それをルネッサンスと云ひます。（四四頁五行まで）

當時十三世紀の初、イタリヤのニコラピサノといふ彫刻家が偶然、寺の一隅でほこりだらけの古代彫刻をみて、その美にうたれ忽ち藝術の極意を悟つた。このピサノに見られて始めて古代彫刻家の不滅の精神が生返つて來たやうに、世界の年齢の上にも幾世紀をへだてゝ古代精神が生返つて來る。此れがルネッサンスの話の始りである。

三、さていよいよ繪の方の……大天才が現れます。（四七頁五行まで）

ルネッサンス過渡期に於ける美術家達―チマブエ、ジオット、フラ・アンジェリコ、サンドロ・ボッティチェリ、ファン・アイク、ペロッキオ、のこと。

四、遂に時代は……小さくなつてゐました。（四九頁一〇行まで）

ルネッサンス盛期の二大天才のこと―ミケルアンジェロ、レオナルド・ダ・ビンチ。

五、アンジェロは……全智全能の角が生えてゐます。（五二頁三行まで）

ミケランゼロの性格と技倆、作品―ダビテの像、シスチンのお寺の壁畫と天井畫モーゼの肖像。

六、それと反對に……いゝと云つて賞めました。（五四頁三行まで）

ダビンチの性格と技倆、作品―モナ・リザ最後の晩餐。

七、處がこゝに……なくなつてしまひました。（五五頁一行まで）

八、晩年……終まで。

ラファエルの事、ミケランジェロ、ダビンチ、ラファエルの三人の藝術境。

解釋

【文藝復興期】　「ヨーロッパ　闇黑時代の末　一　期即ち十四世紀から十五世紀に亙つて思想界

に大革命起り、「ギリシヤ」「ローマ」の古文藝復興して著しき人文の發達進歩をなした時代。其の革命は「イタリヤ」に始まつて次第に「ヨーロッパ」諸國に蔓延した。（西洋通史）。

【往古の大帝國東ローマ】　西洋古代の末より中世を通じて東歐に據りし一大國家。ビザンチン帝國又はギリシヤ帝國とも稱す。三九五年ローマ皇帝テオドシウス一世の時其の大領土を東西に分割しその長子アルカヂウスを東に帝たらしむ。之を東ローマ帝國の始とす。その國はバルカン半島、ドナウ下流地方より小アジヤ・メソポタミヤ・シリヤ・エジプト方面に及び、都はコンスタンチノープルに置かれ西ローマ帝國の首都ローマと對立したりき。元來幾多の異民族の上に建設せられたる國家なりしかば不統一の分子多く殊に宗教上の爭議に國内疲弊して勢威甚だ振はざりしも中世を通じコンスタンチノープルにその國家を維持せしため、古代の文化こゝに保存せられ、後世西歐の文運復興に資するところ多かりき。殊に其の美術、學問等は當時のヨーロッパに異彩を放ちしものにて史上に重要なる意義を有したりき。滅亡は一四五三年、即ち建國より千四十八年目なり。百科、こゝに千百二十三年目に滅亡とあるは、ローマ皇帝コンスタンチヌスの、三三〇年都をコンスタンチノープルへ遷したる時より起算したるなり。

【滅亡の悲運に逢ひました】　滅亡は前記、一四五三年、東方トルコ族起るに及び東ローマは十四世紀中頃には、領土日に蹙り僅に首府を保つに過ぎざる有様なりしが、この年スルタン・ムハメッド二世の侵寇に會ひ遂に首都は包圍せられコンスタンチヌス十世はギリシヤ兵一萬、イタリヤ來援兵三千を指揮し勇敢なる防禦を試み、よく四十日間の籠城に耐へしも遂に城陷り東歐千年の舊都はトルコ人の手に歸しこゝに全く滅亡す。百科、

【ニコラ・ピサノ】　中世紀前半、彫刻塑像など概して衰微を極め其の作物に特筆すべきものがなかつた時、ローマ帝國時代の胸像、貨幣などを模範として、古ギリシヤの風格を復興せんとする彫刻家の一派が起つて凡そ四十年程繼續したが、彼はこの一派の棟梁であつた。即ち復古式彫刻の先鞭をつけた人である。（文藝百科）

【藝術の極意】　藝術の眞髓。藝術の眞精神、奥義。「藝術」は、彩色・音聲・言語其の他の形象によりて美を表現する手段。廣辭。

【美】　ビ。直覺的なる眞善の具象化せられたるもの。藝術美。彫刻美。廣辭。

【生動】　生き〳〵とうごくこと。

【ピサノに再び生返つて來ました】　ピサノによつて、今まで千年も埋もれて居た美の生命が生動して再び生返つて來た。ピサノに

よつてこの驚くべき古代理想が復活して來た。ピサノの古名作の研究によつて古ギリシヤの風格が復興して來た。

【ルネッサンス】　新生又は復活の意である。中世期の理想及びその文明より、近代文明への轉移を產出した運動をいふ。此を廣義に解すれば敎權、及びそれに附隨した信仰上、理論上の束縛、傳習等よりの解放運動とされ、「自然人の發見」「個人の解放」等の言葉に示される。此には當時の自然科學上の新發見、ルーテルの宗敎改革をも含む。狹義に解すれば、單に希臘・羅馬の古典文化の復興を意味する。大體の上から古典文化の復興が先づ起り、續いて廣い意味のルネッサンスが起つたとされる。東ローマの首府コンスタンチノープルが滅亡したのは一四五三年であつた。其の結果として、希臘・拉典の古典文學に通達した此の國の學者が、伊太利の方に遁れて、古典的文化を傳へた。この文化は敎權の束縛を受けない以前の、自由な文化であつた故「自由な自然人の發見」「個人の解放」等の思想に人心を導き、ルネッサンス直接の導因となつた。而して藝術・文學・哲學・科學・政治・行政・社會・宗敎に對する人心の態度を、著しく變化せしめた。此の變化を藝術上に就て見れば十五・六世紀伊太利を中心としてルネッサンス期藝術樣式を產出した。其の藝術樣式に特色を與へたものは、凡そ、一、一般的經

濟生活の安定と餘裕。二、文化中心となつた都市が、藝術の應用及び需用の範圍を擴めた事。三、反宗敎的、反基督敎的。四、現世的、享樂的、個人尊重、五、自然尊重等である。

文藝

【潑剌】　ハツラツ。一、魚の勢よくとびはねること。二、轉じて元氣のあふるゝばかり勢よきこと。廣辭。

【卓越】　タクエツ。他よりもすぐれいでたること。すぐるゝこと。廣辭。

【獨特】　ドクトク。其ものだけが具有してゐること。詳漢。

【エヂプト繪畫】　エヂプト國民は、世界に於ける最古の歷史的國民だが其繪畫も馴鹿時代に次いでは又世界最古の物だ。而して彼等の繪畫は、之を三期に劃し得ることになる。A、メンフヒ時代。B、シイバン時代。C、セイテイツク時代。

A、此第一期はエヂプト帝國の領域が下エヂプトのメンフヒス地方に位して居つた頃で、紀元前三五〇〇年頃に當り其の繪畫は、重に墳墓や、木乃伊の箱に描かれたのが發見せられるが、他の二時代のよりも遙かに卓越してゐる。此期のものは寫實的で、個人性の現れたのが尠くない。

B、シイバン時代は第十九王朝のラムゼス二世の頃を以て最盛の時期とし、上エヂプトのシイブス府を中心とするもので、大殿堂、大

宮殿の建造につれ、從來の繪畫はその畫題と性質とを一變する樣になり、紀念的、裝飾的となりて、其が一種のエヂプト繪の慣例になつた。此期のものは分量の上からは他の二時代より勝つてゐるが、技巧樣式共に千遍一律でみるに足りるものはない。

C、セティック時代。エヂプト國の帝座が再び下エヂプトに移つたが、藝術は國運と共に日に衰へ、人心の純なる發現は全く絶え製作は凡て模倣を以て埋められ後ギリシヤ藝術に接觸して全く滅亡するにいたる。文藝による。

【過渡期】　クワトキ。過渡の時代。「過渡」、(一)わたり。渡津。津場。(二)舊から新に移らうとする經路　新式

【文藝家】　「文藝」(一)學問。學藝。(二)文學。美術。藝術。藝文　新式。

【チマブエ】　(一二四〇—一三〇二)イタリヤの古フロレンス派の畫家。ビザンチン美術と古イタリヤのゴシツク美術との交叉點を代表する。傑作「マドンナ」には早く人間の情味あり。樣式に未だ舊套を脱せず。革新の事業はあげてその弟子ジオットオに讓つた。文藝。

【ジオット】　(一二七六—一三三七)イタリヤの畫家、建築家、フロレンス畫派の開祖で近世繪畫の出立點を代表する。その傑作にはパヅァのアンナ禮拜堂に於ける基督聖母の傳記其他に取つた三十八題の宗教畫がある。アツシシのフラシスカン派寺院に於ける寓喩的の壁畫、親友ダンテの肖像畫等も有名である。文藝

【ラスキン】　(一八一九—一九〇〇)イギリスの美術批評家。社會論家。有名なる「近代畫家論」を著した。繪畫の研究の外別に建築論數篇も出版した。繪畫の上に於けるラスキンは單に英國の繪畫界に及ぼしたる効果ばかりではなく、實に歐洲繪畫の新氣運の鼓吹者として充分傳ふべきである。又シェレーやキイツと等しく美を感受する力は非常に烈しかつた。一面詩人であり、批評家でありながら更に其一面には眞面目な社會改良家でもあつた。一八六〇年「近代畫家論」の完成の頃からは其全力を社會改良と道德論の方面に傾注した。彼は異なる方面から進んでカーライル、キングスレー、モーリスと顔を合せるに至つたのである。文藝。

【フラ・アンジェリコ】　(一三八七—一四五五)イタリア、フロレンス派畫家。ドメニカン派の僧侶で最も敬虔な信仰の溢れた宗教畫を描いた。フロレンスのサンマルコ寺の壁畫、ルーブルに在る聖母戴冠の圖などを代表作とする。文藝。

【異端】　イタン。ただしい教へにそむく道。評論。

【サンドロ・ボッテイチェリ】　(一四四六—一五一〇)イタリヤ、フロレンスの畫家、畫

に於ては當時の名家フラ・リッポ・リッピの次に位し、後レオナルドオを學んだ。彼は著しい創見と詩的想像に富んだ人で自然、神秘派象徴派の人であつた。作は色彩の絢爛と線的裝飾の豊富を以て異彩がある「海より上れるヴェナス」「春」「ヴェナスとマース」等の名作がある。晩年彫刻に身を委ねた。文藝。

【油繪】　アブラエ。今日西洋畫の主位を占めるもので畫布又は板の上に描かれるものである。其特典は明暗の強い廣大な變化を表し得ること。其描法が自由である事。耐久力を持てる事等を數へる事が出來る。繪具は亞麻仁油を混ぜた顔料で、リンシー油、ナット油、ポッピー油、スパイク油等である。文辭。

【ファン・アイク兄弟】　兄をヒューベルト・ヴン・アイク（一三六六―一四二三）。弟をジャン・ヴン・アイク（一三九〇―一四四〇）と云ふ。ブルーグス派の祖で、殊にジャンは寫實的の諸技巧、風景、衣裳、建築の描寫、眞純にして情緒的なる點に於ては當代無比の大畫家であつた。兄の方も弟に劣らず力があつたが早く歿したので弟が大成した。文藝。

【ギルランダヨー】　（一四四九―一四九四）フロレンス派の畫家、この一族には有名な畫家が數人ある。卽ち、ドメニコ。ダビデ。ベネデットー。リドルフ等。文藝。

【高尙】　カウシヤウ。（イ）けだかい事。又けだかく持する事。（ロ）程度の高い事。卑近でない事。辭源。

【ベロッキオ】　（一四三五―一四八五）伊の彫刻家。畫家。ドナテロの高弟。少時飾屋ベロッキオの弟子でベロッキオの名は其人に貰ふ。繪は「基督の洗禮」が殘つてゐるのみである。彫刻「ダビデの像」は有名である。ベルギニオ。有名なダビンチは其弟子であつた。

【ミケランゼロ】　（一四七五―一五六四）建築の上に、繪畫的要素と獨創的な想像とを加へた天才的建築家。かの巨大なるサン・ピエトロ寺を建築し始めたが遂に仕上げずして了つた。然しその死後四三〇呎の大圓屋背は彼の設計通りに成功した。この他は本文に詳しく書いてあるが、彼は彫刻家、畫家、建築家、詩人、實に多能であつたが、自らは彫刻家を以て自家の本領とした。

【レオナルド・ダ・ビンチ】　（一四五二―一五一九）フロレンスの下部なるビンチに生れ一公證人の私生兒であつたが、幼にして驚くべき畫才があつた爲、アンドレア・ゼロッキオの弟子とならしめられた。彼の生涯の最初の三十年間は畫家、彫刻家としてよりむしろ建築家、數學者、科學者として活動した方が多く、現に彼は一四八三年頃ミランの侯爵ロドビコ・スフォルツアに自薦狀を送つて仕官を求めたが、侯爵は卽興詩人として彼を用ひたとさへ稱せられてゐる。彼のミラン生活の最大の紀念として現はれたものは、あの有名な

「最後の晩餐」の一圖で、彼の名聲はこの一圖を以てしても美術史上の最高の位置を占め得るのである。一四九九年ミランは佛軍の略取する所となつた爲め、ビンチは再びフロレンスに歸り有名な「モナ・リザ」の肖像を描いた。一五一三年にはローマに至つたがミケランジェロとラファエルとが既に好地位を占めてゐるので志を得ず、却てフランスに至り靜かに餘生を送つた。文藝。

【ダビデ】　ヘブライ第二王、下記「ヘブライ」の條參照。

【法王】　ローマ法王。ローマ教會の總首領。教權を代表して施行す。もと「ペトロ」の衣鉢を傳ふるものとして種々の事情よりキリスト教會の精神的君主と仰がれ、歐洲諸國の帝王を威服し、從つて廣大なる領地を有し居たりき。現在は幾多の沿革を經て次第に陵夷し、遂に本來の教職に復歸し、領地も悉く沒收せらる。廣辭。

【舊約聖書】　キリスト降誕以前の記事を集めた基督教の聖教。創世紀を始とし馬拉基書に至るまで三十九篇ある。新約聖書の方にはキリスト降誕以後の記事を集めてある。四福音書、使徒行傳、使徒等の書簡及び默示錄を收めてある。

【舊約聖書の話をかく壁畫と天井畫】　ミケランジェロの畢生の大作で世界を驚倒せしむべき神品と稱せられる。

【壁畫】　建築物の壁面殊に室內の壁面及天井其他の部分に多くは裝飾の目的を以て描かるゝ畫又は文樣。其壁體、仕上げの方法に從つて幾多の種類あり。ルネッサンス時代の畫家の專ら用ひたるはその中フレスコ畫なり。これは本來新鮮にして未だ乾かざる漆喰の上に施す畫法。壁畫の起源は遼遠なり。然れども十三四世紀に至り、チマブエ、ジオットーの出づるに及び急速に進步し忽ち全イタリヤに波及せり。東洋にては佛教寺院に施されたるものを其最も主要なるものとす。我が國にては奈良時代に描かれたり。法隆寺のもの最も古くして最も大なり。百科。

【キューピット】　Cupid　(一)ギリシヤ神話にいふ戀愛の神。像は普通に、裸體に翼を負へる盲目の小兒の弓矢を持てるものに作る。一度其矢に心を射られたる者は切なる戀愛の情を生ずと云ふ。(二)眼の大なる裸體の人形　言泉　こゝは(一)。

【ヘブライ】　セム種に屬する民族。其傳說及宗教は其の手に成れる舊約全書により傳はる。始めメソポタミヤに住せしが西紀前二一〇〇年、アブラハムに率ゐられてカナンに移り遊牧を業とし一神教を信奉す。ヨセフの御代更にエジプトに移り、居ること數百年。其間自己の信仰、風俗を墨守したるを以て大にエジプト王に抑壓せられたり。モーゼ乃ち國人を率ゐて同國を脫出し、萬難を凌ぎ紅海に

渡りシナイ山上に神裁政治を掛む。モーゼの死後パレスチナの地に占居し、紀前一〇〇〇年サウルを立てゝ王とす。之をヘブライ王政の始とす。次いでダビデ、王たるや英明・内富強を計り、外領土を擴め都をイェルサレムに奠め國民信仰の中心とす。紀前九三〇年ユダヤ、イスラエルの二王國に分る。イスラエルは紀前七二二年アッシリヤのために滅ぼされ、ユダヤは其後エジプトに服しローマの屬領となりしが紀後七〇年ローマのために滅ぼさる。ユダヤ人は爾後四方に流離、漂泊し各地に至り其商業上の天才により經濟的根據を固め、中古キリスト教最盛時代より今日に至るまでヨーロッパ各國民より賤民の如き待遇をうけ、亡國の辱を忍びつゝ國民的團結をかためジオニズム Zeonism（ユダヤ民族復興主義）を呼號し祖國の復興を夢みつゝあり。百科。

【全智全能】　智力と能力とに缺けたる所なく完全なる事。絶對唯一なる神の智能。百泉。

【鋪石】　シキイシ。

【しみ】　（一）色の染まりこむこと。そまること。（二）染み汚れたる痕跡。（三）皮膚に生ずる垢の如き斑點。廣辭　こゝは（二）。

【ラファエル】　（一四八三―一五二〇）イタリヤ、ウルビノ市に生まる。父は畫工であつたので幼より其教をうけた。二十歳フロレンスに出でダビンチの影響を受け一年餘にして歸省したが、再び來つてこゝに多くの有名な「マドンナ」を描いた。然し彼が其技を頂點まで發揮した所はローマであつた。「ヴチカン宮の壁畫」「サン・シストオの聖母の像」は其傑作である就中、後者は世界に於ける聖母像中最高最貴の品である。ラファエルは復興期の調和家と稱せられた程で、其畫は當時の畫家のあらゆる長處を攝取し之を統ぶるに彼が獨特の高雅典麗の特色を以てした。常に冷靜な、智力的な藝術的な態度を以て描いた。故に決して宗教的感情に奔つた事はなかつた。文藝。

鑑賞

ルネッサンスの源から其の頂點に達する間の經過と、その間に輩出した大家とを描いたのであるが、又これ等大藝術家の心懷には實に尊崇すべきあるものを持つてゐた事等をも指摘してゐる事に注意したい。例へばミケランゼロは大畫家たるばかりでなく大建築家で大詩人でゞもあり、いざ書くとなると時に飲まず食はずで大作をやつてのけたり、餘り上を向いて熱心にかいたので久しく首が曲つてゐた事もあつたとか、レオナルドが第一流の思想家で科學者で數學者で、音樂もやり世界で初めて飛行機のことも考へたとか、モナ・リザといふあの有名な肖像畫をかく時は三年もかゝつたが出來なかつたとか、繪を書かないでゐる時は運河を工夫したり新式の大砲を考へて居たとか、又ラファエルが

レオナルドに街の中で會うたら馬から下りて丁寧に御辭儀して通つたとか、等々、讀みながらに、どこか讀者をして敬虔な心を抱かしめる。

これだけ繁雜な豐富な內容を、平易に輕妙に、而も一絲みだれず簡單に印象深く物語つてゐて內容の進行が甚だ明瞭である。眞に敬服せざるを得ない。

備考

【原文との對照】　原文「中世の話」の第三、ルネッサンス。の中よりとる。此は更に十六に分記されてゐるが、1、ローマの滅亡。の「以上で大體中世が如何云ふ有樣であつたかと云ふことは解りましたから、之れからはさう云ふ有樣の時に如何云ふことが人間の智惠の方に起つたかと云ふことをお話ししします。」の次から本文は始つてゐる。

四四頁五行目「ルネッサンスといひます。」の後に原文ではルネッサンスに到るまでの世界の大勢を、2、カタコム。3、新時代。4、キリスト教美術。5、モザイク。6、偶像破壞。7、ゴチック。8、ゴチックの本寺。9、イタリヤの諸市府。等に分けて記されてゐる。

四四頁六行「さていよ〳〵繪の方のお話ですが」から、四七頁五行「大天才が現れます」までは、原文、10、復興の美術（彫刻繪畫）。11、十五世紀。12、ルネッサンスの特質。13、油繪の發明。より便宜上抄錄した。此間には本文に擧げられてゐる畫人や其他の人々の畫風、傳記、逸話や、ルネッサンス盛時への道程が詳しく記されてゐるが原文を記載することは省く。

四七頁六行「遂に時代は」から五五頁一行まで14、十六世紀。の原文をとる。ただ本文「この二人は仲が」のところ、原文「この二人は仲が惡かつた。レオナルドの方が二十ばかり歲上でしたが、アンヂェロは名高い家に生れ、レオナルドは農婦のてゝなし兒でした」とあり、五三頁十一行「或繪の批評家」は原文「ムーテルと云ふ批評家」とある。

五五頁一行「なくなつてしまひました」の後に街路で二人が會つた時に、ミケランゼロが火の樣に怒つて惡口を云つて行つてしまつた事、ダビンチが仕事の上では自分に劣らないいゝ友達だのに相手がどうも嫉妬心が强くて困ると人に話した事。その頃、一體に誰もかれもが競爭心が强くて仕事の上の憎い敵をもつてゐた事が記されて、その後が本文「晩年レオナルドが」となる。其後終りまで原文のまゝ、

原文の第三はこの後にまだ15、ルネッサンスの建築。16、その後。があつて終つてゐる。

尙原文に明らかに誤りと思はれる送り假名や不適當と思はれるもの、又は都合上文をところどころ變へたものもある。

挿繪

七　文藝復興期の畫家

「木村莊八の顔」、森田恆友の筆。春陽堂雜報第一號。

「ギリシヤ彫刻」作家は不明であるが、ギリシヤ藝術の粹を鍾め、其特質を發揮せるもの〻隨一とせられるメロス（Melos）のアフロヂテ(Aphrodite 古代希臘人の崇拜した女神)で、普通はミロ（Milo）のヴェヌス(Venus)として知られてゐるもの(百科による)。

「エヂプト繪畫」これは埃及の新帝國の初期紀元前十五世紀に年代づけられる繪である。その頃の首都テーベの墓窟の壁に描かれた墓の主の生前の事蹟畫のその一部なのだ。圖は貴紳狩獵の光景であつて、例の埃及畫通有の便法な形と色とによる裝飾的効果の推積の裡にありながら、また若干の動きを畫面に流れさせてをる。（世界美術卷一）

「天使」は全部で十二人ある、樂器を持つてゐる爲めに、樂器を持つ天使として知られ、「聖母と幼き基督」の周圍を十二人で裝飾風に取圍んでゐるのである。美術上のみではなく音樂史上にも大切な資料となつてゐる。（世界美術全集卷十六）

「ユーヂイット歸る」フローレンス、ウフイヂ畫廊藏。アントニオ・ポライオロの感化を蒙つた初期の作品の一。猶太の女王ユーヂイットが陣中に赴いて敵將ホロフェルネスを謀りその首を獲つて歸る。其故に鄉市ベツリヤを救つたといふ古傳に材を取つたもの。（世界美術全集卷十六）

「聖羊禮拜圖」多面畫の一部。兄弟の合作といはれてゐるけれども注文を受けたのも、全體の計劃も畫作も大部分ヒューベルトの手になつたものとみられてゐる。その死後ジャンによつて繼がれ完成した。此圖は多面畫の重要な中心をなすもので、面積も一番大きく、全く左右均齊の構圖で人物なり、風景なりの細緻な描寫は實に驚くべきものである。（世界美術全集卷十八）

「ダビデ」像は優美にして力ある製作で、大さも約三尺位であるが其鑄造が巧みで、又其色附けの深みと美しさは特に注意を要するのである。此は彼の作で最も圓熟した時期であるが、フローレンス國民美術館の數ある彫像中の逸なるものである。

「聖母と聖エリザベタ邂逅の圖」伊國聖マリア・ノヴェルラ寺壁畫。マリアとエリザベタがユダの邑で會つたといふ新約聖書の一節より畫題をとる。建築物、風景を背景として畫面の略中央に二人が挨拶を替はしてゐる。其背後に從者或は見物人として數人の婦人が描かれてゐる。所載の繪は畫面右端から二人目のでジョヴァンナといふ女の肖像畫である。（世界美術全集卷十六）

「ダビンチ自畫像」圖は赤チョークを以つて描かれた晩年の作だが、以つて此人の風貌を思ふ可く、遺憾ながら確にそれと指呼し得る自畫像の例に乏しい。（世界美術全集卷十九）

「ビエタ」は壯年時代の一節の過渡的作品として名あるものだが、僧サヴォナローラの刺戟を逃れて

ローマに走つた其二十歳左右、五年間の滯留の間に作られたものである。字義ピエタは悲哀、苦痛、の意味。「死せる基督を膝に抱く聖母の像」を慣稱する語である。（世界美術全集卷一七）

「天井畫の一部分」システイン禮拜堂天井畫は畫よりも彫刻の方を主な仕事としてゐた彼の一代を代表する大作で、天地創造から男女創造、樂園追放、ノアの話に至る九圖の天井畫、天井の下部には豫言者と神巫とがある。其間に種々の裝飾畫人物が畫きこまれてゐる。これも其中の一つである。男性的な力强い畫風は斯う云ふ一部分の擴大圖によつて最も明かに窺はれる。（世界美術全集卷十七）

「最後の晩餐」ヴィンチ一代の傑作と稱せられるもの。彼は一四八三年から一四九九年に至る間、ミラノ（Milano）の公爵ロドヴィコ　イルモロ（Lodovico il Moro）に仕へたが、其間にこの畫は出來たのである。即ミラノのサンタ・マリア　デルレ　グラチエ（Santa maria delle Grazie）の修堂院の食堂の壁に描いたもので、其原畫は疎略な取扱と容赦のない歳月の力と、顏料の缺點と、更に不手際な後年の修補とのために、今は纔に其の片影を殘すに過ぎないが、なほ其門弟の手になつた幾種かの模寫と相須つて朧げにも當年の面影を窺はしめる。此の畫は最後の晩餐の席に於て基督が「一人汝等の中に我を賣す者がある」と告げた刹那の光景を捕へたもので「互に面を觀あはせて、誰を指して言つたのか」と疑ひ合ふ弟子達の複雜な心理は、それぞれに顏面の表情と雙手の科とによつて精細に描寫せられた。百科による。

「最後の晩餐」、ユダヤの宗教會の當局者はキリストを憎み忌むこと甚しく、彼が逾越節（スギコシノイハヒ）にイェルサレムに上つたのに乘じ、これを捕へようとし、キリストの十二弟子の一人ユダが師に背いてこれを賣らうとした。キリストは危難の迫つたのを覺り、弟子等と最後の晩餐を共にし、懇な訓戒を垂れて後、ゲツセマネ（Gethsemane）といふ園へ行つて切な祈禱をしたが、其夕ユダによつて案内された捕卒のために縛せられた。百科による。

「肖像」アンジォロ・ドニの肖像。此畫は彼の作のうちで最も有名なものゝ一つである。今フローレンスのピッチ畫廊にある。やさしく聰明なラファエルの姿によく似てゐる。殊にその眼は輝いてゐる。（世界美術全集卷十七）

「マドンナ」詳しくは「マドンナ・デラ・セディア」といふ。坐せるマドンナの意で、ラファエルが描いた數多い聖母の中でも有名な畫である。そして割に早く描かれたものである。彼がマドンナに用ひた三色、即赤、藍、白の調和色は神に對する愛を示し、又平和を表してゐる。彼はその生涯の餘程早くから母の愛を强く感じてゐた。此は單なる宗教の傳說を描いたものではない。彼の體驗から出た母子の愛を神聖化したものに他ならない。此の作はフローレンスのピッチ宮殿にある。（世界美術全集卷十七）

八感傷肖像

作者

【佐藤春夫】サトウハルヲ。明治二十五年四月和歌山縣新宮町に生れ、慶應義塾大學文科に學んで半途退學した。小説詩歌戯曲飜譯行くとして可ならざるなく、大正七年春頃から新進小説家として認められ其の方面に於ても大いに活躍し、又後期印象派の畫家として二科會に作品を發表した事もある。著書、長篇小説に、田園の憂鬱・短篇集に、病める薇薔・お絹とその兄弟・佐藤春夫選集・幻燈・詩集に、殉情詩集・隨筆感想に、藝術家の喜び・南方紀行等を出した。尙最近の作には、卓の上にあつたもの・都會の憂鬱・續その日暮しをする人・空しく嘆く・後の日に・日光異聞・魔もの・紫陽花・剪られた花・春をくれる娘・暮端の家・百花村物語・沒落の曲等の小説を矢つぎばやに出して、氏の藝術の泉の滾々として盡きないのを示してゐる。

右の中「田園の憂鬱」はかつて雜誌「中外」に於て評論界創作界の驍將たる生田長江氏が之を德川時代の傑作鴨長明の「方丈記」に比較して論評し、夥しい讃辭を惜しまなかつたもので、氏をして文壇に拔くべからざるものを作つた。幽靈のやうにうらさびしい主人公の心に泌み入りそれが讀者の心にも喰ひ込んで見逃すことの出來ぬ枯淡な情味を捉へ、綾羅の夢を織り込んだ手際は氏の特色を十分見ることが出來る。

出所

【殉情詩集】一冊、新潮社發行。大正十年七月初版、大正十一年四月には五版を出してゐる。定價九拾錢。

「同心草」「晝の月」「心の廢墟」の三部に分かれ、「同心草」の部には、水邊月夜の歌・或るとき人に・また或るとき人に・海邊の戀・斷章・琴うた・後の日に・よきひとよ・こころ通はざる日に・なみだ・感傷肖像・感傷風景の十二篇、「晝の月」の部には、ためいき八章・少年の日四章・二つの小唄・むかしのうた・晝の月の五篇、「心の廢墟」の部には、心の廢墟・斷片・わが溜息・メフィストフェレス登場・夜深くして歌へるわが歎きの歌・聖地パレスチナの六篇が收められてゐる。

序文は次の通りである。

われ幼少より詩歌を愛誦し、自ら始めてこれが作を試みしは十六歳の時なりしと覺ゆ。いま早くも

十五年の昔とはなりぬ。爾來、公にするを得たるわが試作おほよそ百章はありぬべし。その一半は抒情詩にして、一半は當時のわが一面を表はして社會問題に對する傾向詩なりき。今ことごとく散佚す。自ら記憶にあるものすら數へて僅に十指に足らず。然も些の憾なし。寧ろこれを喜ぶ。後、志を詩歌に斷てりとには非ざりしも、われは無才にして且つは精進の念にさへ乏しく、自ら省みて深くこれを愧づるのあまり遂には人に示さずなりぬ。但、殉情の人は歌ふことにこそ纔に慰めはあれ、譬へば、かの病劇しき者の呻くことによりて僅にその病苦を洩すが如し。されば哀傷の到るものある毎にわれは恒に私に歌うて身をなぐさめぬ。又譬へば獵矢を負へる獸の森深く逃れ來りて、世を惡み人を厭ひて然も己が命を愛するの念はいや募り、己が口もて己が創痍を舐め癒さんと努むるが如し。

世には强記にして好事の士もあるものなり。面榮ゆくもわがかの試作を今更に語り出でて、時にはこれを編みて冊子とせよなど勸むる友さへあり。されど誰かは、未熟にして早く地に墜ちたる果實を拾ひて客の爲めに饗宴の卓上に盛らんや。乃ち篤くこれを謝するのみなりき。この機にのぞみてわれは改めてかかる人々に乞はん。わが舊き詩歌は悉くこれを忘れたまへ。少しく言葉を弄ばんか、今日のものとても同じく然したまへ。然らば今この集を敢て世に問ふの故は如何。曰く米鹽に代へんとす。曰く春服を求めんとす。否、われは口籠ることなくして言ふべし。聽き給へ、われ今日人生の途なかばにして愛戀の小暗き森かげに到り、わが思ひは轉た落寞たり。わが胸は輞の下に碎かれたる薔薇の如く呻く。心中の事、眼中の涙、意中の人。兒女の情われに極まりては偶成の詩歌乃ち、また多少あり。げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。然れども既に世に問はん心なければ、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の好尙と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をとり出でていま路のべに來り哀歌す。節古びて心をさなくただに笑止なるわが笛の音に慌しき行路の人いかで泣くべしやは。たとひわが目には水流るるとも、知らず、幾人かありて之に耳を假し、しばしそが歩みを停むるやいかに。

嗟吁、わが嗚咽は洩れて人の爲めに聞かれぬ。われは情癡の徒と呼ばるるとも今はた是非なし。

大正十年四月十三日　　佐藤春夫

要旨

前章にレオナルド・ダ・ビンチ及びその名作モナ・リザがあつたので、この一枚の肖像畫を見て成つた一篇の殉情詩を排列したのである。こゝに挿入した繪を見ながらこの詩をみると云ひ得ぬ無限の味が湧く。一枚の繪からもかうした詩や又は物語の出で來るものである事をさとらしめたい。

段落

八感傷肖像

一摘めといふから……もぎくだいてゐる。（五八頁三行まで）
摘んでくれよといふからばらを摘んで渡したら、それを受取つた相手は、無心にそれをもぎくだいてゐる。

二、それでおこつたら……そつと私の手にのせた。（一六七頁七行まで）
それで自分が怒つたら、相手はびつくりして目をみはり、そのこなごなにくだけた花びらを、そつと私の手にかへした。

三、その目は涙ぐんで笑ひ……（終まで）
そつと花びらを私にかへした時の彼の目は涙ぐんで而も口には笑ふ表情を浮べ、口では笑つてゐるが頬には涙が流れてゐる。こんな何が何やらわからぬ戸まどひした表情をあらはしてゐる所をみるとこのモナリザは全く小娘のやうだ。

解釋

【無心】（一）心なきこと。考なきこと。思慮のなきこと。「無心の雲」。（二）みだりに物を與へよと望むこと。せがみもらふこと。「無心する。廣辭。こゝは（一）。

【めちや〳〵】（一）すぢみちのたゝぬこと。わけのわからぬこと。（二）過度なること。はなはだしきこと。廣辭。こゝは（一）。

【もぎくだく】ねぢりとつてくだく。「もぎ」はねぢて引きとり。もぎとり。

【こなごな】極めて細かく碎けたること。

【涙ぐむ】眼に涙を含む。涙をもよほす。なかんとす。廣辭。「ぐむ」は接尾語。或る語に添へて、其の物事のきざし又はふくまれたる意を表はす語。

【頬は泣いてゐる】頬には涙が傳はつてゐる。してみると泣いてゐるのだ。「頬」は原文に「ホ」と振假名があるが「ホホ」とあるべきのが脱したのであらう。

【表情】心中の感情を外貌にあらはし出す狀態。感情に伴ひて起こる生理的變化。

【戸まよひ】「戸まどひ」に同じ。夜中俄に目をさまして、方向を失ひ迷ふこと。ねまどひすること。こゝは單に迷ふ意。

【モナ・リザ】備考參考。

【小娘】コムスメ。十四五歳までの少女。こをんな。をとめ。（處女、少女）

鑑賞

このモナ・リザといふ感傷的な女の表情が全く眼前に浮んで來る。この詩は全部小娘の象徴だ。味へば味はふ程味がある。

備考

八　感傷肖像

挿　繪

この畫は「世界美術全集」にも收められてゐるが、同全集モナリザの解說に、木村莊八氏は次の通り述べてゐる。

モナ・リザの畫像は眇たる一畫幅に過ぎないものだが、繪の隅々までも最高最鋭の復興期的理想――同時に叡智――之を偲ばせる點で、歷史を動かして止まない。一筆も筆端疎かなるはない。誇張なく云つて、瞑想を經ずして下された筆致は一點だにない。一見平凡に見えて、再見漸く非凡なるを益々認知せしめる。草木の平凡さの樣なものである。

今日は既に表面褪色しただらう。然し畫因の深さは褪めない。

（此の版は色刷で揭出しようかと考へたが、なまじ誤りあるを恐れる。わざと單色銅版にした次第である。）

モナ・リザ――「モナ」は「マドンナ」の略である――はナポリに生れ、本名をゲラルディンと云つて一四九五年にフローレンスの修道院長の妻となつた。夫フランチェスコ・ジョコンドは複雜に公職を有するフローレンス市民の有力者であつたが、然し平凡の人たるは免かれない。リザはその三度目の妻として嫁いたのだが、二十歲であつたと云ふ。貞潔によく彼に仕へた。

で、此の繪のモデルに坐つた時には、彼の女は三十左右の考定ながら、數年以前に、（一四九九）彼の女は娘を失つてゐる。――「レオナルドの作を見よ。リザ夫人は喪裝してゐるのである。髮飾りも、指環も、凡て裝身具を殆ど身につけてゐない。」とレイナッハが云ふ。研究家ミュンツに從ふと、一五〇四年から五年にかけて描かれた作とある。

元來は繪の兩側に、畫中に圓柱が二本描き込んであつた。此の繪を描く時に、モデルに「憂鬱の表情を宿らしめぬやう」側らに樂師をおいて奏樂せしめた――と云ふのは、名高いヴァザリの傳說だ。

リザの口邊の微笑は、それ自身屢々美術上の幽遠な問題とされるものである。

美は善よりも高い、美はそれ自身の中に善を含む

ゲーテ

九　先生への通信

作者

【吉村冬彦】　本名は寺田寅彦。高知縣の人。理學博士、東京帝國大學教授。第五高等學校をへて東京帝國大學に入り、明治三十六年理學部實驗物理科を卒業。大正六年「ラウエ」映畫の實驗方法及びその説明に關する研究に對して帝國學士院より恩賜賞を授與された。氏は理學者であると共に、文學に非常なる趣味を有し、漱石門下の錚々たるものである。漱石氏の「吾輩は猫である」の中に出るレンズ磨きの學者、首くゝり力學の説明者たる寒月は、博士をモデルしたのだと傳へられる。

出所

【藪柑子集】　大正十二年岩波書店發行。定價二圓。集の終りの方の「先生への通信」としてまとまつた中から採つた。

要旨

旅行先よりの一寸した葉書文や、その見聞を知らす消息文の口語體の一例として採つた。殊に師弟間の禮讓と情宜のうかがはれるところ、整然とした印象のまとめ方等參考になるところが多い。

解釋

一、ヴェニスから

【ベニス】　Venice. Venezia. ヴェネチア。伊太利の北部にある港。ヴェネチア州の首府にして、約百二十の島區に分れ、百數十の溝渠S字形の中央大運河に連り、これに約四百の橋梁を架し、ゴンドラ及小汽船を以て車馬に代ふ。古來獨特の美術工藝を以て名高く、レース・錦襴・寶石細工・玻璃器・剪嵌細工等を産す。〔百科〕。

【玉蜀黍】　トウモロコシ。（唐「もろこし」の義）禾本科一年生草本、北「アメリカ」の原産、園圃に栽培せらる、莖は充實し直立して高さ五六尺に及ぶ、葉は互生して披針形をなし、平行脈を有す、基部は葉鞘をなして莖を包む、七八月頃花を生ず、花は單性にして雌雄同株、雄花は莖の頂端に生じ稍すゝきの穗に類す、雌花は葉腋に生じて穗狀花序に排列し、苞につゝまれたる果實を結ぶ、果實は端に紫色絲狀の毛あり種子は食用に供せらる。なんばんきび。〔廣辭〕。

【茹章魚】　ウデダコ。「茹」はすする、枯る、腐る、柔か、うでる等の語義あり。こゝは普

通云ふ章魚のゆでたもの。字源。

【常磐木】　トキハギ。草木の葉が年中その綠色をかへざる義　その灌木を云ふ。

【ゴンドラ】　イタリヤのヴェネチア市に於ける諸川にて用ひらるゝ特種の小舟、市の交通は多く運河によりて營まれ、此小舟は卽ち道路の車馬の如し。通常長さ三〇呎幅五呎ほどの細長き舟にして、龍骨を有せず、船首及船尾は鍬形狀に突起し、これに諸種の裝飾を施す、中央に屋形ありて內に乘客席を設け窓を穿つ。これにも亦裝飾を施す。百科による。

二、羅馬から

【累々】　ルヰルヰ。重なる貌。易林「疊々——」また打續く貌＝纍纍　字源。

【廢墟】　あれはてたる建物又は城郭のあと。廣辭。

【彷徨】　ハウクワウ。さまよふ、うろつく。史、刺客傳「——不ㇾ能ㇾ去」＝彷徨・方皇　蛇の如く、兩頭にして五采の文ある蟲。莊・達生「野有＝——」字源。

【オリーブ】　阿列布＝Olive　木犀科の常綠喬木、地中海の沿岸地方に播布し、廣く溫帶各地に栽培せらる、枝條繁茂し、往々大木となる。葉は對生し長橢圓形にして全緣、先端微しく尖る、表面は深綠にして下面は灰白色を呈し、短き葉柄を具ふ、夏秋の間、枝梢の間より花梗を抽き、複總花序の小白花を着く、果實は長橢圓形にして、其肉より「オリーブ」を採る、此樹の枝は歐洲にては古來平和と充實との表彰として用ひらる。廣辭。

【バチカン】　Vatican. 羅馬法王の宮殿。バチカノ丘上にあるより名く。第六世紀の初此を創建せしより代々の法王の宮殿として世界政治の中心となり、從てバチカノは法王政廳の異名として知らるゝに至れり。宮殿は千百餘室を有し圖書館、博物館あり。其所藏に係る圖書、美術品は實に天下の珍奇と稱せられる。百科による。

三、伯林から

【モンブラン】　Mont Blanc　白山の義。アルプス山系の北西部ペンニン、アルプ山脈の南西卽佛伊の境上に聳立し、頂上は高さ一五、八七三尺、歐羅巴中の最高點とす。頂上は常に雪に埋れ、所々に大雪野あり。頂上附近より氷河四方に射出す。百科。

【鶴嘴】　ツルハシ。土地を掘るに用ふる工具、鐵にて鶴の嘴の如くつくり、これに柄をつけたるもの。廣辭。

【ガイド】　Guide 英（一）案內者。手引き。（二）導水橋。導子。（外來語辭典）

【タバーン】　Tavern 居酒屋、飲食店、旅店。（英和大辭典）

【瑪瑙】　メノウ。石英の一種、種々の金屬化合物を含み、美麗なる色を帶び、玻璃の如き光澤を有す、印材・文房具等種々の裝飾品に用ひらる。廣辭

【ゼネバ】 Geneva ジュネーブ。スイス國の西南隅にある都會。同名州の首都にして、國內第三の都會たり。風光頗る秀絕、且氣候溫和に、河湖の水運及鐵道の便に富むを以て來遊者常に麕集しスイス屈指の勝地たり。百科。

【ベランダ】 Veranda 英。廊下、緣側。(外來語辭典)

【ボルテーア】 Francois Marie Arouet de Voltaire (一六九四—一七七八)佛の文學者。巴里に生る。高等法院の判官の子で、早くから諷刺、寸鐵、オード、書畫の類に筆を染め、其後暫らく法律を研究したが、ルイ十四世の崩後、攝政を詩によつて諷した爲獄に投ぜられた。出獄後「エディプア」の劇「テアトル・

フランセー」に上場されて華々しい成功を收めた。其後劇の方は捗々しからず、再度人と爭つて下獄し、出獄後英に渡り、歸國後專心文學に從ひ、宗教上社會上の諷刺劇、哲學上の論文、傳奇小說の類が此期に出來た。後、プロシヤのフリドリヒ大王の寵遇を受け、年金勳章を賜はつて王の作文の添作をやつてゐたが三年後王と合はずして去り、暫時流浪の後、終にゼネヴに晩年の二十年を送つたが、一時巴里に上つてゐる間に歿した。文藝。

【毛氈】 モウセン。獸毛の纖維に濕氣と溫度と壓搾と摩擦とを加へ必要によりて植物纖維を混じて製造したる敷物。廣辭。

【柏】 カシハ。殼斗科の落葉喬木。山地に自生し、又庭園に栽植せらる。幹の高さ二三丈周圍五六尺に達す、樹皮は帶灰赭黑色にして深き裂目あり、葉は濶大にして長倒卵形をなし、緣邊に波狀の鈍鋸齒を有し、下面に褐色の毛を生ず、四五月頃、葉と共に花を開く、花は雌雄異株なり、果實は頭部稍圓く、殼斗は平椀狀をなす、幹は薪炭料に樹皮は染料及鞣皮用に供せらる、西洋の「かしは」卽ち「オーク」も亦この一種なり。ははそ、こがしは。廣辭。

【栗】 クリ。殼斗科の落葉喬木、諸國山中に自生す、幹は高さ四五丈周圍五六尺に達す樹皮は暗赭色にして、初めは平滑なれど後には裂目を生ず、葉は短き葉柄を具して互生し、長橢圓狀披針形にして緣邊に鋸齒あり、六月頃、花穗を抽き淡黃色の細花を綴る、花は單性にして雌雄同株、花叢は穗狀なり、果實は堅果にして長き刺の密生せる殼斗に包まれ、熟すれば殼斗裂開して內より果實を散出す、果實は食用に、木材は種々の用に供せられ、又、樹皮及殼斗は染料に用ひらる。廣辭。

【低氣壓】 大氣中に生ずる渦動の一種。其域內にては氣壓は四周の地より低し、依て低氣壓と稱す。此渦動をなす風は、北半球にては時計の回る向と反對に旋轉し、南半球にては時計の向に旋轉す。かくの如き風系を旋風系といふ。百科。

【小作人】 コサクニン。小作を業とするも

の。小作の農夫。(小作)他人の土地を小作料を拂ひて借り、耕作又は牧畜などすること。廣辭。

【橡】　栃。七葉樹科の落葉喬木、多く深山に生ず、幹は高さ七八丈周圍八九尺に及ぶ。樹皮は初め灰褐色にして平滑なれど後には帶綠淡赭黑色となり裂目を生ず、葉は對生し、五乃至七箇の小葉よりなる、掌狀複葉にして長大なり、小葉は倒卵形にして鋸葉を具し、表面は綠色裏面は淡綠色にして褐色の毛茸密生す、五月頃、枝梢の葉間に白色淡紅の花を密攢す、花は五瓣にして圓錐花序に排列す、果實は蒴果にして果肉は黃白色なり、材質は緻密粘强にして木理頗る美しく、諸種の器用に供せられ、果實は食料に樹皮は鞣皮劑及び解熱藥に用ひらる。廣辭。

【ベルン】　スウイス共和國の首府。國の西部を占むる同名縣の中部に位し、低地よりも一七〇〇尺の高き砂山の上にありてライン河の支流アール河其三方を流る。スイス第一の美都。又ヨーロッパ中街衢整然として且宏壯なる建築物を有する都會の一に算せらる。百科

【錦繪】　德川時代に於て行はれたる木版色摺畫の一種。此時期に於て行はれたる版刻畫のうち錦繪は最も進歩したるものにて、其盛んなるものに至ては賦彩絢爛人目を眩せんとするものあり、世人これを嘆稱して錦をみるが如くなりといひ、遂に錦繪の名稱起れり。凡そ着色ある版畫を大別して二となすべし。其一は筆彩の刻畫にして、他の一は色摺の版畫是なり。錦繪は後者に屬するものなり。百科

【ミュンヘン】　Munchen　獨帝國バアバアリア王國の首都。伯林を距る百二十餘里。ドナウ河の支流イザール河に跨り、千七百餘尺の高原に位し、アルプ連嶺を十里の內に望み風光頗る明媚なり。中世紀の建築にかゝる諸寺院、國立博物館、劇場、法院の外、音樂、繪畫、美術工藝盛にして大學、工業專門學校、王立圖書館等あり。ミュンヘンビールの產地として有名なり。百科による。

【ドレスデン】　Dresden 獨の都會。伯林の南約四五里、其位置の快濶なると稀世の美術品を藏せることの爲にヘルデルは此を獨のフイレンツェ(フローレンス)と呼べり。博物館には繪畫、彫刻の蒐集甚だ多く、伊太利及フランドル名家の作少なからず。其他古物館、圖書館、考古館。有名なる王立音樂學校、王立高等工業學校あり。市有の劇場三あり、中でも王宮劇場は世界大劇場の一なり。商工業盛にして、圖書の出版、美術品の製造も亦盛大なり。百科による。

【エナ】　Jena.　イエナ。獨のザクゼン・ワイマール、アイゼナハ大公國のアポルダ地方の一市。有名なる大學・圖書館及城趾を有す。百科。

【ワイマール】　Weimar　ヴァイマール。獨聯

邦の一なるザクセン、ヴァイマール大公國の首都。十八世紀の末より十九世紀の初に亙りて、ゲーテ、シルレル、ヘルデル等の名士カール、アウグスト大公の保護の下に此地に住せしより獨文學の中心點となり「ドイツのアテネ」と稱へられたり。百科。

【ゲーテ】 Johann Wolfgang Goethe（一七四九―一八三二）獨の詩人。初めライプチヒ大學に入り法律を修む。後ストラッスブルヒ大學に轉じこゝでヘルデンに逢ひ大に感化を受けた。此間に戯曲、詩の作あり。一七七二年の夏ゲーテ、ウェッテーにあり、友人の許嫁に戀し、其を元にして小説を著し迫ちにして名聲を博す。此後も戯曲、抒情詩等多くの作

があるが一七八六年伊太利に旅行し羅馬に於ては美術の研究に從ひ畫家達とも交誼があつた。又科學的研究にも耽り、比較解剖學、植物生理學に於て重要なる發見をなし、又光學上に於けるニュートンの諸説を駁した。一七九四年シルレルに逢ひ、意氣相投合し、此より十年（シルレルの死に到るまで）の交誼を結んだ。後二人で合作の諷刺詩等を作つたが一八〇五年シルレルの死を聞いたが當時病床にあつたゲーテに取つては非常な打擊であつた。彼は詩を作つて友人の死を紀念した（文藝百科による）

【シラー】 Johann Christoph Friedrich von Schiller（一七五九―一八〇五）獨の劇詩人。一七七三年藩主の命令でウェルテンベルヒのカルル校に入り法律を修め二年後醫科に轉じた。當時彼は苛酷な校則の下にあつて文學書を耽讀し此等に倣つて戯曲 "Die Raub ?r" を書き一七八一年出版翌年劇場に上せられ非常な評判となり、爲に藩侯の怒りに觸れ遂に逃出し、處々に轉じ劇場詩人となつたりしたが非常な窮境に陷り人の保護を仰いだりした。一七八八年に最初の歴史的著作が出來、八九年イエナ大學の史學教授に任ぜらる。かくて過度の勞作の爲病を得、癒えて後は專らカントの哲學殊に美學的方面の研究に從ひ種々の本を著した。九四年ゲーテと親しくなり、一七九八年より彼の戯曲時代に入るが此にも數

多い著作がある。文藝による。

【蔓】 ツル。或種の植物の莖の細長くのびて物に絡り又は地に匐ふものゝ總稱。廣辭。

【ゲッチンゲン】 Gottingen. プロシヤのハンフエル洲にある都會。ライン河に瀕し、カッセルを北東に距る鐵路三六哩。ゲッチンゲン大學の所在地として著はる。其他諸學校、考古博物館、新式劇場等あり。十八世紀の末葉に於ては燦爛たる獨文學の中心地たりき。百科による。

一〇　曾呂利新左衞門

作者

【湯淺常山】　ユアサジヤウザン。名は元禎、子祥と稱した。備前岡山の藩士である。寶永五年に生れた。長じて江戸に遊學し、服部南郭・太宰春臺等の諸名士に交り、復鄉里に歸り祿を受けた。彼は親に仕へて至孝、官に在つて方正、文を好むと共に武を勵んだ。晩年君侯に直諫して忌諱に觸れ、退隱の身となつた。それからは著書をなし餘生を送つた。著す所、常山紀談・常山文集・常山樓文集・常山樓筆餘・東江筆記・備前典刑・文會雜記・熊澤先生行狀・左傳解・列公遺事・君則・幼學指掌等がある。天明元年（二四四一）四月九日七十四歳で歿した。

出所

【常山紀談】　二十五卷、異本が數種あつて記事の互に出入してゐるものも少くない。元文四年五月九日の自序がある。有明堂文庫では全一冊にして收めてゐる。同文庫本の緒言及び凡例によつてその內容を略記する。

內容、緒言、戰國時代より德川氏の初世に至るまで、百餘年間に於ける名將傑士の言行を捃摭載錄せるものにして其の旨とする所、蓋し古武士の意氣精神を傳へて士人修養の鑑戒たらしむるにあり。華麗絢爛の文藻に乏しと雖も暢達の文透徹の筆よく其の言はんと欲する所を盡し百年の後尙讀者をして感奮興起せしむるもの少からず。是れ本書が幾多同種の載籍中にありて獨り群を拔いて世に行はれ永く讀者を失はざる所以なるべし。

凡例

一、凡そ此の書、天文永祿の比より泰平に及ぶまでの事實をあつめしるせり。戰國の時勢、國初の風俗、武人の言行、是皆世を觀る人の尤も識るべき所にして、是輒錄の本意なり。

一、吾が國の士氣、源平の世と戰國の世と異同なきに非ず。凡そ古の風俗を尙び、義を尊び、節操を重んじける事ども、古き物語に見えたり。戰國の士多くは利名を貪るにあり。されば節義の士の姓名散逸せん事なげかしく、つとめて殉難忠臣の姓名をしるせるも、又此の書の本意なり。

一、戰國の間記載詳かならず、相傳ふる所誤れる事少からず。一事にて異說多きあり。同異孰か是をしらざるは、其の說々をも悉くしるせり。人の姓名及び年月の審かならざるも、只記し傳へ、かたり

傳ふるまゝにせるは、比校すべき典籍のなければなり。

一、賞譽すべき事にも非ざるをしるせり。是は唯其の世の有さまを想ひ見つべきが爲なり。

一、戰國の武者詞一種あり。皆其の傳へたるまゝに記せり。又いひ傳ふる世の詞も、その傳ふるまゝにしるせり。

すべて二十五卷四百七十條からなつてゐる。本課は第九卷に「曾呂利新左衞門屢頓智の事」として載つてゐる。常山紀談は、博文館發行の續帝國文庫第三十一篇にも收められてゐる。

要旨

曾呂利新左衞門が太閤の寵を得て仕へてゐた時の滑稽頓才の二三を擧げたものである。

人口に膾炙してゐる曾呂利の滑稽を知らしめそのをかしさを喜ばせると共に、滑稽よく英雄の感情をも和げ得るものなる事をも知らしめ、又一方、太閤の半面や當時の大名氣質の一端を窺はしめ度い。

尙本課は後に出る「曆氣樓」「父母の思出」の章と同じく近世文であるから、この點にも留意して說話せられたい。

段落

一、堺の鞘師……又折節來るべしといはる。（七三頁一行まで）

曾呂利、太閤に初見參の時、早くもその滑稽が太閤の意にかなひ、爾後寵を得て出入を許されるやうになつた話。

二、他日また太閤に謁しけるに……太閤も亦呆然として愕き給ひけりとなん。（七五頁三行まで）

1、他日再び見參の時の諧謔。

2、曾呂利の機智――、太閤の耳を喫いで、諸大名から金銀財寶をせしめた話。

三、又或日の事なりしが……太閤もこれには呆れて暫しことばもなかりけり。（七六頁二行まで）

曾呂利の機智――太閤から米倉二戸前の米をせしめた話。

四、又或時太閤數多金銀の蟹を造らせ……終りまで。

曾呂利の頓才――金銀の蟹を澤山貰つた話。

解釋

【曾呂利新左衞門】　和泉の人、堺浦の南莊に居て刀鞘を造るを業とした。人となり慧敏で、和歌をよくし、常に好んで閑室に居り、家に儋石の儲なきも晏如たるものであつた。香道を志野宗心に受け又茶事を好んだ。最も滑稽に長じた。本姓は阪本（或は坂內、又中川）。初めの名の甚右衞門（又嘉右衞門にも作る）出家して宗祐といつた。秀吉に仕へるこ

と三十年、寵を得て之に侍し、常に忿を和げ、愁を慰めた。慶長八年九月死、年不詳。

人名

【鞘師】　サヤシ。刀の鞘を造るを業とする人。大國。「鞘」は刀の刄をさし納めて置く器。狹屋といふ意味であるとの說と、差す屋の略であるとの說とある。儀式に用ひる飾太刀は丸鞘で、普通のものは平鞘である。漆を塗るのを通常とするが、木地のまゝで塗らぬ木鞘、唐木で作つた唐木鞘、刻のある刻鞘、鮫皮で覆うた鮫鞘等がある。皆鞘師といふ專門業者の手で造られるのである。

【太閤】　タイカフ。(一)上古は攝政又は太政大臣の尊稱。後には關白を辭して尙ほ內覽の宣旨を被りたる人、又は關白を其の子に讓りたる人の稱。臥雲日件錄、寬正七年七月十二日「外記常忠居士來、予就二本朝故事一、問二不審一、(中略)今一條殿稱二太閤一、此號如何、曰、父已爲二關白一、其子又必關白、父尙存則稱二太閤一、槐記享保十四年五月「仰せに、近代太閤と申すことを、關白の父は必ず左申すやうになりたるは、きみわるきことなり、上古は太政大臣の入道をこそ太閤とは申しつれ。太政大臣を閤下と云ふ。近代は關白の父をさして、凡て太閤と云ふ。」(二)江戸時代、愚人の稱。遊民間に行はれたる語。大國。

こゝは豊臣秀吉をさす。秀吉は甥の秀次を養子とし、之に關白を讓つたので太閤の稱を

用ひたのである。右記の如く太閤と稱し得る人は幾人もあるのであるが、後世は專ら秀吉の稱の如く思はれるに至つた。秀吉自ら太閤と稱した事は、現存の彼の自筆の書簡によつて明らかである。

【はて】　(一)怪しむとき、惑ふとき等に發する聲。(二)考へかへす時に發する語。大國。こゝは(一)。

【いはれ】　いはるべきわけ。いふべきゆゑしよ。理由。廣辭。

【別儀にあらず】　ほかのことではない。餘の儀ではない。原文は「別に非ず」とある。「別儀」ベッギ。(一)ほかの事。ほかのわけ。他事。(二)格別の理由。特別の事情。大國。なほ大國「べちぎ」の條には下のやうに出てゐる。別儀・別義(一)べつぎに同じ。(二)別義揃(ベッギゾロ)の略

【曾呂利】　ソロリ。(一)徐々の一(しづしづおもむろ・じよじよ)に同じ。(二)するりに同じ。曾呂利狂歌咄「此の者の本名は河左衞門といふ(中略)刀の鞘師なり。細工に名譽を得て、小口よりさし入るに、そろりと鞘口よくあふ故に、異名をそろりと云ひけるが、秀吉公へ召し出だされ」

「するり」(するするに似て、勢ひ急なる義)(一)速かに滯りなきさまにいふ語。(二)すべり抜くる狀にいふ語。以上大國。曾呂利は當字。大國には「徐」を揭げてある。

【敢て】（一）おしきりて。強ひて。あながちに。無理に。（二）ひたすら。一概に。更に。さつぱり。大國。こゝは（二）。

【つかへず】刀の刄が鞘のふちにつかへ滯ることなくはいるをいつた。

【折節】ヲリフシ。時たま。たまには。時々。廣辭。こゝは時々の意。

【曾呂利曾呂利新左衞門新左衞門】太閤の二度尋ねたに對した滑稽。

【殿下】デンカ（一）宮殿又は殿堂のした。（二）殿階のした。（三）昔時、皇族又は攝政・關白・將軍などを呼ぶに用ひたる敬語。（四）皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・內親王・王・王妃・女王又は李王家・李王の懿親にして公となりたるもの及び其の配偶者を呼ぶに用ふる敬稱。

【願はくは】〔ねがはくは、ねがふの延〕願ふ所は。こひねがはくは。大國「願はくば」と濁るは非。疑ふらくは・恐らくはなどみな同じ。

【一日】イチジツ。ひとひ。こゝは、いつかひとひだけの意。一日はイチジツとも、イチニチとも讀むが、讀方によつて義を異にする場合があるから大國に記されてゐるのを左に錄する。

「イチジツ」（一）多くの日に對して、ただ一日。（二）月の初めの第一の日。ついたち。

（三）いちにちに同じ。終日。（四）ある日。「イチニチ」（一）朝より暮までの間。ひとひ。ひねもす。いちじつ。終日。（二）朝より翌朝までの間。一晝夜（三）月の最初の日。いちじつ。ついたち。

【訝しく】イブカしく。うたがはしく。不審に。あやしく 廣辭

【こやつ】「この奴」の約つたもの。人を賤しんでいふ語。

【何をかなすらん】何をするのだらう。

【何はともあれ】何かの物事は、いかにあらうとも。ともかくも。まあまあ。何はとまれ。大國。

【機嫌】（一）佛經の語、譏嫌の誤、人の忌嫌（イミトラヒ）を伺ひ知ること。（二）時機（トキヲリ）。都合。「世に從はむ人は、先づ機嫌を知るべし」「機嫌を顧み候はず推參仕て候」（三）轉じて、心地。起居（クヲチガ）。「機嫌を伺ふ」。（四）又轉じて、氣色。氣合（キアヒ）。氣分「機嫌がよい」。「機嫌がわるい」。言海 こゝは（三）。

【體】テイ。風體。容子。ありさま　すがた。かたち。言海。

【かやつ】彼奴、他稱の代名詞。彼に同じ。罵り呼ぶにいふ。言海。

【讒言】しこづること。人の善を惡として、他に告ぐること。言海。

【數日】スジツ。又、スウジツ。大國。

【香はしき】カグはしき。かうばしい。

【功德】　功は福利の功能、此の功能は善行の德なれば功德と云ふ。又、德は得なり、功を修めて得る所あるを功德と云ふ。大乘義章九「言二功德一功謂二功能一。善有二資潤稲利之利一。故名爲レ功。此功是其善行家德、名爲二功德一。」佛教

大國　功德の條に、「功は惡盡くること。德は善生ずること。又、功は物を施すこと、德は己れに歸すること。佛語。現在また未來を資益する善き作業。

【効能】　カウノウ。功能に同じ「功能」（一）きゝめ。しるし。效用。效驗。（二）功績と才能と。大國。

「効」本義は模倣することにて效の俗字。後世文を刀にかへ効と書く。交は音符　效・効同字。但し今はキ、メの義の時は大抵效を用ふ。大字。

【呆然】　ボウゼン。あきれはてたる貌。「呆」（一）音ハウ。保に同じ。（二）音ボウ・ム。某に同じ。おろか。特訓、あきる、あきれる、あきれ。大字。なほ大字の字源を說いた所に、呆は保と同字ともいひ、又某の古文ともいふ。されど現今は呆然・呆氣・癡呆・痴呆等オロカなる義に用ふ。」とあり、注意として、「我が國にて物事の意想外なる爲に驚きて心を失ふ義にて、ァキレルといふは、呆然・呆氣等オロカなる義より轉ぜしものならん。」とある。

【愕く】　オドロク。「驚」は思ひ掛なき事に恐るべき事あるをハツト思ひ、心のシマルこと。大小・輕重・緩急・人物にオドロク・オドロカス通じて用ふ。「駭」よりは平にして長し。馬はオドロキ易きもの故馬をかく。「駭」は驚起也と註し、コレハシタリとビックリしてオドロキ上り胸騷ぎすること。驚よりは强く急也。「愕」は錯愕・倉卒驚蘧貌。膽をつぶしオドロキ・アワテフタメクこと。大字。但しこゝは特に區別する必要はあるまい。原文は「驚愕きけるとなん」とある。

【給ひけりとなん】　「なん」は、助詞ぞ・なんや・かのなんで、こゝは下に「いふ」などの語が省略されてゐる。

一〇　曾呂利新左衛門

【賜はせん】　「賜はす」といふ他動下二段活用の動詞の未然形「賜はせ」に未來の助動詞「ん」のついたもの。「賜はす」は、たまはらす、頂戴せしむ。大國。

【頗るその功ありしかば】　機嫌をよくさせることに功があつたので、新左衛門の機嫌のとりかたで、秀吉の機嫌の甚だよかつたからの意。

【紙袋】　カンブクロ、又、カミブクロ。紙にてつくりたる袋。大國

【張拔く】　ハリヌク、張拔に作る「張拔」は、木製の型に紙を重ね貼り、糊の乾きたる後、型を拔取りて作りたるもの。はりこ。大國

【數十百人】　スウジフヒヤクニン。數十人乃

至百人の意。數百千人といへば、數百人乃至千人のこと。

【二戸前】　フタトマヘ。二戸分の意。「戸前」は、藏の入口の戸のある處。轉じて、藏・倉庫などの數をあらはす東京語。

【さすがの太閤も】　太閤ほどの智慧、度量のある人も、さすがにあれほどの太閤も。「さすがに」は「しかすがに」の約。(一)さうは思ふものゝ。さうではあるものゝ。さはさりながら。(二)すぐれたる程ありて　音に聞こえたる程ありて。本分を失はずして。いかにも。廣辭。こゝは(一)。

【泉水】　センスヰ。庭前に設けたる池。廣辭。

【近習】　キンジュ。主君の側近く侍り仕ふる役。近侍　おそば。小姓。廣辭。言海。「又キンジフ「キンシフ」ともよむ。言泉に「キンジュ」は「キンジフ」の訛とある　字源は「キンシフ」「キンジュ」としてある。

【一用】　一の用途。

【紙押】　カミオサヘ。文鎭(ブンチン)。

【頓才】　トンサイ。機に應じ變に處してはたらく才。廣辭。

鑑賞

本文の滑稽はかの落語に多い言語の遊戯に比べると深みがあつて面白い。太閤の耳を嗅いだ時の事を書いた一節の如き、よく意氣地なき大名の無節操を冷笑せしめ、果してこのやうな事實があつたかどうかは知らぬが、ともかく頭のいゝ曾呂利の皮肉が見えてをかしくなる。どこか當時の大名氣質を諷刺した作者の用意があるやうにも思はれる。又紙袋で二戸前の米をうまくせしめたといふ一節も、さすがの太閤をやりこめて誠に捧腹絶倒せしめる。この二つは滑稽ではあるが、併しやゝ惡戯が過ぎて居る位に思はれる。が、ともかく太閤ほどの人にこの惡戯が平氣で許されてゐるのは畢竟滑稽の得、曾呂利の德といふべきであらう。

この話は內容もおもしろいが、作者の如く文學的の素養も豐富でなければ、唯歷史に詳しく逸話や事實を知つて居るだけでは、これだけ手ぎはよく簡潔には書けない。曾呂利の面目はこの輕快な諧謔を交へた文章によつていよ〳〵おもしろく浮ぶ。

挿繪

「豐太閤像」(七三頁)畫上に著けた贊によれば、慶長四年二月卽秀吉薨後半年を出でぬ頃に、寵臣富田左近將監信廣が畫かしめた像らしい。秀吉の像は社寺や諸家に數多く殘つてゐるが、大抵相似た形式を持ち、その顏は猿面冠者とも、また信長の所謂「禿ねずみ」の樣にも見ゆるもので、筆者は山樂と傳へるものが多い。(世界美術全集卷二十)

一一　磯邊の小石

作者

【相馬御風】　サウマギヨフウ。詩人・思想家・評論家。名は昌治、新潟縣糸魚川(イトイガハ)町の人、明治十六年七月十日生。明治三十九年早稲田大學文科卒業。在學中、岩野泡鳴・前田林外等と共に詩歌雜誌「白百合」を發刊し、詩人として知られた。三十九年第一歌集「睡蓮」を發行し、ついで「御風詩集」を出し、柔婉な調を稱せられたが、後口語詩を唱導して詩壇に革命を起した。三十九年から島村抱月氏を助けて「早稲田文學」の記者となり敏感能文の論客として認められ、抱月氏が文壇を退くや、その後をうけて中村星湖と「早稲田文學」を主宰して文壇を賑はした。又、早稲田大學に教鞭も執つた。大正五年「還元錄」の一書を殘し、一家を擧げて鄕里糸魚川に歸つた。爾來眞生活の追求者として眞摯な努力の下に、思索と研鑽とを續けてゐる。殊に鄕國の偉人良寛上人を紹介推讃して一世の注目を惹いたのは周知のことである。

著に「自我生活と文學」「黎明期の文學」「凡人淨土」「毒藥の壺」「第一歩」翻譯トルストイの「アンナカレニナ」「我が懺悔」「人生論」「性慾論」「ハジムラト」ツルゲネフの「その前夜」「父と子」「貴族の家」等の外、「良寛和尙詩歌集」「良寛和尙遺墨集」「田園春秋」「砂上漫筆」「愚庵和尙の一生」「生の寂味」「爐邊雜記」「緣蔭漫語」「對山雜記」「樹かげ」など種々ある。

出所

【野を歩む者】　大正十四年十二月十八日、東京芝區八幡町厚生閣發行。定價金二圓三十錢。

內容。氏の感想隨筆を集錄したものである。その序に「昨年九月に出した『雜草苑』に收めた以後の私の感想隨筆の殆ど全部をまとめて此の一卷を編んだ。觸れてゐる問題はかなり多岐であるが、しかし容を正して世に問ふといふやうな心持で書いたものは一篇もない。むしろ氣の合つた友達を相手の打ちくつろいだ座談といつたやうなものばかりである。」とある。本課はその第二篇である。この他、音と沈默・尊い遊び・水の音・良寛と魚肉・こどもについての雜感・「おとな」と「こども」・田園雜興・民謠について・大地の踏み心地・冬から春へ・北國春信・邊土夏興七題・初秋の窓から・初冬の北國・冬籠雜記等三十七篇から成つてゐる。

要旨

一一　磯邊の小石

時々磯邊へ出かけては小石を弄んで、子供と共に寛いだ時間を送る作者ののんびりした生活を述べ、そしてその間に、貴い樂しむ心を與へてくれたその無言の小石に感謝し、又その小石からの感想を書綴つた隨筆である。作者は大正五年の春、一篇の告白「還元錄」を殘して鄕里糸魚川に退耕し、眞生活の追求者として眞摯の努力を續けてゐる人である。本課に入るに先立つて先づその現在をも說く必要があらう。前章と同じやうに、かうした文を讀んで所謂文壇の大家を覗ひ、その風にも接せしめ度い。

段落

一、私達の住んでゐる町の海岸は……私の最も好ましい慰安の一つとしてゐる。（七八頁三行まで）

この糸魚川の海岸は一帶に小石原である。その小石原へ出て、時に歩いたり坐つたり眺めたりする事を慰安の一としてゐる。

二、私は又時々そこで……深い感謝を捧げずには居られない。（八一頁末行まで）

（一）その小石原で、いろ〳〵の小石を集めたり探したり拾つたりして他愛なく遊ぶ。

（二）又時にはその拾つた石を海面へ投げてみる事もある。

（三）又時には坐つた傍の石を一つ〳〵眺めて樂しむ事もあつたが、そのどの石にでも亦それ〴〵その特色のないものはないといふ事に氣がついた。そしてそのどれにも心を惹かれた。

（四）だから、拾つたり探したり捨てたり投げたりして樂しむ事は樂しむが、その小石のどれといつて、置去りにしても別に執着を感じない。

（五）この貴い樂しむ心を與へてくれる無言の石に少からず感謝する。

三、石はいつも同じ形をしてゐる……嘲りもする。（八二頁七行まで）

（一）心の變化につれて、又それを照返す光の變化につれて、石の風情は千變萬化する。

（二）だから心の變化で、笑ひもし、泣きもし怒りも嘲りもする。

四、愚庵和尙は……石はやはり冷たい方が感じがよい。（八三頁一〇行まで）

（一）愚庵和尙は玉を愛し、良寛和尙は手毬を愛した。

（二）なるほど丸いものを撫でると心が和らぐやうな氣がする。

（三）だが、石はやはり冷たい方がよい。撫で廻したりして肉體の溫みが移つた感じはよくない。

五、海岸に坐つて……終りまで。

僅かな時間でも恰も長い時間樂しんだやうな感じを與へる程、小石を友にして居ると樂しい。誠に有難い。小石に感謝する。

解釋

【私達の住んでゐる町】　越後糸魚川(イトイガハ)町。日本海に面す。

【一帶】　イッタイ。（一）ひとすぢ。（二）全般。廣辭。こゝは（二）。

【小石原】　コイシハラと發音する。小石の多き原。大國。

【慰安】　キアン。なぐさめやすんずること。

【しかも】　然(シカル)に、感動の「も」を添へたる語。證をあげて慥なる意をいふ語。

【あづさ弓】　「梓弓」引く。張る・音・本・末・射るなどいふ語の枕詞。あづさ弓張ると春とにかけたのである。

【今日もかも】　今日もマア。「かも」は感動の助詞。

【攫んで】　ツカんで。

【惹かれる】　ヒかれる。ひきつけられる。

【執着】　シフヂヤク。佛教の語、執心して思ひ入ること。深く思ひをかくること　言海。

【石ころ】　石轉(コロ)か、石塊(クヮイ)の轉か。石の小さきもの。小石。礫。言海。

【風情】　フゥゼイ。（一）けはひ。おもむき。あぢはひ。「――ある眺め」。「何の――もなし」。趣致。（二）其の趣の者共。「彼等――」「私――」。流。言海　こゝは（一）。この語は、本卷五課「淨瑠璃寺への道」でも註した。

【千變萬化する】　色々に變化させる。

【石は笑ひもする】　石は笑つたりなんかもする。さう見えるのである。

【晩年】　年の老いたる時。老年。老後。

【手毬】　テマリ。玩具の一種。綿をまるめて心とし、上を色絲にてかゞりかざりたるもの、これを地について遊ぶ。廣辭。

【心ゆく】　（一）おもひはる。きがすむ。（二）心をとられて恍惚とす。ほる。廣辭。こゝは（一）。

【溫(ヌク)みが移る】　丸い石を撫でて居ると心は和らぐが肉體の溫みが移つて生暖かになつていけない。石は冷たい方が石の本性に叶つてよいからといふ考へから云つたのである。

【實際よりもずゐぶん永く云々】　實際の時間よりは、長い間樂しんだやうな氣がする程樂しませてくれる。

鑑賞

氏が糸魚川へ落着いてから、無聊の時々、海岸へ出て石ころを友に、時間を送るゆつたりとした其の生活があり〳〵と見える。

「月清き夜の磯邊をゆきかへり拾ひては捨つ石のいくつを」

月清き磯邊を逍遙して、石を投げ込んだりしてゐる氏の姿が瞭かに浮かんで來るではないか。

「あづさ弓春の磯邊に今日もかもをさな兒とわれと石なげて遊ぶ」

又今日も磯邊へ出て子供等と石を投げて遊んだのである。退屈すると出かけたのであらう。

「をさな兒のなげたる石もわが投げし石も同じく海に落ちたり」

靜かな海面へ子供と一緒に石を投げてみたりした時の作であらう。

かうして川原を樂しみ、石を友に、子供を友に、拾つたり探したり投げたり眺めたり、そして貴い樂しむ心を學んだといふのである。石ころ達に深い感謝を捧げるといふ心の經過が十分にわかる。

執着もなく捨てゝ置いてかへるといふのはどの石にもそれ〴〵に特色あり、一つ〳〵に心を惹かれ、さてそのうちどれをと特に思へないからである。卽ちみなの石に感謝をしてゐるからの事。

この石も、時には怒つたり嘲つたり、又泣いたり笑つたりする。それはそれに對する人心の變化から、その風情が變るのであるといふ感想、又石は冷たいがよい、手で持つてゐると手の溫かみが移つて、どうも石らしくない。併し丸い石を撫でてゐると心が和らぐ、それで、愚庵や良寛の丸い玉や手毬を愛したといふ心には、なるほどと共鳴するといふ感想、これは本文の主體ではなからう。それよりも末尾の「海岸に坐つて小石を拾つたり捨てたりしてゐても、かなり永い時間を樂しく過す事の出來るのは感謝すべき事である。」といふところに、どこやら深い省察があることを注意したい。

挿繪

【海邊の圖】（七八頁）川北霞峰筆。文展第十回出品「海邊八題」の中の第六。

川北霞峰。カワキタカホウ。名は源之助。明治八年九月京都に生れ、初め四條派の大家幸野楳嶺、及、菊池芳文に學び、京都市立美術學校の教諭となり、文展には第一回「晩秋」、第二回「竹徑春淺」、第三回「浦の夕」、第五回「噴火坑」、第七回「晨鐘」、第八回「淺間の秋」、第九回「立山」「都人と重衡」を出して殆んど毎回三等賞を受け、第十回に「海邊八題」第十一回に「吉野の奥」を出して何れも特選の名譽を荷つた。大正八年帝國美術院推薦となり、同十二年帝國美術院審査員に擬せられた。（明治大正文學美術人名辭書）

「磯邊」（八〇頁）竹內栖鳳筆。文展第十二回出品畫「河口」竹內栖鳳。タケウチセイホウ。名恒吉。元治元年十一月京都御池通油小路の料理店に生れ、十四才の時土田英林の門に入つて始めて畫筆を執り十八才の時四條派の大家で殊に花鳥畫に秀である幸野楳嶺の門に移つた。爾來畫名漸く高まり、京都美術學校教諭に任ぜられ、別に家塾を開いて幾多の秀才を輩出せしめた。三十三年八月渡歐翌二年歸朝後畫風一轉し號も棲鳳を栖鳳に改めた。三十五年院展に「古都の秋」を出して江湖の賞讃を博し、四十年文展日本畫部審査員に任命されて又大正三年帝室技藝員となつた。文展には第一回「雨霽」第二回「飼はれたる猿と兎」第三回「あれ夕立に」第五回「雨」第七回「繪になる最初」第十一回「日

稼」を出した。大正八年帝國美術院會員となる。（明治大正文藝美術人名辭書）

「良寛遺愛の鉢の子」（八三頁）良寛全集（大島花束編、岩波書店發行、定價五圓五十錢）口繪寫眞所載。

斷　片

○

「野の煙なびかぬ程をうれしみぬ、胸しづかなる夕ぐれなれば」私は嘗てかういふ歌をよんだ事がある。風のない夕ぐれに、遠くの丘の上などから、眞直に立ち騰つた紫色を帶びた煙の、末は夕空の朧の中へ消えて居るやうな――さう云ふ靜かな煙の姿を、私は愛する。併しそれは餘程心の落ち着いた、シンミリした時でそんな時は私にとつては誠に得難い。私は得難いその靜寂の時を愛する。何物にも動かされず、微かながらもおのが心のまゝに、高く高く昇つて行くその靜かにしてさびしき一刹那の煙の心を私は愛する。

○

唯一人野原を歩いてなんか居る時と全く違つて、多勢の人中に居る時に私はやるせない孤獨の感に撲たれる。唯一人居る時に感ずる孤獨と、人中で感ずる孤獨――前者は絶對の孤獨であつて、後者は相對の孤獨である。而して私はより多く前者の中に藝術の天地を求める。

――相馬御風、樹かげ――

一二　青　空

作　者

【千家元麿】センケモトマロ。明治廿一年六月八日東京市麹町區元園町に生れ慶應義塾大學に學び、白樺一派の中に加はつてよい作を發表してゐる。詩集「自分は見た」「虹」「麥」「野天の光」「炎天」「夜の河」戲曲短篇集「青い枝」「新生の悅び」「冬晴れ」等の作がある。

出　所

「野天の光」全一冊。新潮社發行。定價一圓五十錢。詩約二百篇を含む。

序文に「この内には正しいもの、新鮮なもの、清いもの、壯麗なもの、優美なもの、燃ゆるもの、健康な快樂を求めてくれ、俺は内から來る力を直接に氾濫させた。人間の喜怒哀樂と造化の美と巧みが、高潮に達した貴いイリュージョンに燃え貫かれてこの詩集に漲り溢れてゐるだらう。野天の光

よ、麗はしき世界の上に平和に輝き燃えよ。」とある。

要旨

自然に對する觀察力を深め、其處に含まれてゐる無限の詩味を味はしめ、ひいては詩的情緒を涵養さすの一助ともしたい。

解釋

【漫々】ひろきさま又はながきさま。廣辭。　一【歪にしない】ヒズミにしない。不正にしない。

鑑賞

綱島梁川氏の病間錄に「意ふに詩と神と、太源一也。有象有形に執する詩人、若し一たびその根抵に深潛せば、肅然としてその權威にぬかづくべし。宗教家、もし神の姿を分明に描出せんとせば、即ち彼等が機根さまざまに如來と現じ、天文と顯れ、慈悲と垂れ、光明と輝き、あるは天上清輝の星とさゝやき、あるは籬落微韻の花と點ずべし。詩を無限に繙けば實在の神となり、神を有限に織り出づれば縹渺の詩となる。詩は直ちに神に薄り、神はおぼろに詩を照返す。げに詩人と宗教家とは宇宙を家とする最も親しきはらからなりけり」といふ一節がある。此詩と併讀する時に得る所が多いと思ふ。

一三　兄弟の對話

作者

【野上彌生子】ノガミヤエコ。明治十九年豐後に生れた、明治女學校卒業。夙に作家として知られ、短篇小說「或夜の話」「五つになる子」「父親と三人の娘」の外翻譯「傳說時代」「ソニヤ・コブレフスキ自傳」等がある。緻密な觀察とすつきりとした上品なしかも巧妙な文章とは味の濃かな幾多の佳篇を出してゐる。野上豐一郎氏の夫人である。（明治大正文學美術人名辭書）

出所

【新らしき命】大正十四年三月廿五日。岩波書店發行、定價二圓三十錢。

內容は「新しき命」「小さい兄弟」「母親の通信」「小指」「渦」が入れられてある。本文は「母親の通信」と題する書簡體の一文から採る。

要旨

かうした對話風な小文を讀む事によつて作文に對する興味をおこさしめ、又かうした文を作る時の參考の一助ともしたい。

段落

一、茶の間の大きなテーブルの上に……頭の中に起つて來たのでありました。（八七頁十一行まで）

幼ない兄弟が人間の生活は他の生命を取らなければ出來ないと考へる。

二、「空氣は生命がないよ」……充たされてゐました。（八九頁五行まで）

そして他の生命を取らないで生活するといふに及ぶ。

解釋

【提案】　テイアン。議案を提出すること。又提出したる議案。廣辭

【穴居生活】　ケツキヨセイカツ。白然又は人造の穴の中の住居、未開の世に行はれしすまひ。廣辭。

鑑賞

文を鑑賞するに便利なため、此後を少し拔書する。

「これは、彼等の對話のほんの一例にすぎません。私がすべて彼等の談話を書きとめて置くならば、その中から優秀な對話集を編むことが出來るだらうと思はれる位、それは非常に暗示的で哲學的で、人生問題の根本に觸れたテマが數多く見出されます。この間、二人は神樣はどんな顏してゐるだらう、と云ふ事を長い間討論しました。生命の問題、死の問題、富の分配の問題、王樣と乞食の問題、その他何故花が咲くか、星が輝くかの問題――古來の哲學者や宗教家や社會政策家や、また多くの學者たちの頭に問題となつたものが、この小さい二人の兄弟にも屢々問題となつて現はれます。彼等はそれに對して、彼等獨特の解釋をつけます。而して分からなくなるとみんな神樣のところへ持つて行きます。」

かうした事柄はよく經驗する事である。作者は或意味で原始人と等しい子供達が次第に社會人になりつゝあることに興味と微笑を持つて書いてゐるのである。讀者たる我々にも同じ事が感ぜられると思ふ。

挿繪

「兄弟畫家」（八六頁）ジヤック・シモン筆、一九二四年度佛蘭西展覽會出品畫「小畫家」

一四　伊豫すだれ

作者

【里見　弴】サトミトン。本名山内英夫（ヤマノウチヒデオ）。明治廿一年七月横濱市に生る。有島武の四男。出生と同時に母の實家山内家の姓を襲ふ。廿九年學習院初等科三學年に入學、卅四年中等科に編入、卅九年高等科に進む。此頃より文藝作品に親しみ四十二年東京帝國大學文科英文科に入學したが聽講月餘にして倦みやがて退學す。長兄武郎次兄壬生馬に刺戟されていよ〳〵作家たらんと志す。四十三年武者小路實篤。志賀直哉。木下利玄。菅野二十一。柳宗悅。長與善郎。及二人の兄達と共に雜誌「白樺」を創刊する。此時に父の叱責を恐れてこの筆名を用ひた。その後新作の發表毎に漸次其才と名筆とを認められ、遂に文壇に確乎たる獨自の位置を占むるに至つた。

短篇集「善心惡心」大正五年「三人の弟子」六年「慾」八年「毒蕈」九年「幸福人」十一年「父親」十二年「雨に咲く花」十三年「緣談饗」十四年。の他長篇「多情佛心」十三年「凡夫愛（陷沒）」十四年「滿潮」同年「今年竹」等、尙、隨筆「赤き机に凭りて」「白醉亭漫記」及び「文藝管見」等が出版されてゐる。（現代日本文學全集里見弴集年譜による）

出所

「緣談饗」大正十四年。改造社發行。定價二圓三十錢。

内容は「緣談饗」の中篇及び「無言の晩餐」「伊豫すだれ」「不貞」「オード・キニン」「大臣の晝飯」「うで王子」「夢みたいな話」「備忘錄より」「穴」「仕合な藤七」「石門の奥に」の短篇が集つてゐる。本文は伊豫すだれの抄錄である。

要旨

秀れた現代文の解釋と鑑賞、殊に心理描寫の粹と會話の妙を味はふ事によつて、國文學上の見識をひろめさす一助にしたい。

段落

初めより……靜かに目をつぶつた。（一〇〇頁四行まで）

會話の中へ或小さな事件と、此二人の女性の人柄を描き出してゐる。

うしろから呼びかけて……終まで

女主人公の心持の動き方と周圍の情景をうつしてゐる。

解　釋

【伊豫すだれ】伊豫國より產出するすだれ、篠の太さの均一なるを特色とす。いよす。廣辭。

【親身】シンミ(一)親しき親族、ちかきみうち(二)心實、深切。廣辭。

【錠劑】ジョウザイ。粉末狀の藥物に强壓を加へて扁平又は凹面の圓板狀となしたる藥劑。廣辭。

【生の催眠劑】ナマのサイミンザイと原本に送假名がある。催眠劑――五官の感受性及反射機能を亢奮せしむることなく動物をして催眠狀態に陷らしむるに使用する藥劑。麻醉劑と異なるところは、呼吸及心臟の活力を減ずるにあり。廣辭。

【生身】ナマミ。原本にかう送り假名がある。

【朝鮮人參】テウセンニンジン。五加科の宿根草。古來根を藥用に供す。原產地は滿洲及朝鮮にして、滿洲朝鮮北部の山林には今なほ自生す。自生品は山蔘と稱し藥効特に著しとて其價格頗ぶる高し。我國に傳來せしは德川家光の時、種子を朝鮮に仰ぎ日光に試植せしを嚆矢とす。人參の根は僅に淡黃色を帶べる白色にして稍紡錘形を呈し中部より分岐すること多し、莖は根の先端より生じ、四五年生にては一尺內外に達す。莖の先端より三乃至五の葉を輪生す稍長き葉柄に五枚の小葉片を着生す。花は莖の先端より直生せる花軸の上に叢生し、繖形花序をなす。花は六月頃開き、果實は七月下旬より八月初旬にかけて熟す。百科による。

【アダリン】催眠劑、劇藥に準ず。白色の錠劑、或は粉末。

【中型】チュウガタ。染模樣の名。大形及小形に對して、その中間の形のもの。廣辭。

【尻目】原文「目尻」となつてゐる。

【そつぼ】そつぼう(外方)ほかの方。よそ。廣辭

【搔卷】カイマキ。うす綿にせる夜着。どてら。

【水羊羹】普通の羊羹より所天が多いため舌さわりが軟かい。夏季小型に切つたものが店頭にならぶ。

【口中】クチヂウ。と原文振假名あり。

【唾】ツバキ。と原文振假名あり。

【地袋】ジブクロ。床脇に設けたる違棚の下にある小さな袋戶棚。ふくろとだな。廣辭。

【閉てきり】タてきり(原文)

【瑠璃】(一)梵語 Vaiḍurya 七寶の一、紺色なるもの。(二)(鑛)美しき青色を呈し黃金色なる微點の散在せる鑛物、裝飾として使用せらる。廣辭。

【黒白】　アイロ。文色。すぢ。けぢめ。あや　――　【海水】　シホ（原文振假名）

め。廣辭。　【眼瞼】　マブタ。（原文振假名）

備考

伊豫簾は一つの短篇であるが此文章を味はふ上に參考となり又まとまつた一篇としての文學的價値をうかがふに足る一助にもと以下原文との對照を省記する。

「暑さで夜がよく眠られなかつた。――と云ふより、毎夜安眠できないために、今年の暑氣が特別身にこたへたのかも知れない。それには、地震の可怕さに、屋根の瓦をおろして、亞鉛（トタン）に葺き變へさせたせいで、夜半すぎても、疊のほてりが去らず寢返りの序などに、布團から足を踏み落してみても、却つて氣持が惡いくらゐだつた。三十過ぎての獨身生活で人から羨ましがられる樣な氣樂な境涯だつたけれど、眠りを奪はれたとなると、胸に來るものは矢つ張り寂しさや不滿足ばかりで時にはヒステリー――とはこんなものかと、我ながら淺猿しくなるまでに苛ついたりした」。

の後が直本文初めに續くのである。以下後段ともみるべき部分の梗概を記す。

……何時間かの假睡の後姪に起こされる。先程の水羊羹が來たのである。小綺麗な菓子器に盛られた、その御待兼ねのものと何時にない氣のきいた取扱ひ樣がつい以上の機嫌よさで楊子を取上げて一口入れたが直吐き出して仕舞ふ。冷つこいとばかり思つてゐたのが生ぬるかつたのである。節子は氣が利かないと云ふより冷しておくといふ事を知らない。こんな人を相手に叔母はカツとなりかけたが、おど〳〵してゐる姪をみると其以上がみ〳〵云ふ事も出來ない。それでゐて一時にしろあれ程待ちこがれてゐた事がみすみす目の前まで來て覆された腹立ちや、差當つて誰にも持つて行きやうのない、又持つていつたつて半分も此方の心持なんか通じないのだと思ふと、只無暗矢鱈に口惜しく、情けなく、つゝけんどんに「捨てゝしまつて」と姪を立去らせた後、聲をたてたいばかりにひた泣きに泣き續けた。

鑑賞

爛熟し切つた巧みな文章、殊に會話に於ける名調は、とつくに文壇でも折紙つきのものである。細かい心理の動きを描寫しつゝ、ぐい〳〵と讀者に迫つてゆく現實感、其を渾然とおゝつてゐる詩情、それ等を思ふまゝに扱つてゆく豐かな才識、此處に作者の獨自的な存在がある。といへばなんの苦もなく出來る文章の樣だが非常にこつたもので、本文にしても一見スラツと書流した樣に思はれるが、個々の感情なり場面なりを寫すにも、より適切な言葉や言句を用ひる爲には、可成りな苦心と贅澤な選擇がしてある事を見逃し難い。

時には此才筆が禍して「うますぎる」と云ふ樣な評を與へる人もあるが「まづすぎる」よりいゝ事は云ふまでもない。が、うつかり下手に眞似ると氣障なひとりよがりに陷り易い。

挿　繪

「伊豫すだれ」（九三頁）第二回帝國美術院展覽會出品畫「夏」伊藤小坡筆。

伊藤小坡は京都の閨秀日本畫家、四條派の大家谷口秀嶠の門に學び文展へは第九回に「製作の前」を出して三等賞を得、第十回に「つづきもの」を出して大に名聲を揚げた。（明治大正文藝美術人名辭書）

私に觸れて來る心を物を正しく觀、はつきり感じ、遂にその眞髓にまで突き入り解らうと思ふ。私は一生を「解る」ことに捧げ盡してゐる者だ。從て小說を書く動機もそれで、解りたい爲に書き、解りつゝあると思へるから書き、解り終せたと信じられゝばこそ筆を執ることになるのだ。

昭和二年初夏　里見弴

一五　無數の寶石

作　者

【吉田絃二郎】　ヨシダゲンジラウ。文學者。本名源次郎、明治十九年十一月佐賀に生れた。同四十四年早稻田大學英文科卒業、後同校講師となり、傍ら評論感想や創作に筆を執つてゐる。其の創作としての處女作は「磯ごよみ」、出世作は「島の秋」で、現在文壇の中堅作家の一人である。短篇小說集には「砂に描く」「光落日」「ダビデと子たち」「生の悲劇」「芭蕉」「大地の涯」、長篇小說集には「人間苦」「無限」「白路」、感想文集に「生命の微光」「小鳥の來る日」「草光る」「木に凭りて」などがある。

出　所

【雜草の中】　一冊、氏の隨筆集。大正十一年七月、聚英閣發行。定價金壹圓四拾錢。武藏野の中から・淺春・小鳥の巢・流れ行く影等十八篇を收む、本課は「小鳥の巢」より採る。

要旨

太陽に輝く一つ一つの露が作り出す色彩の美しさは、如何なる寶石の輝きも及ばない。しかもこの寶石ばかりは何人も持得る。否その寶石ばかりではない、かの星も、月も、太陽も、微風も、自然は皆私達が持得る。私達のものであると、自然の輝き自然の寶石を描き、自然美に對する注意を喚起せしめた文章である。之によつて自然美を味はひ、自然に對する態度、自然の觀方等を敎養し度い。

段落

一、雨が晴れた後や……すべての寶石と色彩を惠まれてゐる。（一〇三頁三行まで）

1、日光の映じた露の色彩はどのやうな寶石の輝きも及ばないほど美しいものである。

2、何をも持たない私ではあるがこの寶石と色彩とには惠まれてゐる。

二、若い女たちよ……露があるかぎりは無數の寶石が輝く。（一〇三頁一〇行まで）

1、試みに朝の庭に出て、朝の露をふんで見よ、足下にはころ〳〵この寶石がころがつてゐる。

2、そしてその寶石は太陽と大地のあるかぎりは輝くのだ。

三、あれはみんなお前のものだ……終りまで。

この寶石は何人も持得る。ただこればかりではない、あの星も月も太陽も微風も自然は皆自分達のものだ。

解釋

【寶石】　ハウセキ。Precious stone　鑛物、世人の珍重する堅硬且美麗にして產出の少き鑛物、琢磨して裝飾用とするもの、金剛石・鋼玉石・「ルビー」・柘榴石・蛋白石・橄欖石等これなり。廣辭

【何物をも持たぬ】　何の財寶をも持つてをらぬ。

【素足】　スアシ。（一）足に履物をつけずして歩行すること。はだし。（徒跣）。（二）足に足袋をつけざること。廣辭　こゝは（一）

【刹那だけだつて】　瞬間だけ光るのだつて？「刹那」セツナ。佛語、極めて短少なる時間。一彈指の間。瞬間。劫の對。廣辭。

【微風】　ビフウ。そよふく風　すこしの風。廣辭

鑑賞

我等は自然の美にはあまりになれすぎてゐる。かうして詩人に敎へられて始めてそれに注意する。そして多くの美や深い意味を發見し今更の如く爽かな快潤な心持になる。かう書かれると、自ら自然美にも目をとめて、自然の恩惠を感謝する若人も出で、月や星や微風を賞味する心も湧き、素足のま

〻庭に野に立出でて朝露をふんでみる氣にもなるであらう。全く一篇の詩とも見られる美しい文章である。

末尾の、『あれは…あれは…あれは…星を…月を…太陽を…微風を…』は反覆的修飾である。一度いふだけでなく再びも三度も繰返してその情を傳へんとしてゐる。みんなのものだといふ心は一言で盡きぬ故「お前のものだ」乞食のものだ。王様のものだ」。と、王様と乞食をあげて强調し繰り返したのである。かう反覆すると大いに文の趣致勢力を添へる。又一〇二頁「一つ〳〵の露から生れて來る。その一つ一つの露が…」といつた所も反覆修飾でその語調に强きを加へて反覆その事がまた大いに調を整へてゐる。この他本課には種々修辭的に苦心した作者の用意が諸所に伺はれる。これ等も特に注意し指摘する必要があらう。

一六　熱帶の海

作者

【島崎藤村】シマザキ　トウソン。名は春樹。藤村はその號である。明治五年二月十七日、長野縣西筑摩郡木曾馬籠（神坂村）に生れた。少年の時東京に出で、明治學院に學び二十四年卒業した。二十七年二十三歳で當時の文藝雜誌「文學界」の創刊に與りその同人となつた。また二十六歳で最初の詩集「若菜集」を、次いで夏草、落梅集等を出して日本新詩壇の先驅をなした。明治女學校、東北學院、小諸義塾等に教鞭を執り子弟の教育事業に携つた事もあつたが、自然主義勃興當時、氏が三十歳の時初めて小說に筆を染め、三十八年、三十四歳の時苦心の長篇「破戒」を公にして其の創作的天才を認められ、一躍して文壇最高の列に入つた。日露戰爭當時田山花袋・國木田獨歩・島村抱月・正宗白鳥等と共に自然派文學の覇を唱へ、四十年「春」續いて「家」を出して名聲益々あがつた。大正二年の末フランスに渡り、偶世界大戰に際會し、時には巴里の客舍に潛み、或はボルドーの僻陬に難を避け

て頗る苦楚を嘗め、戰亂尚止まざる大正五年の秋歸朝した。歸朝後の有名な作に「新生」がある。「佛蘭西便り」「海へ」「巴里便り」「エトランゼエ」等も外遊に因んだ著である。この他に「櫻の實の熟する頃」「犧牲」「食後」「綠葉集」「千曲川のスケッチ」「新片町より」「平和の巴里」「水彩畫家」「愛の歌」等の數多の作があり、「藤村詩集」には若菜集・一葉舟・夏草・落梅集などの曾て單行せられたものが收めてある。童話集には「幼きものに」「ふるさと」「をさなものがたり」等があり、藤村バンフレッドとしては「ある女の生涯」「伸び支度」などがある。大正十一年舊知門人等の盡力により、「藤村全集」十二卷が出版せられた。其の後の創作は嵐（大正十五年、新潮社發行）に收められてゐる。

次に氏の作に對する評の二三をあげる。

高須芳次郎氏の說に曰く、「小說家としての藤村を最もよく知つたのは中澤臨川であらう。臨川は藤村を評して、日本のツルゲネフだとした。それは詩人たると同時にリアリストたる事、平明に人生を實寫して眞を掴むと共に、その一部を感情で補つて行く事などがツルゲネフと共通してゐるからである。藤村は想よりも文に長じた人であるのを、彼自らも知つて、徹底的に人生の研究乃至從軍記者として押通さうとした。そして或程度までその目的を達した。彼が「藝術家となる前に人たれ」と云ひ「すぐれた文學は、生その儘に物を見得るといふ時に產れたものであることを忘れてはならぬ」と云つたのは、その邊の用意に疎かでなかつたことを明かにしてゐる。……　……要するに藤村は、優れた技巧家で、印象派的自然主義の代表者である。」（日本現代文學十二講）

又三木露風氏は次のやうに評してゐる。

「島崎さんは詩壇の先輩である。大きな先輩として私は敬意を持つてゐる。氏の詩集を愛讀したのは少年時代の事で、諳誦して忘れずにゐる詩がいくつもある。」といひ、藤村氏自身が詩から散文に移つたときの心持を省みて「やはり自分は別の事を始めたのではない」といはれたに對して、三木氏は更に次のやうに說いてゐる。

「詩と散文とは別のものであつても、その心持に於ては一筋の道である。形の上では變つても別のものではない。これが島崎さんだから云へる。氏は自己の情感の眞の內容を持つた物の外は何も書かないことに決意してゐられるやうに見える作家である。小說や詩は固より、隨筆や斷片のやうなものにしても、氏の書かれたもので、氏の符牒を帶びてをらぬものはない。心の責任を持つてをらぬものは生活しないものを書かれないから、むだがないのはたゞむだがないのではない。心ではやはり一筋の道である。詩も散文もないのである。それゆゑ、その點で島崎さんの步かれた路

ほんたうの人らしい、ほんたうの藝術家らしい、どちらにも云へる。

島崎さんの人格は、詩の時代に於てはまだ築きあげられてをらなかつた。小說を以て文壇に立たれてからこちらへの氏が大きいのである事はきまつてゐる。その時期からこちらへの氏の內面生活こそいと勞苦多く、いと惱み深く、いと重きものであつたであらう。眞の島崎さんを見得るのは、その孤獨の障壁の裡に於てである。」（詩歌の道）

出　所

【海へ】　大正七年七月東京實業之日本社發行、定價金壹圓三拾錢、氏の洋行感想記である。

要　旨

作者が佛蘭西へ旅行の途、印度洋、アラビヤ海を航した際の記である。外人ばかりの船中でふと一同胞に會うて國言葉で話し會つた時のうれしさや、洋上遙かに一日本船を見た時のうれしさ等、次第に故國を遠ざかる者の淋しい心持なども描いてあるが、特に、熱帶の海や空の大觀を奔放に深刻に描いてある。その觀照に、その筆致に、さすがに詩人たるを想はしめる。十分に鑑賞せしめ度い。

段　落

一、船は印度の南端を過ぎた……既に二十二日であつた。（一〇七頁九行まで）

印度南端航海中のこと。

1、時々驟雨があつた。雨後は殊に蒸暑い。行手には熱を帶びた白雲が起つて其處にあるものは永遠の眞夏かと疑つた。

2、波間に見えた一艘は、日本の船で、その形には見覺えがあつた。

3、我が乘船エルネストシモンは見る間に其の船に追附いた。遠い故國を一つの船にして見せてくれるやうなその形が綿卷物のやうに私の眼前にあつた。

4、エルネストシモンは間もなく其の船を追越した。海は乂沙漠のやうな空虛に還つた。コロンボもはや後になつた時何となく心寂しくなつて來た。

二、船はアラビヤの海へ……全く私も思ひがけないことであつた。（一〇九頁三行まで）

アラビヤ海航海中のこと。

1、船はアラビヤ海へ入つた。油を流したやうな海、滑かな美しい海、靜けさの漂ふ海、波間に群飛ぶ銀色の飛魚、夕日に映える火の海、それ等を見て行つた。

2、夕風の樂しい時、甲板でいろ〳〵の涼み話をしたり聞いたりした。その時珍しくも私に話しかける同胞があつた。久し振りに國言葉で話し全くうれしかつた。

三、明けても暮れても……終りまで。

海洋美の讃嘆。

私は毎日々々海を眺めて行つた。風の日は白波の碎けるのが涼しく見える海を、日光の烈しい日は青い反射がまぶしく眼を射る海を。時には人を避けて甲板上へ海を見に行つた。そしてその美しいさま〴〵の姿を見てはいろ〳〵な思に耽つた。じつと見てゐると自分の身體までも海の中へ吸はれて行くやうな感じがした。

陸上ではうかゞひ得ぬ海の懷を眼前に近く見ながら、大船に乘つた心安さに、安心して見つゝ行つた。海の姿は靜かに見てゐると實に無限の趣がある。

解釋

【熱帶】　南北回歸線間の稱。地球上の溫度最も高き部分にして、一年間に太陽を頭上に見ること二回あり、晝夜長短の差なく、四季の變化も殆どこれを感ぜず。廣辭。

【驟雨】　シウウ。にはかあめ。ゆふだち。

【甲板】　カンパン。「カンバン」ではない。(字の唐音)、巨大なる船舶の上部の廣く平かにして、木板若しくは鐵板などを一面に張りつめた所。デツキ。廣辭。

【合奏】　ガツソウ。種々の樂器を合はせて、音樂を奏すること　廣辭。

【欄】　オバシマ。又、ラン。(一)てすり。欄杆・欄干。(二)わく。(三)しきり。廣辭。こゝは(一)。「おばしま」は古語であるが調子の上からこゝはおばしまの方がよいやうに思ふ。

【檣】　マスト(Mast)ほばしら。

【煙筒】　エントウ。(一)けむりだし。(二)キセル。廣辭。こゝは(一)で煙突のこと。煙・烟同字。大國には烟筒の字を揭げてある。

【艫】　トモ。供の義。船の後邊。支那諸字書に舳艫首尾の解、相反するもの多し。和名抄に、艫を度毛と訓じ、舳を閇と訓ず。新撰字鏡に艫を戸と訓じ、舳を止毛と訓ず。靈異記訓釋も、舳をともとせり。今、和名抄に據る。

宣海。說文「舳艫也一曰船頭。」正韻「船頭刺擢處、一說船尾。」玉篇「在船後。」小爾雅「船頭謂之舳、尾謂之艫。」康熙

【マルセーユ】　Marseilles. 漢字で馬耳塞と當てる。佛國第二の都會。地中海に於ける同國唯一の門口。東西に往來する旅客は、大概ここに寄港上陸する。

【貨物】　クワブツ、クワモツ。(一)財貨に同じ。(二)有形の財貨。しな物。しろもの。(三)荷物。大國。こゝは(三)。「荷物」は(一)輸送する貨物、(二)負擔となるもの。大國。こゝは勿論(一)。

【宛も】　ヲタカも。大字。「あだかも」ではない。

【繪卷物】　エマキモノ。繪に詞を書き入れて卷物としたもの。言海　ゑまき

【沙漠】　サバク。荒漠不毛の廣野。雨量の缺乏その成因をなし、植物全く生育せずして雜草蘚苔等の地表を蔽ふものなく、地殼を構成せる岩石は地表に露出し、風化作用を受くること甚しく、ために廣漠不毛の原野を現出す。其所在地は、赤道直下の無風帶地にあらずして、それより稍高緯度の地にあり。廣辭

【同胞】　ドウハウ。(一)同じはらから。兄弟姉妹。(二)同一の國民。大國

【空虛】　クウキヨ。(一)空しく何物も存せざること。(二)乏しきこと、竭きたること。(三)防禦なきこと。廣辭。こゝは(一)。

【シンガポール】　馬來半島の海峽植民地にある港市。英領太平洋から印度洋に入る咽喉。東西航海の船は殆どすべてこゝに寄港する。

【コロンボ】　印度セイロン島にある港。東西兩洋往來の要衝。日本郵船の寄港地。

【アラビヤ】　亞剌比亞。亞細亞洲西南の大半島。內地は高原で沙漠。沿岸は肥沃。氣候炎熱甚しく雨少し。「アラビヤ」の海はその南方の海で印度洋の一部。

【どろり】　泥の如くなりたるさま。

【飛魚】　トビウヲ。「文鰩魚」ともかく。喉鰾類の魚、體は圓筒狀をなし、頭部稍方形をなす。口小さく齒短く鱗は粗大なり。背鰭は甚だ小形なれど胸鰭は頗る長大にして恰も翼の

如く、よく水を離れて空氣中を飛行す。背部は蒼黑色にして腹部は白色なり。體長一尺許に達す。我國東南海に多し。廣辭

【まぶし】　「まぼし」の轉。まばゆし。廣辭

【舷】　フナバタ。ふねの緣。ふなべり。船端。廣辭

【痕跡】　コンセキ。あと。あとかた。廣辭

【先蹤】　センショウ。先例。前人の事跡。廣辭

【標柱】　ヘウチユウ。しるしのはしら。

【大船の心安さ】　大船は動搖も少く、危難も少いから心丈夫である。諺にも、安心の喩に「大船に乘つたやう」など云ふ。

【岸から窺ふことの出來ぬ】　船に乘つてみないと陸岸からは想像する事も出來ない。

【海の懷】　ウミのフトコロ。海のまん中。

【まのあたり】　眼前。「ま」は「め」の轉。廣辭

【卷きつゝある】　云々。「大海の眞直中、今眼前にうち見る。」といふ語を以下すべてにつけて解する。「卷き」は、くる〳〵と圓く渦輪を卷く。「開き」は卷いた渦がはなれひろがる。「起り」は、又はじまり生ずる。「釀す」は又、新にこしらへだす。「陷沒(オチイ)り」は、おちこむ、深く凹みこむ。

【水平線】　スヰヘイセン。(一)靜止せる水の平面に平行する直線。(二)普通の範圍。廣辭。こゝは(一)。

【板の間】　甲板。

鑑賞

さすがにもと詩人であつただけに、その描寫に、その觀照に、頗る詩味豊かなものがある。詩の方で洗練された筆はやはり違つたものだといふことが、この文を讀んで先づ感ぜられる。殊に後半、海の懐を眼のあたり見ながら其の大觀を描いたあたりは、眞に一篇無韻の詩といひたい。その他、だんだん故國を遠ざかる心持や、繪卷物のやうなといふ洋上で相會うた船のさまや、何一つ眼に入るものもない沙漠のやうな空虚な大海、アラビヤ海の凄いきびの惡いやうな海のさま、夕日に映える美しい火の海、甲板上の涼み話、同胞との國言葉での話、明けても暮れても眺めて行く海、光と熱と波の交錯せる洋上の凄艶、それ等がロマンチックな抒情的の雅醇の筆で如實ににじみ出てゐる。熱帶の海や空を眺めながら、つれ〴〵の幾日を船中に起居して洋行する人々を唯幻に描くにすぎない吾等にとつては實にうれしい文である。

種々な戀を歌つた「戀ぐさ」、六人の女性を詠み分けた「海ごほり」を出し、やがて生存の惨ましい姿を描いた「鷄」を公にし、純情の歌より人間の努力を詠じた「農夫」及び「勞働雜詠」に至つた藤村の成長、……を見るとき抒情詩から小説に赴いたことは精神の成長に基づく必然であつたことが感ぜられる。彼等の創作は常に告白的であつて、個性のうちから生れたといふ印象を與へる。

――土居光知、文學序說――

一七　蜀山人の盆燈籠

作者

【饗庭篁村】アヘバクワウソン。明治の文學者・劇評家。名は與三郎．篁村はその號で、また竹の屋主人とも號した。安政三年(一八五六)江戸下谷に生れ、當時の寺小屋教育を受けた。江戸時代の俗文學特に戲曲に精通し、明治四十四年には文藝院委員となり、また永く東京朝日新聞の記者として劇評界に重きをなしたが、大正十二年病歿した。年六十八。著に「むら竹」「竹影集」「巢林子撰註」「馬琴日記抄」「雀をどり」「掘り出し物」「狼狽」「勝鬨」「篁村叢書」等がある。

岩城氏の明治文學史に、篁村氏に就いて下の如く記されてゐる。

篁村は江戸の人、夙に「讀賣」に入り、後「東京朝日」に入り、小說隨筆及び劇評に筆を執る。其の小說の作、多くは短篇にして江島屋風の戲作に近し。其の「讀賣」「新小說」等に載せたりし者、二十二年「むら竹」と題する合卷の叢書として出版し、同年尙「新著百種」に「掘出し物」を出し、「國民

の友」に「良夜」を出し、單行本として「當世商人氣質」を公にし、翌年「新作十二番」に「勝閧」をものし、其の他雜誌・叢書に載する者少からず。當年の批評家、筆路の輕妙を賞し、描寫の洒脫を讃し、觀察の奇警を美し、紅葉・美妙以外、明治文壇に一旗幟を樹つる者と稱へ、遂には篁村宗の目を生ずるに至れり。蓋し、篁村は世人が馬琴・春水の外小說家あるを知らず。鯉丈・魯文の外戲作者あるを知らざりし明治十年代の文壇に現はれ、八文字屋・江島屋の戲作を涉獵して深く元祿の昔を味はひたる才筆を以て「讀賣」を江湖に重からしめ、新泉居士・太阿居士の名をして斯壇の異彩たらしめし者なり。當時未だ元祿文學の何なるを解せざりし世人は、漫然此の異裝の文章を歡迎したりしが、幾くもなくして文壇元祿を呼ぶ聲漸く起り、美妙・紅葉・露伴の徒、復興の氣運を鼓吹するに方り、曩に其の眞趣を闡明せられざりし篁村の文章、茲に其の由る所を明らかにせられて益〻其の聲價を增し、遂に盛名を一時に馳するに至れり。然り、篁村の價値は是のみ。江島屋・八文字屋一流の諷刺文を模倣せりといふに止まる。之を稱揚すべくんば模倣の筆の巧妙を稱せんのみ。明治の文壇を飾る作物たるに至つては與り知らざるなり。

出　所

【雀躍】　スズメヲドリ。明治四十二年四月、東京市麴町區飯田町五丁目精華書院發行。定價金壹圓五拾錢。

內容、雜誌「國民の友」「早稻田文學」及び東京朝日新聞に記載した氏の隨筆・感想・評論・小說等を集錄したもの、兼好の壁書、式亭三馬の日記、芝居役者の藝評、近松門左衞門と竹田出雲、八文字屋自笑消滅せんとす、諧謔一班、俳諧論、八犬傳諸評答集、上田秋成、古代淨瑠璃、世話物の由來、妹脊山婦女庭訓につきて、種彥の國姓爺、近松の三傑作につきて、能樂猿樂田樂考等四十一篇（本課はその第四篇目にある）と、大立引、領下の珠、排悶、早起の四篇の小說から成つてゐる。

要　旨

蜀山人の逸話を描いたもので、その恬澹なる面目はこれによつて十分うかゞはれる。以て彼が當時の人々から如何に珍重されたかを、又その洒落飄逸に投じたる靜平和樂なりし時代嗜好の一斑を知らしめんとするにある。

段　落

一、天明より……今左にその一つを起さん。（一一三頁四行まで）

蜀山人に逸話の多いこと。

二、文化元年の頃とか……この分にては水も呑まれ申さずとかこちけり。（一一四頁八行まで）

南畝翁方へ平素出入りの庄助といふもの、草市へ行燈燈籠を賣りに行つたが買ひ手が少かつたのでがつかりしてかへり、翁方へ立ちよつてなげく。

三、南畝翁は……女の智慧の欲が先なり。（一一八頁四行まで）

翁が同情してその燈籠を張替させ、それに例の草書で狂歌發句をなぐり書きして與へた。庄助はそれを荷うて立ち出でた所が、家へかへるまでにもう二十許も賣れてしまつた。

四、翌朝夫婦は……五つ半にもならぬに賣切れたり。（一一九頁三行まで）

翌朝早く起きて、夫婦して神樂坂の市へ持ち行くと、並べる間もなく珍し〳〵とて五つ半にもならぬうちに賣れてしまつた。

五、錢二十貫ほど……終まで。

庄助夫婦のよろこび。

解　釋

【蜀山人】　太田南畝。江戸時代に出た狂歌師。名は覃。四方赤良、四方山人、寢惚先生等の號がある。蜀とは四方の草書の誤讀から起つた號といふ。幕府の士で幼より學を好み、文章を善くし、性磊落機智に富み、滑稽詼諧、生涯放浪自恣の言を以て一世を愚弄した。その狂歌狂文は一種獨特の觀がある。文政六年年七十五で歿した。南畝帖（蜀山百首ともいふ）を初として千柴萬紅、萬紅千柴、寢惚先生文集、浮世繪類考、假名世說、明詩擢材等の著がある。

當時の狂歌師としては、蜀山の他唐衣橘洲・朱樂管江・平秩東作・元杢網・宿屋飯盛、（石川雅望の狂名）鹿都部眞顏が有名であつた。

【天明より文化文政】　德川時代の文學の隆盛期に二ある。一は元祿で、一は文化・文政の時代である。元祿は概して上方文學の時代といふことが出來、芭蕉や近松門左衞門、井原西鶴の出た時代で、江戸の文學といふものは未だ萌芽にすぎなかつた。ところが太平と江戸の町人の富とは、遂にその生活についた文化・文政の文學期をつくつた。洒落本や人情本、讀本、狂歌・川柳の横行した時代である。そして山東京傳が出で瀧澤馬琴が出で、三馬・一九の輩が出で蜀山人や柄井川柳の徒が出た。これを細說すると、

天明――光格天皇の御代。將軍家治、家齊の時代。

文化――光格天皇の御代。將軍家齊の時代。

文政――仁孝天皇の御代。同

文化文政期は合はせて二十五年ばかり。

【文壇の牛耳をとり】　文壇は文學者の仲間文學者の社會。それの盟主となる。昔支那で

諸侯の會盟に、牛の耳を割いて血を取り、これを啜ることあり、その時、卑者之を執り、尊者これに泣み、盟者を次するを禮とせしよし、左傳定公八年の條の杜預の註及び疏に據れば、牛耳を執るは卑者のことなり。しかし、哀公十七年の同註に『執牛耳尸盟』鄭玄註にも『主盟者割牛耳取血、耳盛以珠盤主盟者執之』と見え又禮記の注疏にも『主盟者執牛耳』とあり。牛耳を用ふる所以は、埤雅に『牛耳無竅、盟者聽神、故取牛耳以不聰正爲戒』と見ゆ。交友・會員・黨派などの領袖となる。盟主となる。言泉。

故に文學者の仲間の第一の人となつて、他を左右すること。これは山東京傳の如きも、蜀山人の評によつて世に知られた一事によつてもわかる。

【事蹟】　事迹とも書く。事のあとかた。事がらの痕迹。大國。「事績」事のいさを。成した る事柄。大國。

【陸尺町】　ロクシヤク町。因に「陸尺」は六尺とも書き、諸侯士人の駕籠をかく人足。

【日傭】　ヒヨウ。又、ヒヤトヒ。一日を限りに雇はるゝこと。大國。

【かつぎ商ひ】　行商物をかつぎ行つて商ひする人。

【世を渡る】　渡世をなす。大國。「渡世」は、世わたり、すぎはひ、なりはひ、くらし、世業。大國。

【壽經寺】　ジユキヤウジ。淨土宗の寺。東京小石川區表町に在り。關東十八檀林の一。委しくは無量山壽經寺傳通院（デンヅウヰン）。本尊は慧心僧都作阿彌陀如來。應永二十二年了譽の開基。慶長七年德川家康の母傳通院の遺骸を此の寺に葬り、改めて傳通院と稱す。明治四十一年十一月燒失す。（無我山房、佛教辭典）。

【草市】　クサイチ。七月十二日の夜より十三日の朝にわたりて、盂蘭盆の聖靈祭に用ふる品々を賣る市。「ぼんいち」（盆市）ともいふ。其の品は蓮華燈籠・角燈籠・眞菰・猿垣・麻殼・蓮葉・鬼灯・素麪・茄子・鼠尾草・土器等にて、これらを草物といふ。日次紀事に據れば、古は太鼓・手拭・奇特頭巾・作鬚・金銀箔の紋附等盆踊の具をも賣りしなり。百科

【行燈燈籠】　アンドンドウロウ。この語は言泉・大國・類語・百科等にも見えてゐない普通の行燈の、紙張の部分だけを、その上方を稍廣くし、薄い板を折り曲げて屋根とした粗末な盆燈籠を言つたのである。少し手數のかゝつたのは、所謂切手燈籠である。「行燈」アンドン。字の宋音。アンドウとも讀む。燈火をとぼして据ゑおく具。廣辭

【情なき顏】　ナサケなきカホ。悲しげな顏。「情なし」は、（一）なさけごころ無し。つれなし。情愛なし。無情なり。無慈悲なり。（二）無慈悲なる目にあひ、又は禍にあひなどして悲し。つらし。撰集抄「山のために寺燒かれ

はべりしかば、なさけなく、あぢきなくて」(三)風流心まし。さとびたり。無骨なり。[言海]。こゝは(二)。

【臺所】　ダイドコロ。煮たき其の他、食物の調理に使用する室。くりや。だいどこ。かつて。廚房。炊事場。庖厨。臺盤所。[大國]。

【偖々】「偖」は、音シヤ。本義は、ひらく。特訓さて。扨に同じ。

「扨」は、(一)音サ・セ。挾み取る、さす。捕魚の具やす。(二)サイ・セ。うつ。(三)タイ・テ。拳を以て物に加ふ。うつ。我が國にてはサテと訓じ上の意を受けて下に移る時又は更に局面をかへて說く時に用ふる語、而シテ・ソシテの義にいふ。之に扨の字を充つるは扨が又手(コマタ)の二字の合字にて、且サテといひ手を又き首を傾け考ふる風をも意味するならん。[大字]。

【過す】　スゴす。又、スグす。[廣辭]。但し[大國]。「すぐす」の條に引いてある用例は古い。

【神樂坂】　カグラザカ。東京牛込區。牛込門に向へる坂路にて、昔穴八幡祭禮の時此所にて神樂を奏せしより出でし名といふ。大路東西に通ず。俗に神樂坂通と呼び高田に至る。區內最繁華の地なり。(太田氏帝國地名辭典)

【水も呑まれ申さず】　生活が出來ぬをいふ所有の田地とてもなき貧しい農夫を水呑百姓といふよりいふ。[大國]「水飲百姓」の下に下の引例がある。農隙餘談「水飲百姓は田畑を持たず、下作計り作り、或ひは雇ひを拵ぎ、海邊には網の手を引き、山中にては木を伐り、其の村里々々の水を呑むをいふなり。」

【かこつ】　託つ。假言(カゴト)をはたらかせたる語か。(一)かこつくに同じ。言(コトバ)にてかづく。事寄す。その所爲とす。いひたてにす。(二)轉じて、佗言(カレゴト)いふ。歎きいふ。[言海]。

「託言」は、カコツケゴト、又、カゴトと訓み、(一)かこつけていふ言。(二)いひわけ、口實、(三)うらみごと、愚痴。[廣辭]。

【斯樣々々】　カヤウ〳〵。しかじか。此の如く。このやう。

【ぐづ男】　愚圖な男。「愚圖」は遲鈍にして不決斷なること。不活潑にして姑息なること。又、其の性質の人。[大國]。

【題の下が乾く】　アゴのシタがカワく。あごが乾上(ヒアガ)るともいふ。生活の道を失ふ。あごは腭・顎・頤とも書く。[言海]。あごの下とは口のこと。題の下が乾くとは、物が食べられぬこと。

【白紙】　ハクシ。(一)色白き紙。(二)支那渡來の紙。質甚だ薄くして色白きもの。(三)文字又は畫などを書かざる紙。しらかみ。(四)和歌の會などに、歌題と己れの官位・署名のみ認めて歌を書かざること。[大國]こゝは(三)。なほ[大國]「しらかみ」の條には、「(一)色の白き紙。(二)物を書かぬ紙。はくし。」とある。

【五帖】　ゴデフ。「帖」(一)紙又は海苔などの

一定の枚數を一纏めとして數ふる語。半紙は二十枚、美濃紙は四十八枚、塵紙は百枚、西洋紙は十二枚を一帖とする類。(二)幕を二はりづつ一纏めとして數ふる語。張。條。(三)屏風又は楯などを數ふるにいふ語。(四)樂の遍數にいふ語。大國。

【草書】　サウショ。書體の一。行書を更にくづし、點畫の最も略せられたもの。廣辭。例の草書とはいつも書いてゐる風の草書の意。

【狂歌】　和歌の一體。滑稽諧謔を主としたる短歌にして、德川中葉以後に最も流行を極めて江戸文學の粹をなしたるもの。生白堂行風の後撰夷曲集に、狂歌は日本記の夷曲なりとて夷歌（エビスウタ）・ひなぶり歌など稱へたれど、夷曲を

以て狂歌に充てんこと如何あらん。萬葉集に戯咲歌といひ、古今集に俳諧歌と見えたる、これを狂歌の起原と定むべきにや。和歌肝要に、「俳諧は狂歌なり、俳諧證歌に『にはとり、はいくらの稻をもつやらん、曉ごとにこけ〳〵といふ』とあり、されば狂歌は俳諧歌なり云々」と見ゆ。されど其の風調の如き頗る典雅にして、普通の狂歌と異なるところなく、名ある歌人の時に臨み興に乘じて戯れに詠み出づるに過ぎざりき。後鳥羽天皇の時、柿本・栗本といふを置かる。柿本は普通の歌にて、これを有心と名け、栗本　狂歌にてこれを無心といへり。又源平盛衰記・太平記等の書に落首といふもの見ゆ。其の用語の雅俗を選ばずして滑稽諧謔を主とし、又時事を諷刺するなど、其の體俳諧歌と同じからざれど、なほこれを狂歌體といふべし。後世天正の頃より、狂歌を弄ぶ者漸く多く、題詠といふこと從つて生じ、專ら俚言俗語を用ひ、滑稽諧謔を主とし、其の風調甚だ卑しきものとなれり。德川時代に至り、建仁寺雄長老・豐藏坊信海夙に狂歌を詠み狂文を綴り、鯛屋貞柳・永崎一見坊等亦狂歌に名高かりき。其の後生白堂行風・半井卜養・石田未得等相踵いで出で、專ら狂歌を鼓吹せしかど、卜養・未得等の死後は、其の道殆ど廢絶せり。安永の頃、唐衣橘洲和歌の會にて戯題を出し狂歌を詠ぜしめしより、狂歌又世に流行し、遂に狂歌を業とするものを生ずるに至れり。天明は其の極盛期にして、橘洲・四方赤良・朱樂管江（アケラクワンカウ）・大屋裏住（ウラズミ）・元木阿彌（モトノモクアミ）・宿屋飯盛（メシモリ）・鹿都邊眞顏（シカツベマカホ）等輩出せり。左に狂歌の例を掲ぐ

罪ふかき名にはたてれど女郎花女人堂をもふみこえて咲く　橘洲

生醉の禮者をみれば大道をよこすぢかひに春は來にけり　赤良

ほとゝぎすみそかに鳴きて過ぐる夜はあとにのこれる月かげもなし　管江

歌よみは下手こそよけれ天地の動き出してはたまるものかは　飯盛

あらそはぬ風の柳の糸にこそ堪忍ぶくろぬふべかりけれ　眞顏

百科。

【發句】　ホック。(一)詩歌・俳諧にて初めの句、連歌にて卷頭にある十七字の句の稱。起句。(二)〔連歌の初句十七字より轉じて一體をなしたるよりいふ〕俳句に同じ。俳諧の句。略して俳諧ともいふ。但し「俳諧」は、(一)たはむれ、おどけ。(二)俳諧歌の略。(三)俳句。大國。

【なぐりつけて】なぐり書きに書きつけて。なげやりに書きつけて。

【頭を掻く】　アタマをカく、過ちをして恥ぢいる。失策して窮す。大國。こゝはなぐり書きにしたものを渡されたので、賣れる筈もないと閉口したさまを言つた。

【紅入り】　ベニイり。紅色を加へて、手數をかけてゐるのをいふ。

【冗書】　ムダガキ。徒書。無益なる書きすさびをすること。書きても役に立たざること。又、其の書きもの。大國。但し大國・新式・廣辭等、「むだがき」の條には徒書の字を示してゐる。而して廣辭・新式「むだ」の條には冗の字も掲げてある。

【反古帳】　ホゴバリ。反故で張ること。「反故」(一)又、ホウグ。ホゴ。ホウゴ。ホンゴ。文字など書きたる紙の用なくなれるもの。ほぐかみ。(二)用なきもの。不用。言海。この語、大國・言海・廣辭など反故の字だけ示してあるが、大字・字源・類語等には反古の字も掲げてある。

【二百疋】　「疋」は匹とも書く。疋ととは、古錢(圓形にして中央に方形の孔を穿てる貨幣)十文の稱。今二十五錢を百疋とす。百科。

【外商ひ】　ホカアキナひ。外の商賣。

【工面顔】　クメンガホ。才覺しようとする顔つき。「工面」(一)才覺算段。工夫。(二)金錢の工面の義より轉じて、身代。身上。大國

【偖はと悅び】　それぢや南畝先生の書いたものと知つて、買つてくれるのだと悟る意。

【傳】　ツテ。つたへの約。(一)ひとづて。ことづて。たより。(二)てづる。てがかり。えんびき　ついで。大國。こゝは(二)。

【心あても有りて拵へ候なれども云々】　誰々に賣らうと心あてがあつて拵へたのではあるが、こんなに澤山は入らぬ。

【幾許】　イクバク。イクラと讀んでもよいであらう。

【はたと】　(一)物の相あたりて發する音。又、遽かに發する聲にいふ語。(二)事のさし當るさまにいふ語。突然。徒然草、「具氏(中略)承らんと申されけるに、大納言入道はたとつまりて」(三)其の方をにらむさまにいふ語。はつたと。大國。

【行詰る】　ユキヅマる。(一)路きはまりて行くべき方なくなる。(二)勢きはまりて伸ぶべき餘地なくなる。(三)答辯に窮す。語ふさがる。廣辭。

【五十文】　「文」(一)孔のある錢を數ふるにい

ふ語。(二)足袋の底の長さを計るにいふ。普通、大人の足を十文とし、九文・八文などと數ふ。もと錢を並べてこれを數へたるより起る。廣辭。

【直】　ネ。ねだん。

【息を一杯に吹きて】　如何に高價にいはうかと、暫く息を凝らして、そして後、思ひ切つて言ひかける心持である。

【一貫二百文】　「貫」(一)錢の名目。古昔は一千文をいひ、後世は九百六十文をいふ。四時祭式上「錢一貫文」。字津保吹上下「ぜに十五貫」。(二)我が國の衡の基本たる名稱。度量衡の原器たる白金・いりぢうむ合金製の分銅の質量四分の十五。(三)鎌倉以後、武家の知行高の換算に用ひし單位。一貫文を田地二段或は三段又は五段とし、土地の遠近・時勢の變遷によりて一定せず。大國。

【いきり立つ】　「いきる」を一層つよめて言つたもの。いきりだす。いきまく。いきりだす。勢を得てゐばり出す。りきみだす。大國。

【寢惚様】　ネボケサマ。蜀山人は別號を寢惚先生と言つたことは既に注した。

【生佛】　イキボトケ〔生きて、現世にある佛の義〕德の甚だ高き僧の稱　大國。こゝは原義そのまゝの意で使つた。

【五十と百の損なり】　五十文、百文と損をする意。

【女の智恵の慾が先】　女は考淺く、末はるかの事は分らぬが、目先の慾には早いのをいふ。女の智慧は鼻の先」といふ諺がある。女の智慧の淺薄なるをいふ。大國。智恵は智慧に同じ。大字。恵は慧に通ず。大字。

【七つ起】　ナヽつオキ。午前四時頃から起きること。即ち早起するのを言つた。

昔時の時の區分は次の通りである。

一晝夜を十二分し、眞夜中を九つとし、それより八つ・七つ・六つ・五つ・四つと數へ、又、眞晝までを九つとし前と、同じく數へて眞夜中前に終る。此の法は日出・日沒を基として、明け六つ・暮れ六つと定むる故に、晝夜の伸縮によりて一時間に長短を生ず。又、之を十二支に配して、眞夜中を子とし、順次に數へて午に至れば眞晝となる　大國。

右を晝夜平分の時の現時の時刻に當てれば次の通り。

今制	舊制
午前十二時(零時・子夜(マヨナカ))	夜　九つ時　子の時
一時	(九つ半時)
二時	夜　八つ時　丑の時
三時	(八つ半時)
四時	曉　七つ時　寅の時
五時	(七つ半時)
六時	明　六つ時　卯の時
七時	(六つ半時)
八時	朝　五つ時　辰の時
九時	(五つ半時)

十時　晝　四つ時　巳の時（四つ半時）
十一時
午後十二時（零時、正午）晝　九つ時　午の時（九つ半時）
一時
二時　晝　八つ時　未の時（八つ半時）
三時
四時　夕　七つ時　申の時（七つ半時）
五時
六時　暮　六つ時　酉の時（六つ半時）
七時
八時　宵　五つ時　戌の時（五つ半時）
九時
十時　夜　四つ時　亥の時（四つ半時）
十一時

（言海に據る）。

【額に手を加へ】　こゝは、餘りに度に過ぎるので案じ顔のさまを言つたのである。

但し、大國の「額に手を當つ」の條には次の如く解してある。

甚だしく喜ぶ時、熱心に祈念をこむる時などの狀にいふ語。土佐日記「女・おきな、ひたひに手をあてて悅ぶこと二つなし」源氏玉葛「ひたひに手をあてて念じいりてをり」。

言海にも右と同樣に記してある。

【先見】　事のあらはれざる先に見ぬくこと。さきの見ゆること。後漢書揚彪「對曰、愧無二日磾先見之明一、猶懷二老牛舐犢之愛一」。大國。

【肩を怒らす】　肩を聳つ。威勢を示すさまにいふ。大國。こゝは大威張で賣るさまを言つた。

【金にして三兩】「金」は「錢」に對していふ。「兩」昔時の貨幣の名目。金貨にては一分の四倍、銀貨にては四匁三分の稱。大國。

【生神樣】　イキガミサマ。前の「生佛樣」の語に對する。「生神」生きたる神。あらはれてある神。靈驗のあらたかなる神。大國。

「神あしらひ」神樣あつかひ。「あしらひ」あしらふこと。あへしらひ。もてなし。大國。

【醉餘の戲よく枯骨に膏す】　酒に醉つたまぎれのわざが、死に瀕したものを生かすの意。「枯骨」枯れたる骨。朽ちはてたる骨。大國「枯骨に膏す」とは、枯骨に膏肉をつけて生かす意。

鑑賞批評

すでに蜀山人その人が面白い上に、この輕快洒脫な筆を以てして居るのだから、一讀とても愉快にならざるを得ない。草市から賣殘りの燈籠を一かつぎ荷うて、今し翁方に立寄つた庄助の體など目に見えるやうである。「この分にては水も呑まれ申さず」と泣言をいつて豪所に訴へた折、奥の間で一杯聞召の翁の耳に、早くもそれと知られ、「手にもつ盃を下に置いて」お出入りに心配するあたり、この翁、必ずしも磊落に似てあらずといふもの。實直な庄助ではあるが、愚さに「先生は寢惚樣だ」とし

て、折角書いてくれた狂歌燈籠を荷ひかへりながらも、賣れはすまいと半信半疑、「頭を掻きつゝ」有難迷惑のさまに「一禮を述べ」たり、さて「その燈籠は賣物か」と問はれ急に元氣づいて、高價に賣らうの下心さへ出で「心あてもありて拵へ候なれど」など勿體ぶるなど、貧してはつい慾もかく人情、何の時代も同じことである。

文の妙所をあげると、上記「　」内の語のほか、庄助の愚なるをいと面白くあらはしてある「先見明かなるその妻の如く」や、愚な夫を持つた出すぎ女の樣子の見える「亭主を掻きのけて女房まかり出で」。又「生佛樣なり」とあるに對し「今度は神あしらひにしつゝ」等何れも微笑措く能はざる書振りである。

この他「顆の下が乾きては誰も難儀ならん」「蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに」「工面顔にて足も軍く」「今度は息を一杯に吹きて」「女の智恵の慾が先」「二百文よりまかりませぬと肩を怒らし」など擧げて來ると限りがないが、よく深究含味させてほしい。實に愉快な文章である。

備考

【筆蹟】 郭公鳴きつるかたはみえねどもきいた證據は有明の月、蜀山人。但し「鳴」の字に「き」の送假名はついて居ない。歌意、郭公が鳴いた。どちらで鳴いたかはわからない、たしかに鳴いた。その證據はあの有明の月が出てゐるので、しかとわかる。これは後徳大寺左大臣の「ほとゝぎす鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ殘れる」の歌を楯にとつて、何でも有明の月が出て居れば、たしかにほとゝぎすの鳴いた證據になるのだと、變にすましたところに面白みがある。

希臘のある皮肉哲學者が富豪に愛ばれた事があつた。哲學者が富豪に思想を說きたがるやうに、富豪はまた哲學者に自分のすんでゐる世界を見せびらかしたいものなのだ。その富豪も皮肉哲學者に自家の邸宅を自慢したいばかりに、飾り立てた客間から、數奇を凝らした植込の隅々まで案内してみせた。

「如何でげせう、これでも先生方のお氣には召しますまいかな、私としてはかなり趣向も凝した積りなんでげすが……」かういつて、富豪はその大きな顏を哲學者の方へ捻ぢ向けた。哲學者はそれには何とも答へないで、いきなり痰唾を富豪の顏に吐きかけた。富豪はトマトのやうに眞紅になつて憤つた。「何をしなさるんだ。ひとの顏に唾をしかけるなんて、あまりぢやどわせんか」。皮肉な哲學者は落つき拂つたもので、「いやはや餘り結構づくめなお邸なんで、唾が吐きたくなつてもどこにも恰好な場所が見つからないもんですから、つい御顏を汚しましたやうな譯で……」と別にあやまらうともしなかつた。

——薄田泣菫・茶話——

一八　山の木と大鋸

作者

【志賀直哉】　シガナホヤ。明治十六年二月二十日、陸前國石卷町に生る。十八年(三歳)兩親と上京、二十二年(七歳)學習院初等科入學。二十八年(十三歳)學習院中等科に進む。三十六年(二十一歳)學習院高等科に進む。三十九年(二十四歳)東京帝國大學文科に入學。四十一年(二十六歳)大學中途退學。短篇「網走まで」を帝國大學に送り沒書される。四十三年(二十八歳)四月より同人雜誌「白樺」を始む。武者小路實篤・木下利玄・正親町公和・有島武郎・同壬生馬・里見弴・園池公致・兒島喜久雄・柳宗悅・萱野二十一(後に郡虎彦)その他田中雨村・日下諗等同人である。長與善郎の同人となつたのは一年程後である。大正元年(三十歳)秋、中國尾の道に住む。二年(三十一歳)正月單行本「留女」を出版す。三年(三十二歳)夏、山陰松江に住む。この頃より凡そ三年間殆ど創作せず。九月に入り京都に移り住む。此年の暮れ結婚す。四年(三十三歳)五月より九月まで上州赤城山に住む。秋より千葉縣

我孫子町に住む。五年(三十四歳)夏、長女慧子生れ、生後五十餘日にして死す。六年(三十五歳)新潮社より「大津順吉」を出版す。武者小路にすゝめられ、この頃から再び小說を發表するやうになる。夏、次女留女子生る。七年(三十六歳)正月新潮社より「夜の光」を出版す。八年(三十七歳)長男直康生れ、三十餘日、丹毒にて死す。九年(三十八歳)五月三女壽々子生る。十年(三十九歳)二月短篇集「荒絹」を春陽堂より出版。十一年(四十歳)正月四女萬龜子生る。「暗夜行路」前篇を新潮社より出版。十二年(四十一歳)三月我孫子より京都市粟田口に移り住む。秋、山科村に轉ず。十四年(四十三歳)四月奈良市幸町に移り住む。短篇集「雨蛙」を改造社より出版。五月二十六日次男直吉生る。昭和二年(四十五歳)五月短篇集「山科の記憶」を改造社より出版。(現代日本文學全集、志賀直哉集年譜)

志賀氏の作品としては前記の外に、「和解」「夜の光」「正義派」「剃刀」等多數ある。

志賀氏の藝術の特色

志賀氏の作品は丁度秋の深く澄んだ夜空にくつきりと輝く星のやうに、すつきりとした他から區別し得られる鮮明さと獨自性とを持つてゐる。どの頁にでも志賀氏の特色ある實印が押されてゐる。而かもその實印は形があるやうでゐて、實は形のない實印である。氏が努力して書いたものである限り、その無形の實印がはつきりと志賀氏を物語つてゐる。どんなに同じやうな作品の竝んでゐる所に於て

も、志賀氏の作品だけは、その一つ一つがそれぞれ別個の姿をはつきりと保存してゐる。「大津順吉」や「和解」の如きはある點までは題材が同じであるが、獨立した立派な作品となつてゐる。「大津順吉」として書かなければならなかつた作品であるし、「和解」は、「和解」として書かなければならなかつた作品である。「正義派」と「出來事」とでは矢張り同じやうな事件を扱つてゐながら作者が與へようとしたものは全く別のもの、獨立したものである。「正義派」は、「正義派」として讀み、「出來事」は、「出來事」として讀んで、始めて志賀氏が心の底から分つて來る。同じ一つの心から生れた作品であるが、どの作品をも同じやうな注意を以て讀まなければ、本當の志賀氏を理解することは出來ない。それほど志賀氏の作品には、獨自性と鮮明さとがある。

志賀氏の作品は氏の鏡である。實に微妙に、感光板が外界の光の陰影を寫し出すやうに鮮かにその作品は氏の心を寫してゐる。今日の文壇にもサイコロジストと言はれる作家はその數が決して尠くないけれども氏程に、自分の心の微妙な陰影を刻明に出す作家は稀ではないかと思ふ。吾々は氏がリアリストだといふ評定のあるに比して、そのサイコロジストである一面を見られてゐないのは不思議に思ふ。氏は最も簡單な心持の説明や、ある些細な事件の描寫の中に深い心理の微動を巧みに描いてゐる。何もサイコロジストといふのは、例へばフランスのブルジェーの如く、或る一人物の心理を長長と心理的な言葉で説明する者の謂ではない。一つの動作、一つの會話、一つの出來事の中から、特色のある心の動きをゑぐり出してこれを描くのが作家としてサイコロジストの上乘のものであると思ふ。我が文壇にもサイコロジストといふ看板の下に堂々とその聲價を高くしてゐるものもあるが、さういふ人の作品にはどこかに心理をもてあそんでゐる風がある。從つて生きた心理を往々にして取逃し、心理のなきがらだけを大切に表現するやうな場合が決して尠くない。志賀氏にはそれがない、氏は適確に明瞭に他人の見逃してゐる心理を捉へて來る。

さういふ微妙な心理を捉へるには、更に鋭い觀察力と直覺力とがなければならない。幸にして志賀氏はその觀察力と直覺力とを惠まれてゐる。この觀察力と直覺力とはよく人間心理の急所急所を捉へるべく敏活に作用する。そして氏にはそれによつて捉へたものを保存すべく、頭腦の冷靜さがある。氏は決して物に醉ふことを知らない。假令醉つても、感激しても、すぐ醒めることを忘れない。……

要するに氏の藝術は色彩の藝術ではない。この意味で氏は華美な裝飾澤山なものを好む人々には好かれない。氏の藝術は又臭ひの藝術でもなく、味の藝術でもない。氏の藝術は何と言つても光の藝術である。直接吾々の胸へ射し込んで來る光そのものが氏の藝術である。色でもなければ臭でもない。光と言つた感じで吾々の胸に通つて來る。（宮島新三郎―大正文學十四講）

出　所

【白樺の森】一冊。大正七年三月、新潮社發行。定價壹圓五拾錢。白樺同人の作品を輯めたものである。

要　旨

成長伸展の途上には必ず恐怖が起り、不安が生ずる。より成長し、より伸展すれば、未だ知らなかつたより大なる恐怖と不安とが生じて來る。こゝにも焦燥も湧かざるを得ない。この恐怖、この不安、而してこの焦燥を經驗する事によつて一安住の境地に達する事が出來るのである。然しながらこの安住境には更に大なる不可抗力が破壞の斧を振ふ。この時、安住境が忽ち破壞せられると共に、恐怖も不安も焦燥も亦消えてしまふ。そして如何にも淋しい境地がとり殘される。然しその境地の中に或る安定な動かす事の出來ない境地の悟得がなし遂げられるのである。この人生に於ける悟道に入る迄の問題を寫したものである。

段　落

一、蟲が恐しかつた……兎も角もう安心だ。（一二三頁一行まで）

大木の最初の安住境を描いてゐる。芽生えから百三十年經過して、自己の偉大な、頑強な體に對して、安住の境地に至るを得た大木の境地を描いてゐる。大木はこゝに過去の日を追懷してゐる。

小蟲を恐れた、鉈に怖れた。こんな事で三十年過ぎた。鋸におびえた、致命的な暴風に何度か出會つた、かくて百年過ぎた。かくして安住を得た、この大安心が次段に依つて破壞され、第三段の最後の安住境との照應をなしてゐる。

二、官林拂下の……赤く枯れはじめた。（一二九頁九行まで）

大なる破壞と滅亡とに直面する。この段は自ら二つに分れる。前段は不安の豫感であり、後段は破壞への直面である。或は之を二段として一つにまとめずに二つに分つた方がよいかも知れぬ。然し安心してゐる大木の心を一掃する二つの經過であるから、その目的とする所が一つであるから一段にまとめた。

作者はこの段に至つて大木を第三者の地位に置いて描いてゐる。第一段では大木を「自分」はと云つてゐた。この段からは「彼」はと書いてゐる。文構成上の一手段である。前半は會話體をとつて大木に危期の接近した事を思はしめる。その始めは役人と願ひ人との出現。大木と隣の木との會話の中に薄い氣味惡さがある。次いで願ひ人と勞働者との會話、こゝに大木は生死の境にある極めて危い所が描かれる。後半大木の伐採、羊齒類の枯死を描いて絶對的不可抗力の存在を示してゐる。

三、切株が並んでゐる……（終りまで）

不可抗力に直面した彼は再び過去を追懷して、そこに大悟道に入る。この段も前後に分れる。前半は過去の追懷、限りなく、より大なる不安の存在することを知る。そしてその事は不安と不滿とを失せしめた。後半は悟道に入つた大木の大きな淋しい安住の心持である。大往生に對して動搖しない靜寂の境地であつた。

解釋

【大鋸】　オガ。非常に大きな鋸で、その兩端に柄がついてゐる。

【蟲が恐しかつた。小鳥の嘴が恐しかつた】　追懷的な書き振りである。この最初の一行に依つてこの文が單に大木の逐年的記述でない事を思はせる。

【じろじろ】　目をつけて見廻すさまに云ふ副詞。

【鉈】　ナタ。刀に似て刀身短く、厚く、幅廣くして、柄を附けたるもの。薪・柴・竹材等を割り斷ち、又、削る等に用ふ。儀式帳「奈太二柄」運歩色葉「山刀(ナタ)　鉾(天智紀)。鈗・鈾・鋸(字鏡)・鉾(運歩色葉)。大國。

【木こり】　樵。きこること。又、其れを業とする人。宇津保、吹上下「炭やき、木こり」。曾丹集「春山にきこる木こりの腰にさす、よきつつきれや花のあたりは。」大國。

【胴切】　ドウぎり。胴中より切ること。つつぎり。太平記、十、長崎高重最期合戰「車切り・胴切り・立て破りに仕り棄て度く存じ候ひつれ共。」陰德太平記、五十九、伊丹攻「臼を抱かせて胴切りにし。」大國。

【ナイフで自分の肌にしるしを彫りつけた】　原文には、Aug. 1915. N.S. と彫りつけた。」とある。Aug. は August の略で八月、1915は西暦千九百十五年、N. S. は彫りつけた人の姓名の頭文字。恐らく作者志賀直哉の頭文字から出てゐるのであらう。

【自分は微笑した】　前にはナイフを恐れてゐたのであるが、今はナイフでかう彫りつけられても何ともない。少しは痛いにしても、もうこれだけになつた自分をお前の力ではどうすることも出來ないのだ……といつたやうな心持から微笑も出たのである。

【もういけない】　もう駄目だ。

【成長以外一分一厘自身を動かす事の出來ない自分を、その暴力に對して出來るだけ抵抗の少い姿勢に變へて呉れるものは、矢張嵐自身の力だと思ふと、惡意は無いと言ふ氣がして、今は憎めなくなつた】　嵐は自分の枝を吹き折つた殘酷なものである。しかし自分の思ふまゝに自らの位置と形態とを變じ得ない自分にとつては、枝のなくなつたことが自己の安定を圖る上に好都合なのである。かうした結果を與へてくれた嵐に對しては感謝こそすべけれ、

憎むことは出來ないといふ心持。かうした事は實人生の問題に卽して考へさせたいと思ふ。

【抵抗】　テイカウ。(一)さからふこと。てむかふこと。はりあふこと。(二)電氣抵抗に同じ通常略してこの語を用ふ。電氣抵抗とは電位の差一定なる二點間を異なる物體にて連ねたるとき、之を流るゝ電流の弱きものほど、電氣抵抗大なりといふ。電氣抵抗を單に抵抗といふこと多し。抵抗は物質の種類によりて異なるのみならず、同一物質にても、切口の面積の大小長さ及び溫度等によりて異なり。大國こゝは(一)

【兎も角】　ともかくも(左右)に同じ。(一)何れとも。なんとも。どちらとも。神代紀下「取捨(トモカクモ)隨ゝ勅。」枕二「久しう立ちて侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば。」源氏桐壺「物のつゝましき程にて、ともかくもあへしらへ聞こえ給はず。」(二)何れにせよ。如何やうなりとも。ともかく。とにもかくにも。大藏流狂言呂連「夫れならば兎も角も致しませう程に。」醒睡笑、四「一人は兎も角も世を過しかねず。」大國

【官林拂下げ】　官有の森林を民間に賣却すること。「官林」官有財產管理規則第十三條「官林內若は官廳使用地內に包含せるもの。」大國

【俺】　オレ。己。(一)自稱の代名詞。多く、同輩又は其の以下に對していふ詞。われ。著聞十六「おれが母にて候ものこそ、姉よりも好く候へ。」狂言伯母酒「おのれは、おのれを見知つたか。」(二)對稱の代名詞。賤しめていふ詞。なんぢ。記上「遙望呼二謂大穴牟遲神一曰……意禮(オレ)……是奴也。」神武紀「慮爾所造屋、爾(オレ)自居之。」枕、十「ほととぎすよ、おれよ、かやつよ、おれ鳴きてぞ、われは田にたつ。」大國こゝは(一)

【仕樣のない奴だな】　原文にはこの次に、「Aug.2015 かい。」とある。隣の木の言葉である。一一六頁の初の行に「ナイフで自分の肌にしるしを彫りつけた。」とある。そのことを思出して言つてゐるのである。彼はあの時 Aug. 1915. N.S. と書かれた。今度 2015 かゝ、と云つてゐるのは前の時から百年經つてゐることを示してゐる。

【矢立】　ヤタテ。商人や職人などが帶に挾んで携へるもので、墨壺に筆入の管を作りつけたもの、今は萬年筆が多く用ひられる爲に之を使用する事が少くなつた。昔の矢立といふのは、軍陣で箙の中へ入れて携へた硯の事で、正しくは矢立の硯といつた。

【なに何でもないよ、見給へ、大分向ふの方の連中も番號をつけられてゐるぢやないか】　番號をつけられない彼の隣の木に對するなぐさめの言葉である。

【地ならし】　地平。(一)土地の高低をならし平にすること。(二)農具の一。砂地又は柔か

なる地、若しくは打ち柔げたる地の上土を掻きならすに用ふるもの。農具便利論上「此の地平（ヂナラシ）は金ざらへとは少し違ひて、砂地又は和らか成る地は勿論、打ち和らげたる地の上土をかきならすには、至つて手がるくしてはやし。」大國こゝは（一）

【熊笹】　クマザサ。（一）禾本科、熊笹屬の竹類。稈の高さ三四尺、時に五六尺、細くして強靱なり。葉は濶大、長楕圓形、長さ七八寸に達す。老葉は葉緣白色にして美なり。花は小穗をなし、甚だ稀に開く。我が國、各地の山地に自生し、又、觀賞用として庭園に栽植せらるゝことあり。葉は料理物の飾りに用ふ。やさばささ。槍權三上「爐路ほの暗き燈籠の、火影宿かる熊笹の露は螢か。」箭。山白竹・篠花。（二）紋所の名。大國こゝは（一）

【呑みさし】　「さす」は仕遂げないで止めること。呑み殘し。

【煙管の雁首】　キセルの頭を雁首といひ、刻煙草を盛つて火をつける所。古型のは長くして雁の首に似てゐたさうである。

烟管（キセル）外來語なれど不詳。（一）刻み烟草を飲む具。頭を雁首、本を吸口といひ、金屬又は陶器などにて作る。その中間を竹にて接續し之を羅宇といふ。雁首の先端曲がりて上に向きたる孔あり、烟草を盛る處とす。之を火皿と名づく。羅宇なくて雁首と吸口とを金屬にてつづけて打ちたるを延べ打ちといふ。天網島、上「こちも念佛申ぞや、鉦の火入れ、きせる撞木。」百合若大臣野守鏡、二「きせるくはへて懷手、身をのさばつて立ちゐたり。」きせろ（京都）・きせり（伊勢）（二）昔時・芝居にて喫烟用の火繩を賣りたるもの。劇場新話「半疊火繩賣りは……火繩の數にて見物人の入り高を量る。一名きせるといふ。」大國キセルの語原考に關しては曾て大正十五年九月號の「文藝春秋」に芥川龍之介の記事が載せられた。

【彼はその時、何か知らず身震を感じた】　自分の運命が今方に決せられようとしてゐるからだ。

【盜伐】　タウバツ。他人の所有若しくは占有に屬する竹木を不法に伐採すること。北史「有ㇾ人盜ニ伐其父墓中樹一者上叟對ㇾ之號慟。」大國。

【願ひ人】　官有林拂下げを願ひ出た人。

【木の死骸】　木炭。

【ずつずつ、ずつずつと靜かに伐進む。その休の無い靜かな進行】　ナイフや鉈と違ふ、このヂリ〳〵と喰ひ込むやうな音、その落着いた進行、休みない進行、そこには如何にも不可抗力なものゝ存在があるやうに感ぜられる。その不可抗の死の直視は大木をして自己の滿心を破壞せしめるに十分であつた。「ずつずつ、ずつずつ」は、ずッ——ずッ、ずッ——ずッ」と讀むのがよい。

【その休の無い靜かな進行は、その木の死を一層不可抗な物に思はせた】　一分一分わづかながらもたえず幹深く喰ひ入つて居る鋸を見ると、何物も切斷し盡くさではやまぬといふ力强さが見える。あの破壞の力は前には到底敵し難いといふ感を抱かせた。

【不可抗】　フカカウ。てむかひの出來ぬこと。

【環鐵】　ワガネ。鐵で造つた環。

【樫】　カシ。あかがしの異名。赤樫。殼斗科、櫟屬の常綠喬木。幹の高さ四丈に達す。葉は楕圓形、鋭頭、全緣、又は葉先少しく波狀をなす。幼葉は褐色の毛を有すれども、成長したるものは平滑なり。花は單性雌雄同株、葇荑花序に排列し五月頃開き、褐色なり。果實は楕圓形の堅果にして、下部に椀狀の總苞を具ふ。我が國にては南部の溫暖なる山地に自生す。材は堅緻にして赤味を帶び、船具・農具・車輛等の製作に用ひて良好なり。あかめ。あかめがし。おほばがし。おほがし。かし。かたぎ。くろがし。大國

【楔】　クサビ。(一)鐵・石又は硬き木材を以て、頭は太く末は細く作り、木石を裂き、重き物を押し上ぐるに用ひ、接合したる物の離れぬやうに兩方に跨がらせて打ち込むもの。又、兩端太く中央細く作りたるものあり。砂石集、十下「くさびを以てくさびを拔き、毒を以て毒をせむる心なるべし。」(二)物と物とをつぎあはするもの。後拾遺、冬「岩間には氷のくさびうちてけり、玉ゐし水は今も漏り來ず。」(三)車の軸を轂(コシキ)に貫きたる、その端の孔に差し込みて、輪の脫するを防ぐに用ふるもの、鐵にて作る。大國

【彼の友は從容として一言も口を利かなかつた。彼は嚴肅な感じに打たれた】　ずつずつと休みなく切り進む鋸の進行、かういふ死に直面して、友は全く自己の運命を思ひ知つて、もう何とも言はれぬ心持になつてゐたのであらう。彼は亦これを見て嚴肅な感じに打たれると同時に、自己の運命をも深く考へさせられる機緣にふれたのである。

【從容】　ショウヨウ。擧動又は氣象のゆるやかにおちつきたるさま、又ゆつたりとして迫らぬさまにいふ語、書經、君陳寬而有ㇾ制、從容以和。」戰國策「從容談ニ三國之相怨一。」大國。

【嚴肅】　ゲンシュク。おごそかにしてつゝしみ深きこと。嚴格にして靜肅なること。大國。

【うめき】　うめき聲。うなりごゑ。大國。

【煽を受けて】　アフリをウけて。「煽」は、(一)吹き動かす。ひるがへす。(二)扇などを動かして、風を起こす義。大國　煽を受ける」は、「餘波を受ける」などと同義。

【日なた】　日の方の義。日のあたる方。日光のあたる處。相模集「さしてこしひなたの山を賴むには、目もあきらかに見えざらめや

は。」てるみ（下野栃木）ともいふ。大國。

【彼にはもう根氣はなかつた】　もつと大きくなつて、大鋸をのがれようといふ氣力もなくなつた。「根氣」コンキ。根器。とも書く。（一）佛語。きこん（機根）に同じ。（二）忍耐する氣力。こん。氣根。精根。大國こゝは（二）

【徒勞に歸した】　むだ骨折になつた。「徒勞」トラウ。いたづらに骨折ること。むだぼねをり。梁武帝詩「不見佳人來、徒勞心斷絶。」大國

【徒勞といふ氣もしなかつた】　若芽の時代から今日に至るまであこがれ求めようとした安心こそ得ることは出來なかつた、が今はそれよりも別な一段高い安心を得たのだ。して見れば過去の努力は結局今日の境地に到達し得る必然の過程なのだ。かう考へる時には過去の努力はまんざら徒勞に歸したわけではないのである。

【大鋸を知る前の少しだらけたやうな安心もなくなつた】　今日の安心から見れば、その時代の安心は甘つたるい、しまりのない安心であつたのだ。

【それはいかにも淋しかつた】　自己の力を眞に悟つた時の心持である悟りの境地に入つた淋しさである。自己を悟つた時、必ず伴ふ感じであるに相違ない。

【安定】　アンテイ。（一）安んじ定むること。

左傳襄公二十二年「大國若安二定之一、其朝夕在、庭。」（二）おちつくこと。動きかはらぬこと。大國。

鑑賞

本文の主意は最後の一段のところにある。人は安心を求めようとして、患難に堪へ、壓迫と戰つてゆく。だが一難去れば又一難新しい不安はどこまでも襲つて來る。そして遂に不可抗な運命に逢著した時、すべてが遂に破壞を免れざることを知り、己が今まで努力して求めようとした安心の境地も幸福の世界も畢竟把へることの出來ない一種の幻影に過ぎないと悟る、あゝ此のあきらめの心境、それは無限の渺しさであると同時に、又靜かな安定の世界である大悟徹底は方にこの境地であつて、不安もなければ不滿もなく、焦燥も恐怖もない。人はこゝに立つて初めて大安心を確保することが出來るのである。

文章の形式は極めて平易でありながら、その內容に於て深く人生の一面を考究吟味すべき文である。敍事の進行にも、心理の描寫にも、すべてむだがなく、緩みがなく、ぬけめのない點を味はせたい。參考までに氏の文章に對する評言を左に揭げておく。

志賀氏の文章は、その言葉や文字の使ひ方もそれらの正しい感味と生命とに對する理解を思はせる

精嚴なもので、所謂「文字が持つ素樸感を出すこと」に成功してゐる。氏の文章ほど一字一語が、讀者の心に清らかに澄んだ音で沈み、鋭い線で徹してゆくものはない。描かうとする對象に對する作者の心像、それの表現、その表現が讀者の頭に植ゑつける心像、この三者が、歪まず曲らない正しい一直線の上に列つてゐる。「その單純性は全く近代生活の複雜さの上に立つてゐる。作者の感性はあらゆる近代的な刺戟に屈しないでよく確實さを保ち、作者の空想は清く澄んで、一見平明の裡に無數の陰影を藏してゐる。即ちこの場合の單純性は極めて貴族的なデリケートなものであると同時に、作者の思想に把握の確實さ、洞察力の深さ、及び表現の適確さを示すものである。

文體は簡素で、センテンスは短い。そして、句法にも詞姿にも、里見氏に比べると、音律と色彩の變化に乏しく、躍動とか、暢達とか、自由とかが少く、文章の抑揚やアクセントは目立たない。詳悉法を嫌つて、修辭學で云ふ「存餘の原理」を生かしてゐる。「個文と個文との間」、「個文と個文との結び目」に、無限の妙味と含蓄味とを湛へてゐる。從つて讀者は讀み取つた作品を彼自身の空想で培ひ、彼の情緒の中で成長させることゝなるのである。（文藝春秋社編、昭和二年六月發行の文藝講座第二號――川端康成）

挿繪

「伐木之圖」（一二三頁）片多德郎作。第九回帝國美術院展覽會洋畫部出品畫。

「片多徳郎」明治廿二年六月大分縣西國東郡高田村に生れ　東京美術學校に入り、明治四十五年西洋畫科を卒業した。文展へは第三回、第五回、第六回、第八回、第十回に出品し、數回褒狀を得、第十一回に「妓女舞踊圖」を出し特選となる。更に帝國美術院推薦となり、十四年審査員となつた。「明治大正文學美術人名辭書」

「炭燒の圖」（一二五頁）ミレー筆

「山上の大樹」（一二八頁）長原孝太郎作、第十回文展出品畫原畫名「晴嵐」

「長原孝太郎」止水と號す。元治元年二月美濃の竹中藩に生れた。明治十八九年頃小山正太郎の不同舍に入り、後、原田直次郎の指導を受け、三十一年、東京美術學校助教授になり、文展へは第二回、第三回、第四回、第五回、第六回、第七回等に出して褒狀又は三等賞を得、第九回の「晩春」は二等賞の首席となり、第十回に「初夏」「晴嵐」を出して推薦となつた。現、東京美術學校教授。大正八年以來帝展審査員となつた。（明治大正文學美術人名辭書）

一九　和　歌

作　者

【金子薫園】　カネコクンエン。名は雄太郎。明治九年十一月東京神田に生れた。二十六年落合直文氏の門に入り、和歌と其書を學んだ。三十四年歌集「片われ月」を出して詩名をあげ、叙景の歌を以て歌壇の一方に雄視した。爾來「小詩國」「伶人」「わがおもひ」「覺めたる歌」「山河」「草の上」「金子薫園集」等の歌集を公にして歌壇に重んぜられてゐると同時に文章に於ても亦一家をなし散文集には「自然と愛」がある。其他文章作法、和歌作法等の著述頗る多く、歌文の師として當代有數の人である。大正七年十一月雜誌「光」を創刊し氏の主宰せる短歌研究會の機關雜誌にした。(明治大正文學美術人名辭書)

【窪田空穗】　クボタウツボ。名は通治、明治十年六月八日長野縣東筑摩郡和田村に生れ二十八年松本中學校を出て、三十七年早稲田大學國漢文科及英語を卒業した。三十七年早大卒業後處女歌集「まひるの」を出しついで「空穗歌集」「濁れる川」「鳥聲集」「朴の葉」「土を眺めて」「青水沫」等の歌集がある。雜誌「國民文學」を主宰して歌文の研究と後進の指導に從事してゐる。著書には尙短篇集「爐邊」の外古典の註釋、歌論文集各數篇ある。早稲田大學講師。(明治大正文學美術人名辭書)

【若山牧水】　ワカヤマボクスヰ。名は繁。明治十八年八月日向國東臼杵郡坪谷村に生れた。早大英文科出身。尾上柴舟の門に入り前田夕暮等と「車前草社」を結び雜誌「新聲」に詠草を發表した。卒業後中央新聞に入つて三面記者になり、四十三年短歌雜誌「創作」の編輯に從事した。大正十五年「詩歌時代」を創刊せしことあり昭和三年九月十七日逝く。「海の聲」「ひとり歌へる」「別離」「路上」「死か藝術か」「みなかみ」「秋風の歌」「砂丘」「朝の歌」「白梅集」「さびしき樹木」「溪谷集」「くろ土」「山櫻の歌」等の歌集の他、散文歌話の著多し、その全作は「牧水全集(全十二卷」に收められてゐる。

出　所

現代詩歌新選。石川誠編、大正十四年、大同館書店發行。定價貳圓八拾錢。

內容は上卷(和歌篇)鳥中卷(詩篇)下卷(俳句篇)の三部に分れて各代表作家の作が集められてゐる。他に「現代詩歌壇の鳥瞰」と題する小論が卷頭に載せられてゐる。

要旨

現代の叙景の歌の解釋と、ひいては和歌に對する興味と、批評眼とを植ゑつけたいと思ふ。

解釋

〔鳥の影……〕

麗かに晴れた秋の陽ざしを浴びて飛びまはつてゐる鳥の影が閉て切つた窓のあたりに映つたり消えたりする。そして周圍はなんの物音もしないがたゞ靜かに木の實のこぼれる音がして、それが一層落ついた氣持に誘ふ。

【うつらゝ】　移（自、は四）（一）場所をかふ。（二）うつりかはる。（三）おとろふ。映（自、は四）影又は光うつる。廣辭

【小春日】　コハルビ、小春（陰曆十月の異稱）の頃のうららかなる日。廣辭

〔雪とけて……〕

晝になつて陽があたつて來たので八つ手の葉の上に積つた雪がとけ初めて、その濡れて一層青々とした葉から靜かに雫が落ちてゐる。

【八手葉】　ヤツデバ。八手の葉。八手、五加科の常綠灌木、暖地に自生し、又庭園に栽培せらる。莖は高さ七八尺、一根より叢生す、葉は互生し掌狀に分裂す、裂片概ね八箇ありて緣邊に細鋸齒を具し、質厚く深綠色を呈し光澤に富む、冬日、枝梢の葉心に花莖を抽き繖形花序をなして小白花を攢簇す、果實は小さくして球形をなし熟すれば黑色となる、てんぐのはうちは。廣辭

〔軒かげの……〕

朝ふとめざめてみるといゝお天氣で軒かげにある常綠木の上に積つた雪が、陽の出とともにとけ初めて、その雪解水の落ちる音が、しと〳〵と聞えて來る。

〔我が家を……〕

自分の家を包んで降つてゐる春雨のひそやかな音をきいてゐると、やがてその音が耳に一杯にみちて來た。

〔闇に咲く……〕

此處は山か丘かの高見の場所である。もう日の暮れた闇の中だけれど、しめつぽい野茨の白い花がそれだと解る程に咲いてゐる。どこからとなく風がそよいで來て、ふと見下すはるかの下の方に灯が一つみえ初めた。

【野茨】　ノイバラ。野薔薇、薔薇科、薔薇屬の落葉灌木、やゝ蔓狀を呈し高さ三四尺、枝に刺多し、葉は羽狀複葉、各小葉は楕圓形鋸齒を有す、初夏白色の五瓣花を枝梢に穗をなして開き後、紅色大豆大の果實を結ぶ、我が國各地の原野に自生す。大國

〔さわさわと……〕

まつ暗な闇の中で何んの木だかさわ〳〵となつてゐると思つてゐると、やがて夏の月が空へ明るく出始めた。

〔切株は……〕

丁度梅雨も明けて綠の六月が來ようとしてゐる或日、ふとみると今迄なにかわからなかつた樣な切株からうす紫の若芽が出初めてゐる。いよ〳〵桐の木となりかけてゐるのだ。

【桐】　キリ。玄參科（ゴマノハグサ）の落葉喬木、各地に栽培せらる、幹の高さ三丈周圍三尺に達す、樹皮は薄くして帶綠紫黑色なり、葉は大形にして對生し、全緣又は三裂す、嫩葉の時は柔毛を密生すれど、長ずれば上面稍平滑となる、五月頃葉に先だちて複總狀花序をなせる數多の脣形花を開く、花は紫色若しくは白色にして、蕚は密生毛を有し、花冠は大形にして雄蕋は四箇あり、花後に二室の蒴果を結ぶ、木材は琴、箱、其他種々の器具の料に賞用せらる。〔廣辭〕

【うす紫に若芽】　前記の樣に紫色の脣形花の咲きかけたのを作者が若芽と見たものと思はれる。

【六月】　ミナヅキ。水無月、陰曆六月の異稱。

〔うら〳〵と、……〕

うら〳〵と照つてゐる煙る樣な陽の光の中に山櫻の花が今が盛りと咲き靜まつてゐる。

〔土踏めど……〕

土をふむで行くけれども草鞋の音もしない。丁度山櫻の蕾が開かうとしてゐる春淺い山は本當に靜かである。

〔摘草の……〕

今日の摘草の事など思ひ出すともなく思ひながらほつとした氣持で草の匂の殘つた指先を洗つてゐたら（恐らく井戸端か何處かの屋外である）野の向ふの方に早や薄白い月が出た。

鑑賞

金子薫園

一口に云へば叙景の歌に明星風の名殘の含まれてゐる歌である。技巧の方の進んでゐる程には獨特な深さや、新しさを見出す事は出來ない。「自然の眞の姿にめざめたる」と自分でもいひ、稍、現實的、感覺的な風に入つた樣であるが、要するに歌壇の主潮流に棹さして行くといふ方ではなく、よき和歌作法の師であるといふ風の人である。

窪田空穗

同じく明星畠であるが其後一人立ちをして歌風もそれより一歩出たものになつた。歌壇の足跡はあまり大きいとはいへないが、確な歩みを續けてゐる一人である。

〔火の山の……〕

噴火山の裾の松原に疎い月光がさしてゐる、その夜空を、ほととぎすが鳴いて通る。

若山牧水

「彼は餘りに有名であり、彼は餘りによき意味に於ける感傷詩人であり、純情歌人であつたといふ事について誰も異存はない。同じ柴舟門下に生長し、同時代の潮流を乘切つた唯一の同伴者であつた彼、彼の藝術に永遠性を認め、彼の歌に絶えぬ生命の流動と感情の高揚を觀る所以である。（畧）

うすべにに葉はいちはやく萠え出でて……

此等の歌になるとリズムが非常に緩かに流れてゐる。晩年に近くなる程淡々たるものになつてゐる。物の觀方などもすつかり推移のあとを見せてゐる。山櫻のうすべにの葉を見てゐるところなどは全く作者の年齢と靜かな心境の然らしむるところだと思ふ」と前田夕暮氏が云つてゐる。

挿　繪

二階より（薫園筆蹟）

二階の窓からぼんやり汽船のゆききをみてゐたら、やがて夕方になつて來た。蜩の聲も何處かでしてゐる。靜かな海邊の風景である。

うす紅に（牧水筆蹟）

まだ若くて赤茶けた小さな葉がもう早や出かけて、山櫻の花が咲かうとしてゐる。花が咲かない間に葉が出る山櫻の特長をつかまへてよく早春の和やかさを出してゐる。

二〇　蜃氣樓

作　者

【橘南谿】　タチバナナンケイ。德川時代の醫家且國學者。伊勢の人、代々久居の藤堂氏に仕へた。七歳藩儒佐野西山に儒を學び、老子・西行・兼好等を追慕し、特に兼好に私淑した。十四五歳の時父を喪ひ、母が生計に苦心せんことを思ひ、遂に讀書を廢して醫を學び、その蘊奥を究めた。又博く和漢の典籍に涉り、詩を賦し歌を詠じ、俳諧をも作る。天明元年母歿するや、豫ての願たる西遊を思ひ立つた。目的は醫術の修行で、山水の奇習を探るは其の餘事であつた。同二年秋、京畿を發し、山陽・西海・四國を歴遊し、明年秋京に還り、同四年東遊を志し、東海・奥羽・北越の奇勝を探り、六年越後から佐渡に渡らんとしたが颶風に遇つて止み、信濃に入り、更に越後から北陸を經て京に歸つた。歸京後門戸を張り醫を業としたが、名聲大いに上り、從六位石見介に敍せられた。居常好んで傷寒論を講じ、又脚氣病の研究をなし、轉地がその緊要な療法であることを始めて唱道した。南谿もと瘦身で多

病、加ふるに喘息を患へ、寛政九年仕を辭し、專ら醫を業としたが、文化三年四月歿した。年五十三。著に西遊記・東遊記・傷寒論分注・傷寒論外傳・傷寒論通言・北窻瑣談・漢語律呂考・國語律呂考等がある。

出所

〔東遊記〕卷三蜃氣樓の章より採擇した。有明堂文庫には東西遊記(各五卷、及續東西遊記各五卷)を合せ收めて一本としてある。尙これに彼の北窻瑣談をも含めてある。東西遊記に就いては南谿自ら其のはしがきに、「予醫學修業のために漫遊する事前後合せ五年、東西南北到らざる所なし。然るにこの書唯東西遊記と名くるものは、京を日本の中心とし、二つに分ちて東西とし、南北はその中にこむるものなり。予が漫遊、もと醫學の爲なれば、醫事にかゝれることは雜談といへども別に記錄して、同志の人にも示す。唯この書は遊中見聞せる事を筆のついでに記せるものにして强ひて其の事の虛實を正さず、誤りしるせる事も多かるべし。見る人その杜撰をとがむること勿れ。この書中にしるせる事事について、思ひ考ふる事多けれども、わざと此書中には愚按を加へず、議論取捨は見る人の心にあるべし」云々。又「天明二年の秋より翌三年の秋にかけて山陽を經て九州及四國をめぐり、四年の秋より六年の夏にかけて東海東山北陸の諸州に遊び、その間に見聞せる奇事異聞を錄したるもの卽ち東西遊記正續編なり」といつてゐる。以てその內容を伺ふに足る。文章は平淡にして技巧を弄せず、讀去り讀來り、中に言ふべからざる妙味を感ぜしめる。東・西遊記は有朋堂文庫の外、續帝國文庫にも載つてゐる。

要旨

南谿自身は蜃氣樓そのものは見なかつた。ただ人にその話をきいただけであるが、その聞いたまゝの蜃氣樓を聞いたまゝに筆にし、且聞いた所によつて一々歸納して蜃氣樓の原因にまで說及んだ隨筆である。これによつて蜃氣樓に關する諸說、漢文的考證、我が國に於ける蜃氣樓中の有名なもの等を知らしめ、兼ねて紀行文隨筆風のその平淡なる筆致に接せしめ度い。

段落

一、唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる……唐土にては其だ珍しがりて賞玩することとぞ。(一三五頁一行まで)

1、蜃氣樓といつて海上に雲の如くに氣が立ちのぼつて樓臺城郭の形を現すものがある。

2、唐土の書物ではこれは大海の底にある大蛤が氣を吐くのだとか、蜃といふ龍の如きものが海中に住んでゐて氣を吐くのだとか云つて、珍しがり賞玩するといふ事である。

二、我が國は四方大海にて……一生涯遂に見ざる人多し。(一三七頁四行まで)

我が國では稀であるがただ魚津の邊では毎年之が見える。その魚津の蜃氣樓の實況、及びこの蜃氣樓はいつ出るか知れぬので魚津から二三里隔てた地方の人々は一生涯見ないものもあるとの話。

三、余が越中にありし時も……終りまで。

1、私は殘念ながら實見しなかつたが、糸魚川の儒者松山茂肅は見たとて實況を語つてくれた。

2、魚津の蜃氣樓は陸地近き入海に見える。これは唐人の作つた詩などにいへる所と異るが、海中から蒸登る陽氣がすぐ向ふの山に映えて色々の形を現すのらしい。向ふに當のない大海ではたとへ陽氣が立登つても人の目には見え難いらしい。

3、桑名の海にも、安藝の國にもたま〳〵はあるといふが、何れも向ふに山があるので、海中に蒸登る陽氣がこの山に映じて蜃氣樓を現出するのだ。

4、奇を好むものは越中に行つてこの樓臺を見よ。

解釋

【唐土】　モロコシ。(一)昔時、我國にて支那　一　を呼びし稱。(二)もろこしきび。廣辭。こゝは(一)。諸越(シヨエツ)の地の字を文字讀にせる語か、或は云、諸物、海を越す意、或は云、諸致(モロカシ)の意。言海

【もてはやす】　取立てて譽む。ほめそやす。

【唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる】　文獻通考、「符堅時、長安有二水影一、遠觀若レ水、視レ地則見レ人、至二堅晩年一而止、」五朝小說、唐志怪錄「太歷末、深洲東鹿縣中、有二水影長七八尺一、遙望二見人馬往來如レ在二水中一、及レ至レ前不レ見レ水、」唐國史補、「海上居人、時見レ飛樓如二締構之狀一、甚壯麗者、太原以北晨行、則煙靄之中、覩レ城闕狀如二女牆雉堞一者、皆天官書所レ說氣也、」宋書「宋文帝、元嘉二十五年、青州城南地、遠望二見地中一、如レ水有レ影、人馬百物、皆見影中一、積年乃滅、」前漢書天文志　海旁氣象二樓臺一、廣野氣成二宮闕一。」史記、「海傍蜃氣成二樓臺一。」(廣文庫)。

【蜃氣樓】　シンキロウ。無風平穩の日に、溫度又は濕度の關係より、大氣の密度の層々相異なるとき、光線の屈折並に彎曲の起るがため、遠方の地物の像の、海上にては空中に、沙漠にては地平下に、或は直立し或は倒立して現ずるもの、もと支那にて、海上に現るゝものを蜃(ミノチ)の吐く氣の作用なりといひ傳へたるよりこの名あり。廣辭

蜃氣樓に對する物理的說明、(百科全書によ

る）

「太陽の光線霧圍氣に射入すれば、必ず屈曲するの理を推して考ふるに、人目のよく見る所は、常にその現在所にありと謂ふべからず、物體と眼目との間にある霧圍氣をして、密薄相均しからしめば、諸物をその現在所に見るを得べし、然れども霧圍氣平均ならずして、光線屈曲する時は、山岳を隔て、或は遠く地平線下に在る所の諸物、宛然として人目に見ることあり、是所謂蜃氣なり。（中略）蜃氣は霧圍氣中の光線屈曲の不平均より起ること明かなり。故にその不均なる事左右にある時は、右方の物體を左方に顯し、或は左方の物體を右方に現す、

若しその不均なること上下に在りて左右相同じき時は、一物を左右に顯し、若しその不均左右上下にある時は、物體を現す事放大なる、恰も望遠鏡を以て物體を視るが如し。故によく眼目の及ばざる物を顯すことあり。之に反して屈曲力の不均なること、光線を屈して物體を縮少すれば、近きに在つて物體を見えざらしむること、亦恰も凹鏡を以て物體を視るが如し。」

【海市】　カイシ。和漢三才圖會「海上有二蜃氣一時結爲二樓臺一謂二之海市一」古今類書纂要「登州海上春夏時、遙見二水面一時有二城郭市建人馬一、若二交易狀一、往來絡繹曰二海市一。」蜃氣樓」のことをこの他、山市・地鏡・迎水・島遊・影沼・狐の森・濱遊・龍王遊等ともいふ。皆、他所の山水宮殿、天の遊氣にうつり、その影の海氣、山氣、水氣にうつりてあらはるゝより、ありのまゝに名づけたのである。（廣文庫）

【樓臺】　ロウダイ。たかどの。「結ぶ」は、かまへつくる。「庵を結ぶ」など。

【城郭】　ジャウクワク。しろ。くるわ。廣辭

【まのあたり】　目の前。

【唐土の書にいへるは云々】

埤雅「雜兵書曰、東海出レ氣如レ龍、渭水出レ氣如レ蜃蜃形如レ蛇而大、腰以下鱗盡逆、一曰、狀似二螭龍一、有レ耳有レ角、背鬣作二紅色一、噓レ氣成二樓臺一、望レ之丹碧隱然如レ在二煙霧一、高鳥倦飛、就レ之以息、喜且レ至、氣輒吸レ之而下、今俗謂二之蜃樓一將レ雨即見。史記曰、海旁蜃氣成二樓臺一、野氣成二宮闕一、即此是也、世云、雉與レ蛇交而生レ蜃、蓋得二其脂一、和レ膩爲レ燭、香聞二百步一、煙出二其上一、皆成二樓閣之狀一矣、又曰、蛇之求二於龜一、則爲レ龜、求レ爲レ雉則爲レ蜃、故三物常異而同感也、筆談登州海中、時有二雲氣一、如二宮室、臺觀、城堞、人物、車馬、冠蓋之狀一、謂二之海市一、或云、蛟蜃之氣、」

大蛤亦名レ蜃、冬月雉入レ海所レ化、其肉以可レ鷹、殼可レ飾レ器、灰可二堽レ壙飾二墻壁一、又有レ珠可レ取、則蚌之屬也、」（廣文庫）

【蜃】　松屋筆記「潛確類書曰、蜃は形蟠龍に似て、角あり耳あり、雨降らんとする時は、

氣を吐いて樓臺の形をなす、俗に蜃樓とす。蜃に二種あり、樓臺の形をあらはす蜃は之双反、音震也、去聲也。時軫反、音腎、上聲に讀むは、車螯の類也、和名ホタテ貝と云ふ、」又、本草記聞「蜃に二種あり、蛤類の蜃と、蛟龍類の蜃となり、部に大蛤也といふものは蛤類の蜃なり」（廣文庫）

【蛤の氣を吐いて】　上記の如く蜃は蛟の類であるが蛤も亦一名蜃といふよりして誤り傳へたものである。夜光璧に「唐の陳藏器が車螯の氣を吐いて、樓臺をなすといへるは誤れるなるべし、此の註に車螯は蛤なりとあるにて、蛤のわざといひならはせるなり。その外、惑説多し」ことごとく書を信ぜば書なきには

しかじとこそ」とある。（廣文庫。）

【蘇東坡なども南海に遊びし時龍神に祈り】　兩儀集説に「蘇車坡、爲レ文禱二海神一十月爲レ之出現、云々」とある。「龍神」リユウジン、海神（ワタツミ）、雨を司る。龍王。字源には「リヨウジン」としてある。詳漢、言海、廣辭、はみな「リユウジン」。

【賞玩】　シヤウグワン。もてはやすこと。愛で弄ぶこと。言海には清音で「シヤウクワン」としてある。廣辭・詳漢・字源はみな濁音。

【魚津】　富山縣下新川郡。魚津邊に蜃氣樓多い理由。「先づ地形を考へると、魚津は富山灣に面して彼方に能登半島を望む。それ丈では別に蜃氣樓の現れる原因として有力でない。

その有力な原因は、蜃氣樓の現れる時節は毎年三四月の候である。三四月の候といふのは、山々の雪が解けて雪解の水が流れ出す頃である。そこで考へてみるに、魚津の邊には黒部川が流れて海に注いでゐる。この黒部川が雪解の冷たい水を海に注ぐ。それが第一の原因である。冷たい水が注入するので海水の溫度が低下する。乃ち海面の氣層に密度の差が出來る。「天氣殊にのどやかにして風收り」たる日には、空氣中の密度の差が層をなしてじつと靜まつてゐる。乃ち、蜃氣樓の現るべき條件が具はるのである。

【歴々】　レキレキ。あり〳〵と見えるさま。あきらかなさま。

【社人】　シヤジン。かんぬし。神職。

【矢倉】　ヤグラ。櫓のこと。城壁、城門の上に作れる樓、矢石を發して防禦し、且は遠きを望む用とす、後世は敷階なるあり。「彌座」の義か。言海

【矢間】　ヤザマ。城の櫓、女垣（ヒノガキ）などにある窓の稱。これより外を望み、又、矢丸を放つ。矢狭間、箭眼、銃眼みな同じ、「狭間」は、ひま、隙間。言海。この語大國はヤサマと清音になつてゐる。廣辭は濁音。

【城下】　ジヤウカ。（一）城の下、城の外。「――の盟。」（二）大名の居城の邊にある市街。城市。言海。こゝは（二）。

【人して】　人をして。「して」は、を使ひて、

以て、にての意。言海。

【年頃】　トシゴロ。(一)數年このかた。年來。(二)齡の其程となりし事。(三)としばへ。齡の程。年紀。言海。こゝは(一)。

【陽氣】　ヤウキ。(一)陽の氣。「陽」は「陰」に對し、何れも漢土の理學の語。易の理より出でて、萬物相反したるものを、この二つに配していふ。例へば、日、火、男、南等を陽とし、月、水、女、北等を陰とするが如し。(二)晴れわたり、打ち開け、又は、賑はしく盛なる事。快暢。(三)俗に時候。言海こゝは(一)。

【數百千里】　數百里乃至千里。「數十百里」は數十里乃至百里のこと。

【伊勢の桑名の海にも云々】

閑散餘錄、「吾州の伊勢の海も、昔よりその名あり、二三月の頃、天氣暖和にして風浪なき日に多くあらはるゝなり。これ蛤蜊の氣なりといひ傳ふ。」云々。

倭訓栞、「伊勢國四日市のあたりに、なごのわたりというて、海上に忽然として、城郭臺榭出現することあり、是れ蜃樓也。」云々、(廣文庫)

【安藝國にても云々】

夜光璧、「藝州の人のいはく、嚴島の海上に、むかしより蓬萊山の出現といひつたふる事あり。享保十一年丙午の四月十六日午の刻にも此の事あり、江波といふ所の沖より、つくねが島といふ邊の海の面、俄に金色の濱と見えわたり、所々に金屏を立てたるごとく、五色の岩ぐみ、瓊林玉樹、金殿樓閣の狀、すべて金色の光りきらめきて、さながら蓬萊山といふべきものなり。僅に三刻許りのほどありて、日のかたぶくに從ひ、自ら消えてもとの海面に成りぬ。」云々。(廣文庫)。

鑑賞

物理學的知識の皆無であつた時代に、自然現象の奇異なるものほど人心を驚かしめたるものはなかつた。雷、電、地震等はそれが一般的であつたので廣く世人もその實物を知つてゐる。しかし蜃氣樓はそれを見得べき場所が局限されてゐる。從つて見ない人が大多數である。諸國の奇事異聞を求め歩いた南谿が之を筆にしたのは尤である。

ただ見聞のまゝを筆のついでにしるせるものではあらうが、文筆にともしかつたら、又舊記に詳しくなかつたら、これだけ平淡に又豐富には書けるものでない。この點は心して讀むべきである。

本課を讀んで見て一寸困るのは氣の說明であるが、「氣」は空氣である。空氣は死んでゐる。それが「氣」といふ時に、それには一寸說明し難い或る生靈的な意味を含ませて用ひてゐる樣である。漢文流に難しい字源論をやるより直接に「氣」といふものを暗示して、それをたとへ朧氣でもよいから、覺ら

しめる方法がよいと思ふ。

挿　繪

橘南谿津蹟。

鐘鳴て塔見付たるかすみかな。南谿。

大意。「かすみにかくれて見付からなかつたが、鐘が鳴つたので、始めてその方かと塔の所在がわかつた。」といふのである。

四書索引のこと

四書索引は森本角藏氏が十年間の苦心の作である。氏は大正二年の二月に着手し、大正十一年の四月に脱稿するまで、約十箇年間、毎朝三時間をその事業に宛てた。序文の中に……しかし私は中學校の教師で、かなり忙しいのですから、その仕事に累を及ぼしてはならないといふ懸念と、周圍から妨げられないやうにといふ二點で、朝四時頃から七時頃までをそれにあてる事にしました。とある。

二一　椿

作　者

【幸田露伴】東京の人。名は成行。慶應三年七月廿六日に生る。これと云ふ學歴はなくて二十三年「露團々」の一作を著して文名大にあがつた。氏は頗る博覽强記。漢籍に國學に歴史稗史に至るまで一として通ぜざるなく、殊に佛教については最も造詣が深い。一度聘せられて京大の國文科講師となり、徳川文學を講じたが、後辭し、東京向島の蝸牛庵に靜居し時に執筆してゐる。文學博士。氏の作品は彼の「五重塔」「二日物語」等の名作を初め、「幽情記」「日本史傳文選」等の著がある。此等の大部分は「露伴叢書」に集められてゐる。（明治大正文學美術人名辭書による）

出　所

【洗心廣錄】全一冊。至誠堂發行、定價三圓八拾錢、大正十五年再版。

序「前に刊する所の洗心錄は予の隨筆雜著を蒐めたるもの、續いて刊する所の悅樂、亦大體相肖た

り、二書もと零細叢脞の書なりと雖も、人を引いて道に近づかしめんとするの微意無くんばあらず。洗心悅樂の名を命じたる所以なり。數年前、地大に震ひ、火忽ち發し、東京其の十の七を擧げて瓦礫灰塵に歸するに及び、紙型皆燬け、印行中斷す。乃ち至誠堂主人今茲二部を合一し、版を改め刊を復たびし、且新に幾篇の文を加へんことを乞ふ。よつて洗心廣錄といふ。洗心といふものは其始を存するなり、廣錄といふものは其實を現すなり。刊成る。記して以て引と爲す。」　大正十五年初夏　露伴學人識見

要　旨

一草一花と雖もみる人の教養と趣味によつてこれだけの興味と餘情を持つた文章が出來るものであるといふ事を知らしめたいと思ふ。

段　落

一、梅の精神あるにしも……云ふべくもあらずおぼえき。（一四〇頁二行目まで）

椿の花全體の筆者の感じ。

二、赤きもよし。……艶にしてよし。（一四一頁三行まで）

椿の中での、赤と絞咲きの花とについて。

三、乙女椿は……名はおぼえんもこちたし。（一四二頁一行まで）

其他の椿の種類について、

四、ただ紅きも……終りまで。

單瓣と複瓣の感じの相違について。

解　釋

【椿】　ツバキ。山茶、山茶屬の植物は日本、支那、印度及マライ諸島に產し、既知のものは凡そ二十餘種あり、其中我國には十種ばかり產す。五十年にして幹の高さ二丈、周圍一尺となり樹皮は灰白色又は淡褐色にして平滑なり、枝葉繁密なり、葉は楕圓形又は卵形にして鋭尖頂をなし、細鋸齒あり、質厚くして上面は光澤ありて深綠色、下面は淡綠色長さ二三寸なり、冬月より枝頭萠芽の側に花咲く。

長さ二三寸、六出にして無梗なり、花瓣は五枚乃至七枚あり。自生のものは紅色なり、厚くして稍楕圓形をなし基部は相連なりて平開せず。十餘枚の苞ありて相鱗次し漸く變化して萼となる。多雄蕊は其花絲の基部相連なりて白花の一筒となり、花瓣の基部に緊着す、其裏面に在る雄蕊は花絲或は相分離せり。子房は圓くして淡綠色をなし平滑なり、花柱は三本ありて白色なり。其落花するや花瓣は雄

蕊と共に脱落す。果實は圓くして果皮厚く綠色にして光澤あり。年を越えて成熟す、熟すれば暗褐色となり堅硬なり、內は三胞にして三箇の種子あり冬月果皮裂開して種子地に落つ、種子は大、果皮は黑褐色にして硬し。種子の互に相密接する所は區平にして、兩邊の稜あり、子葉は肥厚し、黃白色にして油多し。此樹は諸國山林に自生し、自生のものは其花一重咲きにして紅色なり、俗に「やぶつばき」又「やまつばき」といふ。我國にても此樹の葉を茶の如く飲料となす事あり。花は冬月より春にかけて群芳凋零の際、開花して嬌艶を呈し、美麗にして庭園の粧飾を資く。人家に多く栽培し又盆栽となしてこれを愛玩

す園藝的變種極めて多し、花形に大小あり。花瓣に單、複、千葉あり、花色に紅、白、濃淡或は紅白相雜るもの等ありて枚擧に遑あらず、「昔時は此花の品種も多くあらざりしが、寛永の頃より次第に變種多く出でて、八十餘種を生じ元祿八年江戸染井種樹家、三之丞の選みたる花壇地錦抄には二百六品を載せたり」又古今要覽には「今に至りては猶ほまた種類多くいできて、おほよそ四五百種にも及べり」といへり。百科による。

【鵯】　ヒヨドリ。（ひえどりの轉）燕雀類の鳥、形「つぐみ」に似、尾長く脚細し、頭上の羽は末端尖りて、相分離し、背部は蒼灰色、胸腹部は灰青色にして黑色の斑あり、性機敏にして飛翔巧なり。山地に於て營巢蕃殖し、秋季低地に下る。

【はららき】　はちらく（自動四）ばら〳〵になる。ぼろ〳〵す。崩れ散る。名義抄「壞、ハララク。ウグロモチ」

【翠葉瑯玕を展べ】　瑯玕ロウカン。碧玉に類する支那產の美石主に青色を呈し裝飾として用ひらる。廣辭。綠の葉が瑯玕の樣に美しく並んでゐる意。

【紅花珊瑚濕へる】　珊瑚サンゴ、珊瑚蟲の群體の中軸骨格、群體は塊狀若しくは樹皮狀をなし、脆硬なる外皮と堅硬なる中軸とより成る。其中軸は比較的太くして、石灰質より成り、甚だ堅固なり、外皮を剝ぎて裝飾用に供す、珊瑚の產出地は世界中其範圍甚だ狹小にして、其品質の優等なるは實に我國を第一とす。桃色珊瑚、赤珊瑚等の種類あり。廣辭

紅い花が珊瑚の濕つた樣に美しいとの意。

【茶壁】　チヤカベ。茶室の壁の意であらう。

【籠花生】　カゴハナイケ。

【小手の利きたる】　氣の利いた。

【床のものにあらず】　床生のものでない。

【陽炎】　カゲロウ、春のうらゝかなる日に、野邊などにちらちら立ち上る氣、水蒸氣多量に地上よりたち上り直ちに冷却して微細なる水滴となり、光線の反射によりてひら〳〵とひらめくなり、いとゆふ遊絲）。廣辭

【切禿】　キリカムロ。禿（カブロ）に同じ。幼

童の髪の末を揃へて切り、結ばずして垂らしおくこと。又その人、榮華物語峰月「かぶろにおはしまし〻折りは尼そぎゐたげにとこそは見奉りしか」。大國による。

【垂髪】　タレガミ。幼童などの、結び上げずして垂れたる髪。著聞三「長大の垂髪にて皮の沓をはきたる」大國による。原文「サゲガミ」と振假名あり。

【華鬘】　ケマン。（一）西域の婦女の首飾。（二）天人が頭上に戴ける華美なる髪飾。（三）佛前の戸張に添ふる裝飾の具。生花又は絲を組みて用ふれども、多くは金銀の造化を綴りて垂る。一説に、金銀の造花なるをば華鬘代といふと。大國による。もと印度にて生花の花かづらを貴賤男女の共に裝飾に用ひしものなりしが轉じて佛前を莊嚴する佛具となりたりといふ。廣辭。

【乙女椿】　山茶の園藝的變種の一つ、複瓣にして淡紅色なり。

【白玉】　白玉椿。山茶の變種、白い花の咲くもの。廣辭。

【わびすけ】　椿の變種の一つ。

【わび】　侘（一）わぶること。わびしきこと、思ひ煩ふこと。（二）閑居を樂しむこと。又その所。（三）茶道にて質素なる風趣。大國こゝでは（一）の意。

【花を記したる古書を】　原文「花傳綱目と云ふ書を」とある。

【こちたし】　言痛。事痛。（ことといたし）の約。（一）うるさし、くどし、らうがはし、煩はし。（二）ことごとし、仰山なり、すばらし、（三）甚だ多し。大國。こゝは（一）。

【單瓣】　ヒトヘ。

【雅味】　雅＝（イ）ただし。（ロ）詩の六義の一。（ハ）つねに、もとより。（ニ）みやびやか、けだかく、おくゆかしい。詳漢。みやびやかな味を云ふ。

【饒く】　オホクと原文振假名。

【複瓣】　ヤヘ。と原文振假名。

【野趣】　ヤシユ。田舍の趣き（野情）詳漢

鑑賞

露伴はかつて明治文壇に於て紅葉と共に其筆名をうたはれ、幾多の佳篇を殘して、既に文學史上の人物である上に、今尚健在で筆力益々盛んなのは當代の偉觀であつて、まさに國寶的存在だとまで讃へられてゐる。

「實際露伴氏はどのくらゐ物識りなのか、ちよつと深さが分らない。學者にして藝術家を兼ねてゐるので、譬へば歴史上の人物を論じ或は俳句の講釋などをしても、よく人情の機微を察して痒い所へ手の屆く樣な趣があり、眼前に情景を髣髴たらしめる。學者肌の人は何處となく冷酷なところがあるが、露伴氏はそれでゐてべらんめえ肌の江戸つ兒であり、熱情漢であるらしい。（畧）眞に日本的なる

ものでは世界に誇り得るものは當代にはまことに少い。蓋し露伴氏の作品こそは、支那へ持つて行つても西洋へ持つて行つても堂々と一流の列へ入り得るであらう」と谷崎潤一郎氏が云つてゐる。

漢文の素養の深い絢爛流麗な文章と、着想の雄大と、哲學的傾向を帶びた思想とは共に珍重するに足りるものである。此文に於ける俳味も亦味が深いと思はれる。

備考

「椿」の一篇の殆んど全部を採つたが、此終りの少しを省いたから參考の爲記しておく。

「俚歌あり曰

春のよい日に卿（オマヘ）と二人

『こゝはくれなゐ、かしこは白玉藪の椿が落ちて散る』

田舍路でもあるきたい」。

挿繪

【椿と小禽】（一四〇頁）堂本印象筆

鑑賞畫選（寶文館發行、昭和二年）の中より。

「堂本印象」本名三之助、明治二十四年十二月二十五日京都市に生れ、後京都市立繪畫專門學校に入つて其の日本畫部を卒業した。作品の主なるものは帝展第一回に「深草」同二回に「西遊記」「柘榴」の二點を出して好評を得、同三回に「調鞠圖」（特選）及び「夾山映雪」の二點を出品して、大に非凡なるを認められた。「訶梨帝母」は推薦となり、大正十三年帝展審査委員となる。（明治大正文藝百科人名辭書）

【露伴筆蹟】（一四一頁）大阪府女子專門學校國文研究室所藏

【椿之圖】　安田靫彦筆。

昭和四年大阪朝日新聞附錄畫。

「安田靫彦（ヤスダユキヒコ）」名は新三郎、明治十七年二月に生る。小堀鞆音の門に入り、後東京美術學校に入つた事がある。美術院には再興以來同人に列し重きをなしてゐる。（評議員）。作品に「豐太閤」（文展一回）「夢殿」（文展六回）「御產の禱」（院展一回）「項羽」（院展三回）等がある。

二二　夏の小曲

作者

【三木露風】　ミキロフウ。名は操、號は露風、一時羅馬の羅の字を取つて羅風と號したが、現時は復露風の號を用ひて居る。明治二十二年六月、兵庫縣揖保郡龍野町に生れた。備前閑谷黌に學び、早稲田大學文科に入り、後慶應義塾大學に轉じたが中途で退學した。嘗て雜誌「未來」を發刊し、又「牧神會」を組織した。今はトラピスト修道院の講師である。氏は詩話會から岐れた「新詩會」の一人で、北原白秋・日夏耿之助・西條八十・竹友藻風等と共に數へられてゐる。著に詩集「夏姫」「廢園」「寂しき曙」「白き手の獵人」「幻の田園」「蘆間の幻影」「信仰の曙」「青き樹かげ」「象徴詩集」「抒情小詩」「生と戀」「美學草案」、散文詩「詩歌の道」「修道院雜筆」等がある。

出所

【青き樹かげ】　一冊、大正十一年七月、東京新潮社發行。定價金六拾錢。「現代詩人叢書六」として「青き樹かげ」の書名で出されたもの。

目次のところに「歌ふことのできる歌及抒情詩」と標語を設け、青き樹かげ・圓かな月・古橋・白月・秋夜曲・同じ世に生きて・野茨・一つ星等六十一の題目が掲げられてゐる。（尤もその題名の中、「夏小曲」は更に三つの、「ながさき六曲」は更に六つの題名が設けられてゐる。）

本教科書に採つたのは右の「夏小曲」とある詩である。

本書の序文は次の通り。

今茲に收むる作品は主として歌ふことのできる詩及抒情詩である。今これを撰んだ主意は、現代に於ても或は何時の代に於ても歌唱に堪ふる詩はなほいつまでも必要でありその與ふるところは萬人の喜びであることを信ずるからである。かく言へば甚だ大仰に似たれど然らず、歌の意志は常に詩の本質と共に存する。本質より出でず、本質流出せず、ただ散漫に書き列ぬるを詩といはず。これ鶴也。おほかたの散文とたがはざるべし。故に余、茲に見るところありて拙作中より歌唱に適するもののみをえらぶ。其數六十八、内二三歌唱に適さざるものあらん、歌唱に適さざるともなほ讀誦には堪ふべし。この集中作曲せられし詩三十一篇あり、山田耕作、小松耕輔、本居長世、及タルシス修道士等諸友の手に成れり。記して序とす。（原文のまゝ）

要　旨

「かはせみ」と「つばめ」と「白鷺」とを各材として、夏の朝げしき、晝の趣、夕の風情を興趣深く歌つた小曲である。一曲づゝ味はつても趣があるが、三曲を合せて一體として味はつてみるところに、夏の爽かさが湧く。この夏の爽快さを享樂せしめると共に、小曲といふ一詩形についても指導して頂き度い。

段　落

短形の小曲であるから別に區分すべきでもなからう。

解　釋

【小曲】　近代詩の一形式を稱するので系統上新體詩から俗謠の性質を多く取入れて作り出された短詩である。多くは卽興的の感激を歌ひ、音樂的韻律を有するものである。生田春月・北原白秋・與謝野晶子・川路柳虹・西條八十・福田正夫・人見東明・竹久夢二、その他多くの詩人によつて作られてゐる。要するに端的な感激と音樂的快感の要求が詩人の心に絶えぬ限り、この後長く見らるべきものと思はれる。（兒山信一著「日本詩歌の體系」の說による）

まづ、文で云へば小品文であり、繪畫で云へば、一筆がきといつた趣のあるものといつてよからう。

【かはせみ】　川蟬・翡翠・魚狗。燕雀類に屬する鳥。形、雀より少しく大きく、頭と頰とは綠にして靑き斑あり。眼の邊は薄赤く、背はやゝ茶色にして翅は靑白し。嘴は長大にして尾・脚共に短し。常に水邊にありて水を潛り、小魚を捕ふ。かはせび、しようびん、かはすゞめ、えびとり等ともいふ。（言泉）。

【鳴くこゑも】　この下に「涼しや」を入れてみる。

【靑葉の靄】　靑葉をたちこめてゐた靄。

【明くるにはやし川の宿】　水邊の宿は、夜の明けるのが早い。

【夏來たりけり】　夏が來たわい。夏、燕が來たといふのでなく、夏が來たのであるの意。

「來たりけり」こゝは、カ行變格活用の動詞「來」の連用形に、時の完了の助動詞「たり」の連用形が接し、更に時の過去の助動詞から轉用される「けり」といふ感動の助動詞の終止形が結合したのである。「來たり」は、直に四段活用の連用形と見てもよいが、その時は「來り」と書くを普通とする。

（言海）「來る」の條下に、「來と助動詞のたりと合ひて、規則動詞第一類の變化に變ず。」とある。規則動詞第一類とは四段活用のことである。

【つばくらめ】　つばめに同じ。風雅集、春中

「つばくらめ簾の外に數多見えて、春日のどけみ人影もせず」。「つばくろ」ともいふ。大國。

【白き正午】　ひなかの眞晝時。日中のことを「白日」といふ。眞晝といふ感じが強く出てゐる。

【白鷺】　シラサギ、羽色純白なる鷺の總稱。「鷺」は涉禽類の鳥、形鶴に似る、嘴は角質にして長く、頸脚もまた長し、眼の周圍は羽毛なくして裸出するを常とする。巢を樹上に構へ、魚類などを捕食す。廣辭。

【をぐらき、ふかき】「をぐらき森、ふかき森」の上の森を省いた形。「をぐらく・ふかき」との差異は注意しておく必要があらう。

【隱り沼】　コモリヌ。草などに隱れて見えぬ沼。かくれぬ。古語。萬葉「はにやすの池の堤のこもりぬのゆくへをしらに舍人はまどふ」。續古今冬「冬くればすさの入江のこもりぬも、風寒からしつららゐにけり」。大國・言海、隱江・隱石などみなこの類。「ぬ」は「ぬま」の古語。言海。

【河骨】　カウホネ。川骨、蓮蓬草ともかく。「かはほね」の音便。睡蓮科に屬する多年生草本。池中などに生ず。葉は芋に似て細長く、厚し。夏秋の交、莖を水上に出して、黃色なる五瓣の花を開く。形梅花に似て大なり。しんくれなゐ、こつすゐ。かど。言海。

【ほのかに】　河骨の花がほのかに見えるのである。そのほのかに見える（木がくれ沼の河骨ではつきり見えぬ）河骨の花が、風の來たためにゆら〳〵とうごくのである。「ほのかにゆらぐ」と解すべきでない。

【ゆらぐ】　うごく。ゆるぐ。

鑑賞

かはせみ

時は早朝で、場所は川べりである。その明け方の川岸の光景が、それからそれへと味はれる。つやつやとした川せみの濡れた羽、その鳴き聲、いかにも涼しい氣持がする。川の宿での眺としてもよろしいし、青葉の靄の霧れてゆく中に、川べの宿が繪のやうに浮出して來る景色と見てもよい。どこまでも夏の夜明のおぼろな爽かな感じを與へる詩である。第二句「鳴く聲も」とかう後に添へた所は調の上からもおもしろい。

つばめ

時は眞晝、處は時計臺のある街中である。つばめの飛交ふにふさはしい人家の甍、すうつ〳〵と輕快に身をひるがへして飛ぶ姿を見ると、全く「夏來たりけり」の感が深い。「白き正午」といつた所、眞晝といふ感がつよく出てゐる。

白　鷺

時は夕ぐれ、場所は深い森の隱り沼である。いかにも幽邃の趣が表はれ、かの川畔の涼しさとは自ら異に、亦人を涼殺せしめるものがある。特にこの曲ではをぐらき、もり、こもり、しらさき、ゆらぐ、ゆふぐれと良行音が連續してゐたり、「沼になく」と奈行音があり、かうほねのはなほのかにといふ樣に波行音がつゞいて、その音調までも幽邃の響がある。

春の草

萌えよ萌えよ春の草　小川の水は温みたり　長き眠の冬の土　萌えよ萌えよ春の草
生ひよ生ひよ野邊の草　日は晴れ空は薄霞み　いつしか覺めてよみがへり　生ひよ生ひよ野邊の草
あたらし夢をはぐくみて　鳩や鶏や鶯や　芽をふく千草八千ぐさの　綠の褥しきつらね
春の生命をのばせかし　さやかにあそぶ彌生月　生の力の不思議さよ　若き生命を飾れかし
（青き樹かげ）

二三　富士八湖

作者　下村宏。號は海南。明治八年五月十一日和歌山市鷲籠町に生る。明治三十一年東京帝國大學政治科出身。法學博士。嘗て臺灣總督府民政長官たり、今は大阪朝日新聞社の專務取締役である。歌を作り「歌よみの父の子として文書に親しみながら歌に入る機緣うすく、年四十一歳聖路加病院の一室に仰臥し徒然のあまり初めて數十首を作る。卽ち佐々木博士の叱正を求め、以來歌悅に浸ること十有五年今日に及ぶ」といふ。歌集「芭蕉の葉蔭」「天地」「歐洲より故國を」その他の著あり。

出所　「新聞に入りて」大正十四年日本評論社發行。定價三圓。

自序「本篇は隨筆なり、歌集なり、論策なり、日記帳なり、紀行文なり、世を嗤ふ冷語なり、國を憂ふる熱調なり、いづれも新聞の人となりて三年有餘の間に獲たるところ。」とある樣に樣々なものが載

要旨

せられてゐる。

富嶽の秀峰と、其をかこむ、八湖の其々の幽景は一讀俗界を離れてすがすがしい氣持に誘はれる、かうした旅行記をよむことは又無駄なことでなからうと思はれる。

段落

第一節。船は湖心に……松並木を望む（一四四頁六行まで）

河口湖を通つて長濱に向ふまで。

第二節。長濱に上陸して……根場の富士見茶屋に休む、（一四五頁四行まで）

長濱上陸後再び西湖の濱より船に乘り、根場につく。

第三節。これから精進湖迄は……終まで。

相場から青木が原に、又精進湖畔の一夜に得た境致。

解釋

【富士】　富士山。駿河甲斐二國に跨る本邦第一の名山にして、越後西部より伊豆七島に亙りて本邦を横斷する一大火山脈の中央に在る死火山なり。西は毛無山脈を以て限り、北は御坂山脈に接し、東は足柄山脈を界とし、南は愛鷹山を擁して駿河灣に臨む。形狀端正、四望其觀を等うし、絶頂常に雪を戴く。盤周約四十里、海拔三七七八米、十三國より望むを得べし。絶頂には內院、小內院と稱する噴火坑あり、又岩石所々に隆起し、寄生火山を成すをみる。其主なるを寶永山、小富士、小御嶽の三とす。（帝國地名）による。

【富士八湖】　フジハツコ。富士山の麓に散在せる八箇の湖、卽普通に、浮島沼、蘆湖、川口湖、山中湖、西湖、本栖湖、精進湖、四尾連湖。廣辭。

山麓に湖沼多し。甲斐の川口、山中、西、本栖、精進、四尾連、明見の七湖及駿河の須戸湖を合せて富士八湖といふ。（帝國地名）

【湖心】　コシン。湖の眞中。

【逆富士】　水に逆樣に映つた富士。

【日本武尊】　御名は小碓尊、また日本童男とも稱す。景行天皇の皇子。母は皇后稻目大郎姫。景行天皇の二十七年、熊襲の反するや、勅を奉じて西征し、熊襲の國に至り、形勢地理を察し、遂に女裝して魁帥川上梟帥の營に入り之を刺す、梟帥皇子の武勇を稱し日本武尊の號を上る。此より世に日本武尊と稱すといへり。後更に東夷叛するに及び東征の途に上り、此を平げ、信濃、越の地方の皇化に從はざりし故西下し、近江膽吹山の賊を征したりしが山中に病を得、伊勢に歸り能褒野に薨

ず。年三十、其地に葬る國史による。

【長濱】　ナガハマ。甲斐國南都留郡の村。人口五六八、（帝國地名）

【西湖】　ニシノウミ。甲斐國南八代郡の南偏に在る湖。土俗セイコとも呼ぶ。富士八湖の一にして周圍三里十八町、南は富士の裾野に續けり。もと精進湖と一水をなせしが貞觀六年富士噴火し、燒石の爲に埋められて中斷せりといふ。（帝國地名）

【蓊鬱】　ヲウウツ。草木の盛なる貌。左思、蜀都賦「松柏―ニ―於山峯」＝蓊蔚。轉じて雲などの盛なる貌。字源

【際涯】　サイガイ。はて、かぎり＝際限。字源。

【大樹海】　青木が原の事。

【熔岩】　ヨウガン。(Lava)。火山の噴出又は破裂に際し、地中に於て地熱のために燒けただれたる岩石の流出するもの、非常の高熱を生じ灼灼たる光輝を放ちて流出すれど、後漸次凝固して普通に堅硬なる岩石となる。廣辭

【精進湖】　ショウジコ。甲斐國西八代郡の東偏、富士山の西北麓に在る湖。富士八湖の一にして、裾野と外郭との間なる停溜池なり。周圍二里一六町。もと本栖湖、西湖と一水を成し、石花湖といひしが、貞觀六年富士山燒の時熔岩の爲に中斷せられしなりといふ。湖水の決口を見ず。俗說には伏流となりて芦川に入るといふ。（帝國地名）

【烏帽子ヶ嶽】　は湖畔から九十九折の道二十一町の登り海拔三千六百尺。精進パノラマと稱する眺望絕佳の地である。（旅行案內）

【本栖】　本栖湖。甲斐國西八代郡に在る湖。富士八湖の一にして、其西北なる裾野と外郭との間なる停溜池なり。周圍三里五町。湖東を本栖組といひ、中道の驛路なり。此湖もとは廣大にして、精進湖、西湖と一水なりしが貞觀六年富士噴火の時熔岩の爲に中斷せられて三湖となり、且つ其面積に埋められたりといふ。鯉鮒の類を產す。（帝國地名）

【河口湖】　甲斐國南都留郡に在る湖、富士裾野の北に在り。周圍四里二六町。富士八湖中の最大湖とす。東、北、西三面山を環らし、裾野を隔てゝ富士山を望む。湖中に、鵜島あり。湖緣は乳ヶ崎、產屋ヶ崎、胞ヶ崎等の磐石斗出し小岬角をなす。此湖昔は東に決し其水桂川に合せしかば河口の名ありしが、貞觀六年富士噴火し、熔岩河流を埋塞し、今日の狀を成せりといふ。中央鵜島四周は水淺く、東西の岸畔に至れば急に深く、湖底恰も土鍋の如しといふ。最低水の時深四三尺內外、海面上の高二七三九尺。近年湖の東隅なる淺川山を開鑿し、疏水するの企あり。（帝國地名）

【下瞰】　カカン。下を見おろす。劇談錄「樓櫓可ニ以―ニ―城中」＝下視。俯瞰。字源。

【三坂峠】　御坂嶺、甲斐國東八代、南都留二

郡の界にある駿河東街道の山路。海拔五〇九五尺。登降約三里、極めて險阻なり。嶺上より望めば富士山正面に聳えて、影を河口湖に浮べ、風景絶佳なり。富士見三景の一とす。

（中略）　此嶺は北は八丁嶺、笹子嶺となりて都留、山梨の郡界なる山脈となり、南に回りて毛無山、天子嶽に連る。地學者はこの一帶を御坂山脈と呼び、關東山系の地盤笹子嶺より分離せるものにして、輝綠岩、御坂凝灰岩層より成れりとす。（帝國地名）。

【大室山】　オホムロヤマ。相模國津久井郡足柄上郡及甲斐國南都留郡に跨る山。海拔四七四二尺。一に權現山といふ。（帝國地名）

鑑賞

【楢】　ナラ。（柞、柏）。殼斗科の落葉喬木、各地山野に自生す、幹高六七丈周圍六七尺に達す、樹皮は赭黑色にして帶黃綠白色の斑點あり、始め平滑にして後に淺き縱裂をなす、葉は長倒卵形にして長さ四五寸、緣邊に齒頭の內向せる粗鋸齒を有す、上面は深綠色にして下面に灰白色の細毛密生す、春日花を開く、葇夷花序は絲狀にして懸垂す、果實は楕圓形にして鱗片細小なる殼斗內に包まれ十月頃成熟す、果肉は食用に樹皮は染料に供せられ、木材は薪炭又は香蕈（シヒタケ）を作る料に用ひられる。（廣辭）。

挿繪

便宜上次の課と一緒にした。參照されたい。

「富嶽」（一四六頁）久保田金僊筆。文展第十二回出品。原畫名「夕づく日」

久保田金僊。名は滿昌。明治八年京都市に生る。幸野楳嶺、鹽川派の畫風を修め後京都畫學校に入り卒業後上京して父米僊に學び諸所の展覽會博覽會で受賞し、日本美術協會、日本畫會、選畫會等の會員となり、文展へは第九回に「庭の一隅」を出品した。尙松坂屋呉服店意匠顧問となる。

（明治大正文學美術人名辭書）

英大小物語

メリヤスを英大小と書く、大きく分けると書いてホホイタと讀む、十八女をサカリと讀む地名がある。其の他常識で讀めない漢字はいくらも使用されて居る。普讀にしても支那では既に死滅したもの迄も御丁寧に保存されて居る、行燈（アンドン）孝行（カウカウ）行狀（ギヤウジヤウ）の類、和歌山の和は和泉ではイ、大和ではトと讀む。此の複雜極まる漢字使用が我が邦の敎育を遲らせ、知力、學問を阻害することは夥しい。漢字の大擔なる整理は我が邦の急務である。

――下村宏、昭和五、八、ラヂオ放送大要――

二四　精進より身延へ

作者

【杉村楚人冠】スギムラソジンクワン。名は廣太郎。明治五年七月に生る。夙に英吉利法律學校先進學院に學び、同二十二年米國公使館員となり、同三十六年東京朝日新聞に入り現に同社監査役兼編輯顧問にして記事審査部長たり、楚人冠と號し大英遊記、へちまのかは、半球周遊其他著書尠からず。（人事興信錄）

出所

前課に同じ。

要旨

前課と接續しての紀行文として擧げた。周圍の風景の妙趣と作者の筆のおもしろさが解り、これらの文章を熟讀する事によつて、各自旅行の印象記の模範とし度い。

段落

一、西湖から……人口を加へた庭のやうに見える（一四八頁九行まで）
　　青木ヶ原のこと。
一、息のつまるやうな……海南博士がいふ（一五〇頁十一行まで）
　　精進ホテルに落ちつくまで。
一、脚下に……指顧の間にある（一五三頁三行まで）
　　烏帽子ヶ岳よりの眺望、下山。
一、精進から……終まで
　　精進より身延街道を通り下部に着き、更に下山（シモヤマ）に到るまで。

解釋

【斧鉞】ファヅ。をのとまさかりと、金斧と黄鉞と。連文釋義「戚爲レ斧、揚爲レ鉞、斧小ニ于鉞一、鉞大ニ于斧一」。轉じて、重刑の義。天子が出征の大將に授くる刑具。＝鈇鉞。字源。

【霧】モヤ。空中にたちふさぐ煙又は霧。廣辭。

【珊瑚礁】サンゴショウ。（Coralreefs）清澄

なる暖海に棲息せる珊瑚蟲の石灰質骨格の推積によりて成れる岩礁、棘皮動物・軟體動物・鮮蟲類・甲殼類の遺體も混在せり、形狀と位置とによりて、裙礁・堡礁・環礁等に區別せらる。廣辭。

【邊鄙】　ヘンピ。かたゐなか。左、襄四「――不聳＝邊邑。字源。

【料簡】　リョウケン。了簡。(一)かんがへ、思案。(二)ゝゝろ、所存。(三)ゆるすこと、宥恕。廣辭。

【輕井澤】　カルヰザワ。(長野)信濃國北佐久郡東長倉村の大字。碓井峠の西麓にして鐵道信越線の停車場あり。高崎より廿五哩、長野へ四十六哩。小村落なれども、土地高く(海拔三八〇〇尺)空氣清きを以て內外人の避暑するもの多し。郵便局、警察分署等あり。(地名)

【溫泉嶽】　ウンゼンダケ。肥前國南高來郡。(島原半島)に蟠る活火山。阿蘇噴火脈の西端に位し、前山・普賢岳・妙見山・矢岳・高岩岳・吾妻山等の高嶺攢立して鋸齒狀を成す。其中央には南北約七町、東西約三町の凹地(海拔六八〇尺)ありて、大地獄・小地獄の二所に溫泉及硫黃噴出す。(後畧)。地名。

【三津】　ミト。(靜岡)伊豆國田方郡內浦村の大字。內浦に臨める一小港にして、廻船二十餘艘を容るべしといふ。城址あり城山といふ。康安年中畠山道誓の築ける三城の一なり。地名。

【瀟洒】　ショウシヤ。あかぬけのしたること。さつぱりしたること。洒脫して淡泊なること。廣辭。

【巒氣】　ランキ。巒は、まるきみね(圓峯)字源。山にこもる大氣。

【爽涼】　サウリヤウ。さわやかにして涼し。

【船津】　フナツ。甲斐國南都留郡の村、川口湖の東南隅に臨み駿河東路に當り、吉田山中の諸驛に通ず。河口驛の南とす。德川時代此所に番所を置きたり、人口二五三六。地名。

【搖曳す】　エウエイ。ゆら〳〵と動かしひく貌。鮑照詩「飄戾長風振――高帆擧。字源。

【攝政宮】　今上陛下の御事。「攝政」天皇御幼年の時、代りて萬機の政を總べ掌る職。正官にあらず、大臣の兼任する例とす。此職は應神天皇未だ幼年の時、御母神功皇后が攝政せられしを嚆矢とす。後に推古天皇の御代に聖德太子が攝政し、齊明天皇の御代に中大兄皇子攝政せしが如き、古は皆皇后若くは皇子の攝政たりし例なりき。然るに淸和天皇九歲にして卽位あり、外祖藤原良房攝政となる、是れ臣下攝政の始にて、爾後は自ら職名となつて、藤氏一門の職となりき(有職故實)其後明治の革新に新制をしかれ、憲法、皇室典範に規定が設けられた。卽大正十年十一月廿五日、大正天皇久しきに亘る御不例の爲、皇太子攝政の御大任に就かせられたるによりかく

申上げた。

【行啓】　ギヤウケイ。皇后、皇太子等のおでまし。啓はさきばらひ。字源。

【强力】　ガウリキ。剛力。(一)つよきちから。(二)修驗者の連れたる下男。(三)登山するものゝ雇ふ人足。廣辭。

【翠微】　スイビ。山の八合目。爾雅「山未レ及レ上、曰二――一」。山のみどりのもや。杜甫詩「衫稾二――一潤、馬銜二青草一」晰字源。

【指顧】　シコ。指さしながらふりむくこと。廣辭。近距離のこと。大國

【桔梗】　キキヤウ。桔梗科の多年生草本、山地に自生し、又觀賞用として庭園に栽培せらる。莖は直立し、高さ三四尺、葉は互生又は對生若しくは輪生し、楕圓形又は披針形を呈し尖頭にして鋸齒を有す、夏秋の候、五瓣の花を開く、花は大形にして紫色若しくは白色なり。きちかう　廣辭。

【古關】　甲斐國西八代郡の村。本栖湖と富士川との中間にして、富士山輪郭の一部に居る。此地の方外院に子安觀音を安置す。賽者多し。人口二一〇三。(帝國)

【富里】　トミサト。甲斐國西八代郡の村。人口三六一一。(帝國)

【下部】　シモベ。甲斐國西八代郡富里村の字、毛無山の西麗にして鑛泉湧出す。溫度九一度、土地交通不便なれども、金創打撲傷に効ありとて、來浴する者少からず。(帝國)

【信玄】　晴信(武田)信虎の長子。小字勝千代。信玄と號す。上杉謙信と川中島に戰ふ。天正元年四月十二日歿す。法名機山。年五十三。(日本人名辭典)

【沃度】　ヨード。鹽素に似たる一元素＝沃素。字源。

【下山】　シモヤマ。甲斐國南巨摩郡の村。身延山の東北麓にして駿河街道の一小驛なり。切石驛より一里二三町、富士川の航程、鰍澤より四里とす。此地は中世甲斐源氏の一流下山氏居り、戰國の時武田氏の一族穴山氏之に據れり。(帝國)

【鮎】　アユ。喉鰾類の魚、體軀は多少側扁なり、體色は背部蒼黑にして腹部は黃白、吻頭稍淡紅色を帶ぶ。躰長大なるものは一尺に達す、我國にては全國の河川概ね產せざるはなく、殊に西南地方のものを大なりとす、河中に發生して一旦海に入り、四五月頃より河川に溯る、性敏捷にしてよく晶洌なる急湍に游泳す、肉甚だ美味なり。廣辭

鑑賞

兩課とも、苦のない旅の餘裕と、おもしろさと、知らず〳〵の中に二人の性格の相違や豊かな趣味が如實に出てゐる。文章も文筆になれた人らしく無理がなく、敢て名文と云ふのではないが別段よい文章を書かうとした樣な心組がないだけ却つて素直に受取れるところが多いと思ふ。漢語の多いのが

二四　精進より身延へ

目につくが相當の素養と年功のある作者達には苦もなく出てしまふのだらう。

一體紀行文は、下手な案内記風になつたり、自分一人の覺え書や日記體になりて第三者が讀んで興味を感ずるものは少いのだが此等はそこを脱してゐるだけでもよいものだと思はれる。

旅の旅

旅は趣味のあるものである。併し旅は同時に不自由のものであり、いくらか危險の伴ふものであり、心細いものである。併し旅に伴ふ不自由、危險、心細い點が、やがて趣味を發する源となる。今日のやうに世の中が便利になつて、萬事萬端整ひ、何百里の道程も一日二日で行かれ、そして危險もなく、定まつた時刻に正確に目的地へ達し得るやうになつては、却つて趣味が薄らぐ觀がある。今の旅行は丸で東京市中を歩くのを引伸ばしたやうなものである。氣樂は氣樂であるが、どうも趣味が薄いやうに思はれる。全體興味を發するには種々の原因がある。思ひ掛けない事、換言すれば常經を外れたことに多く興味を發するものである。不自由、危險、困難といふことは其即時には中々の苦痛で、一寸興味はないやうに思はれるが、併し時日を經てから考へると、其時の苦痛が他日興味を惹起す原因となるものである。今日のやうな便利な旅では斯樣な苦痛も困難もない。後日回顧しても興味を喚ぶの場合が乏しい。

――市島春城、隨筆春城六種――

二五　水國の秋

作者

【德富蘆花】　名は健次郎。蘇峰の弟、明治元年十月熊本に生れた。京都同志社に入つて學んだが半途退學して上京し、「國民の友」兄蘇峰の創刊した雜誌）誌上に飜譯隨筆等を公にした。氏は最も自然描寫に長じ「青山白雲」、「自然と人生」「青蘆集」等を書いた。後小說「不如歸」を國民新聞に連載し、明治三十三年之を一冊として出版するや、稱讃の聲雨の如く蘆花の名之より天下に普くなつた。つゞいて「思出の記」「黑潮」等を出し名ます〳〵揚つた。氏は熱心なトルストイアンで三十九年聖地エルサレムを經て中央露西亞ヤスナヤポリヤナに杜翁を訪ひ、こゝに寓すること十有三日、具さに肝膽を披瀝して歸つた「順禮紀行」はこの時の紀行文である。後杜翁を學んで肉食を廢し菜食主義を標榜し、東京府下千歲村に卜居し田園生活をなし、氣の向く時に筆を執つた。「寄生木」、「みゝずのたはごと」「黑い眼と茶色の眼」「死の蔭に」「新春」「日本から日本へ」、「竹崎順子」等の著がある。最近著に其

の自叙傳的の小說「富士」の第一第二卷を著したがともかくその代表作は「不如歸」であらう。「自然と人生」「青山白雲」「青蘆集」などの時代は、漢文の造句法を根抵として歐文風の表現を加味した。簡潔明朗の一種淸新な文體で、頗る當時の青年に喜ばれ、模倣された。田園に退いて後の「みゝずのたはごと」になると作風一變し、平淡の裡に無限の妙味を見せるやうになつた。

蘆花は前半生の號で、後はすてゝ用ひず、本名を用ひた。

久しく心臟と腎臟を病み、伊香保に轉地療養をしてゐたが、昭和二年九月十八日遂にその客舍で歿した。享年六十。

出所　【青山白雲】セイザンハクウン。一冊。明治三十一年三月、民友社發行。氏の壯年時代に於ける小品隨筆を集めたもの。

要旨　孟秋の節、利根川畔の息栖に一泊し、利根川を遡つて潮來に至る舟行の途中の景物を寫し出したものである。洋々たる利根の大江、眞菰の中に菖蒲花さくと謠はれた水鄕潮來、想像するだに氣澄み神往く思がする。音に聞えたこの歌枕を知らしめると共に、一面淸新の感を與へ透明澄徹の氣分を味はしめ度い。

段落

一、眼さめて戸を開けば……網を載せて出づる舟あり。（一五六頁六行まで）

二、朝餐の膳に向へば……舟賃は三十錢なり。（一五六頁終行まで）

三、小春の日和麗かに晴れて……終りまで。

舟行、潮來に至る途上の情景。

1、息栖附近から賀村に至るまでの情景。（一五八頁六行まで）

2、賀村、北浦の口附近。（一六〇頁三行まで）

3、大崎の鼻、十六島附近の情景並に地理の說明。（一七四頁四行まで）

4、北利根に入りてより。（一六二頁六行まで）

5、潮來着、宿及び潮來の感じ。（終まで）

解釋

【利根の長江】　利根川。上野の西北文珠山に源を發し、南流して吾妻川・神流川・渡良瀬川・鬼怒川等の大支流を併せ、其の長大にして而も流域の廣き、本邦稀に見るの大河なり。從つて運輸交通の便を與ふること頗る多く、汽船の上下頻繁にして、霞ケ浦・北浦其他江戸川等と連絡し、實に其舟楫の便本邦第一なり。世之を稱して「坂東太郎」と呼ぶ。（日本地理集成）。

【息栖宮】　オキスノミヤ。茨城縣鹿島郡中島村にあり。住吉三神、底筒男、中筒男、表筒男の命を祀る。息栖は沖洲の義で、浪逆潟と利根川との會湊地點である。萬葉集に「なつそびく海上潟のおきつ洲に船はとどめむ小夜ふけにけり」とあるもこゝである。

【小見川】　ヲミガハ。千葉縣香取郡にある町。利根川の西岸に瀕し、黒部川、町を貫流して利根川に入る。銚子街道の一驛にして郡内佐原に亞げる地なり。（太田氏帝國地名辭典）。

【猶蒼き朝霧に睡りつ】　ナホアヲきアサギリにネムりつ。まだ青みを帶びた朝霧の中にひつそり眠つてをるやうである。「猶」は眠りつにかゝる。

【向岸】　カウガン。訓讀ではムカヒギシともムカウギシとも讀む。

【川づら】　（一）川邊。川のほとり。かはばた。源氏松風「これは川づらに、えもいはぬ松かげに、何のいたはりもなく建てたる寢殿のことそぎたるさまも」（二）川のおもて。大國。こゝは（二）

【眼を遮る】　マナコをサヘギる。

【心も澄むばかりなり】　心までも澄みきつて來るほどである。

【藁屑】　ワラクヅ。藁・藁・藁・藁は同字。大國。

【朝霜】　アサシモ。朝方、置きたる霜。大國。

【水の面】　ミヅのオモ。

【磨澄ます】　トギスます。刄物又は鏡などを研ぎて、すこしもくもりなきやうにす。廣辭。

【閃く】　ヒラメく。（一）光などきらめく。ぴかぴかと光る。（二）旗など風に飜る。大國。「きらめく」は、（一）きらきらとす。光りかがやく、ぴかぴかす。（三）盛んに飾りたつ。はでやかに見ゆ。（三）盛んにもてなす。大國。大國・言泉・廣辭は、「きらめく」には「煌」の字を掲げ、「ひらめく」には「閃」の字を掲げてゐる。なほ大字・字源には「閃」にひらめくの訓を示してゐるが、「煌」には、ひらめく・きらめく何れの訓をも示してゐない。こゝは「きらめく」と讀んでも差支はないであらう。

【三々五々】　サンサンゴゴ。（三五三五の義。平凡平凡を平々凡々といふ類。）（一）人の、三人、五人づつ續いて道を行くこと。（二）彼處此處に散在するさま。言泉。こゝは一。大國には右の（二）だけ掲げて、李白の「岸上誰

家遊治郎、三三五五映二垂楊一」の詩句を引用してあるが、我が國現今では右の(一)の意に使ふことが多い。

「三五」は、(一)こゝに三つかしこに五つと、まばらに存在すること。三三五五。(二)卿三人と大夫五人と。(三)三皇と五帝と。(四)十五夜。(五)〔風俗通に、『琵琶長三尺五寸』とあるに本づくならんといふ〕琵琶の異稱。(六)〔佛〕唯識の法相なる三性と五法と。〔言海〕。

【嗽ぐ】　クチスヽぐ。又、訛つて「クチソヽぐ」ともいふ。漱とも書く。

「漱」は、音シウ・シュ　ソウ・ス。あらふ、そゝぐ、口そゝぐ、うがひす、かむ、うがひ。

「嗽」は、(一)音ソク、又、サク。すふ。(二)音ソウ・ス。せき、せく、しはぶき、しはぶく。(三)音シウ・シュ。くちそゝぐ、口を盪ふ、漱に通ず。〔大字〕

【家鴨】　アヒル。〔言海・大國〕等は鶩の字を掲げてゐる。〔廣辭〕には家鴨の字も載つてゐる。〔言海〕に、「足廣(アヒロ)の轉、みづかき廣し。」とある。鳧(アガモ)の馴養に依りて變化せるもの。其の種類甚だ多けれども、主なるものは、るーあん・あいるすばりー・北京鶩・廣東鶩等なり。普通は鷄をして孵化せしむ。その日數は、廿八日乃至卅日。雛は、二箇月にて母鳥と同じ大きさになり、二箇月半にて食用に供するを得。性甚だ多食にて、蟹・田螺等の動物質を好む。

あひ、あひろ。〔大國〕。

【刮々と】　クックッと。刮の字音を借りて、家鴨の鳴聲を寫したのである。

【凛として】　リンとして。するどく身にしむさま。りりしく。いさましく。凛然。

【朝餐】　アサゲ。

【膾】　ナマス。(一)料理の名、古昔は魚肉を細く切りたるものをいひ、現今は細く切りたる魚肉を酢に和したるものをいふ。(二)料理の名、大根・胡蘿蔔などを細く切りて、酢醬油に浸したるもの。〔廣辭〕。こゝは(一)。

【潮來】　イタコ。茨城縣行方(ナメカタ)郡。北利根の流を南に控へた低地で、北に稻荷山を負うた市街。「いたこ出島のあやめ草君に刈らせてわれさゝぐ」の潮來節で著名な處。

【僦ふ】　ヤトふ。雇ふ。

【小春】　コハル。冬の初め、暖和にして春に似たる時の稱。卽ち陰曆十月の異名。〔言海〕。

【日和】　ヒヨリ。日寄の義にて、日の方の意と云。晴れて和(ナ)ぎたる空合。〔言海〕。

【睡を思はしむ】　ねむたいやうな感じをさせる。

【蘆】　アシ。又、ヨシ。葦とも書く。〔大國〕。

【中洲】　ナカス。川中などにある洲　〔大國〕。

【搖櫓し】　エウロし。ろをうごかし舟をやる。徐鈺詩「搖レ櫓過レ江遲」。かいをゆり動かして船をやることを「搖櫂(エウタク)」といふ。以上〔字源〕。

【水村】　水邊の村。水鄉。杜牧詩「水村山郭酒旗風」。水郭ともいふ。字源

【茅舍】　バウシヤ。かやぶきの家。己の家の謙稱にも用ふ。茅屋。

【舟脚】　フナアシ。(一)船の進行。(二)船の底の水に入る程合。吃水。廣辭。こゝは(一)。

【搖ぎて】　ユルぎて、又ユラぎて。うごいて。ふるひ動いて。ゆら〳〵して。言海。廣辭。

【蘆影・柵影・人影・舟影】　アシカゲ・サクカゲ・ヒトカゲ・フナカゲ。

【一村林】　ヒトムラバヤシ。「村」は群。一叢茂つた林。

【鰕】　蝦とも海老とも書く。大國。

【さわ〳〵】　(一)物の相觸れて鳴る音などにいふ語。颯然。(二)騷ぐ音。騷然。言海。こゝは(一)。

【圓筒形の竹籠】　筒と稱する漁具のこと。

【そを繩もて列ね、竿を立てたるを】　それを(竹籠樣のもの)繩でつづけつないで、竹を立ててとめてあるのを。

【さざめく】　(一)聲立てゝさわぐ。言ひのゝしる。さゝく。ざんざめく。(二)さわがしき音す。騷々しくあり。大國。「さゝめく」は聲低く言ふ。さゝやく。耳語す。大國。

【賀村】　カムラ。常陸國鹿島郡中島村の大字にて、息栖の北半里、相接して筒井・平泉の大字あり。地名。

【三叉】　ミツマタ。三方に分かれ出ること。

【佐原】　サワラと發音。(太田氏帝國地名辭典)。

【蒲】　ガマ。池澤に生ず。葉厚くして叢生し、長さ三四尺幅五六分。夏日、花莖を抽き七八寸の矛形の花穗を着く。これを「かまぼこ」といふ。廣辭。

【流砂】　リウサ。又、リウシヤ。(一)水に運搬せられたる砂。(二)おほすなはら。沙漠。廣辭。こゝは(一)

【暗洲】　アンシウ。水中にかくれてゐる洲。「洲」は土砂の堆積して水面に現れ出たもの。廣辭

【摩す】　マす。なでる。こする。する。

【魚鰕】　ギョカ。うをとゑびと。又、魚類。大國。こゝは魚類。

【欵乃】　アイダイ。又、アイナイ。舟に棹して相應ずる聲。又、艪のきしる聲。轉じて船歌。按ずるに三體詩注、楚地の人讀んで襖靄(アウアイ)とすと。款乃は誤用。大字。但し大字の讀方の處でアイナイとすべきをアイアイとしてあるのは誤植である。

「欵」は欵、又は款の俗字。大字。即ち、正字としては欸乃と書くのである。「款」は音クワン、まこと・愛づ・忠誠・委曲　條項・至る・留る・しるす・きざむ・あな等の諸義がある。「欸」は(一)音アイ。そしる。しかり。歎く聲。あゝ。(二)音イ・アイ。然りと答ふる聲。(三)

カイ・アイ。怒る聲。

【絃】　フナバタ。フナベリ。船の邊。大字。

【ほとほと】（一）戸を叩く音。（二）斧にて伐る音。廣辭。こゝは（一）

【十六島】　ジフロクシマ。下總國香取郡・常陸國稻敷郡に亘れる地名。今、新島村・十餘島村・本新島村といふ。利根川中流に生じたる堆洲にて、古は此の附近直に霞浦に接せりといふ。鯉を名産とす。（太田氏帝國地名辭典）。

【魚籃】　ギョラン。魚を入れるかご。

【物見櫓】　モノミヤグラ。遠くまで見通す爲に設けた高い櫓。

【鮭の見張】　サケのミハリ。鮭の群をなして

來るから、その來るや水の色までかはるといふ。漁夫は櫓を作つて其の上から見張りしてゐてその群が來ることを知るのである。「鮭」をシヤケといふはサケの訛り。大國。

【溜】　タマリ。水たまり。

【措きて】　さしおいて。ほつておいて。

【面】　オモテ。顏。

【簖柵】　エビヤライ。水中に竹を立てゝ並べて柵を作り、迷路を設けて蝦を一箇所に集め、容易に漁獲するための設備。簀立などいふ類に屬する。「簀立」は海中に簀を立て置き、中に入りたる魚の干潮の時に逃げおくれたるを捕ふる裝置。

【悠悠】　イウイウ。（一）いそがざるさま。

（二）ゆるやかなるさま。（三）時久しきさま。（四）はるかにしてかぎりなきさま　廣辭　こことは（二）。

【角菱】　カクビシ。宿屋の名。

【粉壁】　フンペキ。しらかべ。白壁。大國。

【瓦鱗】　グワリン。魚の鱗のやうに瓦を葺いた屋根。

【參差】　シンシ。（一）高下相齊しからざるさま。たかひく。（二）互に相交はるさま。たがひちがひ。廣辭。こゝは高く低く入り亂れたこと。

鑑賞

水村の生活がこれからまさに始まらうとする朝の光景から、やがて次第に動き始める情景を叙し、發端すでに水鄕氣分をそそる。次いで蘆葦をわけて進む舟行や、兩岸の風色、水に活きてゐる漁夫の生活、すべて躍如として眼前にあるの想あらしめる。恰も水彩畫を見るの感がある。寫生文に於ては作者はさすがに獨特の筆を持ち、やはり他の追隨を許さぬ所がある。

十六島の一節は轉じて說明文に入つてゐるがそこに變化があつて飽かしめぬ用意であらう。

潮來に着いて始めて水に離れ街衢を見、「粉壁瓦鱗參差として千百戸……」で結んだあたり文も目先も又更に一變した。

要するに簡潔明朗の一種清新な文體で、寫生文としては好箇の模範である。

挿　繪

「水郷」（一五七頁）三宅克己筆、第一回帝展出品畫。

三宅克己ミヤケカツミ。明治七年一月德島縣撫養町に生れ、初め洋畫家松平民治、上杉熊松等について學び、二十二年頃大野幸彦に更に二十五年原田直次郎に就いて研究した。文展へは第一回以來毎回出品し、湯ケ島（第三回）は三等賞を得、冬の小川（第九回）は二等賞を得、夏（第十一回）は推薦となつた。度々歐洲に遊び、繪の外寫眞術にも長じてゐる。（明治大正文學美術人名辭書）による。

「蘆花筆蹟」（一五九頁）現代文學全集卷十二所載。

「（改造社の山本君）の懇囑に絆され、今此山上で病の間に卷頭の題言をさへ書いてゐる。不思議な世の中である。」

【水郷の圖】（一六一頁）山口八九子筆。原畫名「海苔を採る」帝展第八回出品。

山口八九子。ヤマグチハクシ。京都繪畫專門學校卒業。南畫院同人。帝展南畫展その他に作品を發表してゐる。氏の作風は頗る瓢古超越で、院内に一特色を發揮してゐるが、氏は努めて水墨か單なる色彩を以て複雜な形象の表現を狙つてゐるやうである。（現代書畫家名鑑）

二六　父母の思出

作　者

新井白石。アラヰハクセキ。德川時代の碩學也。名は君美、字は在中。一に濟美といふ。白石はその號。明暦三年江戸に生る。幼より穎敏にして父の主久留里侯（土屋利直）その幼慧を愛し常に膝下におかれしといふ。侯卒して父致仕の後、事に坐して白石も亦禁錮せらる。後貧困の中より苦學し、能く經史百家の書に通ず。天和二年堀田正俊に仕へしが後、木下順庵の門に遊び該博を以て稱せらる。後故ありて堀田侯を辭す。元祿六年、德川家宣猶甲府藩邸にあり、白石辟されて其儒官となる。年三十七、十四年命じて藩翰譜を成さしむ、寶永六年家宣將軍となるや召されて侍講となる事以前の如し。正德元年朝鮮の使節來り、白石其事を掌り、多くの新制をしく。家宣薨ぜし後幾くもなく儒君も亦薨ず。君美漸く老て當世に意なし、閉居して日夜典籍を以て樂とす。其著述三百餘種　享保十年五月十九日卒す。年六十九。著の主なるものを擧ぐれば「采覽異言」「讀史餘論」「古史通」「東雅」「折

焚柴記」等。〔人名〕による。

出所

校註折たく柴の記。（洋裝合本）

大正五年四月、青山堂書房發行。定價八拾錢。

內容、自家の經歷雜感を記した和文の自傳記である。その自序中にも「今はいとまある身となりぬ。心に思ひ出る折々、過ぎにし事ども、そこはかとなく記し置きぬ。外さまの人の見るべきものにもあらねば、ことばのつたなきをも、事のわづらはしきをも撰ぶべしやは」云々といつてゐる。「折たく柴の記」の名は後鳥羽天皇の「思ひ出る折たく柴の夕けぶり、むせぶもうれしわすれがたみに」とあるにとつたのであらうといふ。自傳を記した書は古來稀である、和文學者で、しかも道勁であるから、著者の事蹟、當時の事情等を知るの外に、文章上の模範として見ることが出來る。

尙白石全集（國書刊行會本）卷三にも入つてゐる。

要旨

近世の逸材白石の父母の風格を偲ぶことが出來ると同時に、それに對した白石自身の人となりも伺ふ事が出來る隨筆の一部として採錄した。調子の高い近古文の佳作として味ふにも好都合であらうと思はれる。

段落

一、わが父にておはせし人は……心にかけしなりなどのたまひたりき（一六七頁二行まで）

父の思ひ出の事。

1、父の容貌（一六三頁四行まで）

2、同性情（一六四頁四行まで）

3、同趣味（一六四頁十行まで）

4、同食物について（一六六頁三行まで）

5、同衣服について（一六七頁二行まで）

二、わが母にておはせし人は（一六七頁三行より）……なり給ふと仰せられし（終まで）

母の思出の事。

1、母の趣味性情（一六七頁八行まで）

2、同起居の有樣（一六八頁六行まで）

3、父致仕後の有樣（終まで）

解　釋

【髮に黑きすぢはすくなかりき】　白髮が多かつたの意。

【灸】　キユウ。漢方の療治法の一、もぐさを肌につけてこれに火を點じて灼き其熱氣に由りて病氣を療治すること。灸點、やいと。廣辭。

【四時】　四季。

【きこしめしけり】　召上るの意。他動四。(一)聞くの敬語、(二)飲む、食ふ、行ふ、治むなどの敬語。(三)お聞き入れになる。(四)一杯くふ、うまうまとだまさる。大國。

【代々の集】　古今和歌集以下の勅撰和歌集をさす。古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今の八代集なんかであらう。

【物語】　語の意本より說話の義なるを以て、古は實事を叙したるをも、空想を記したるをも總て物語と稱し、詳しく云ふときは空想のをば作り物語と稱したり、榮花物語、世繼物語は雜史にして、源氏物語、とりかへばや物語は小說なり。後に至りては物語といへば作り物語のこととなれる觀ありと雖もなほ記實の書をも物語と稱せり。作り物語は平安朝を中心として世に出で、竹取物語。空穗物語、源氏物語等其代表者たり。大抵邦語を用ひて漢語を用ふる事少なきが爲其文姿は婉曲優柔にして、兒女の情を描く事多く、英雄の

業を說く事少なきを以て、其內容は艶麗纖細なり。此故に鎌倉時代に入りては(中略)文學上の主座は實事と空想との間の產物たる戰記物に奪はれ、足利氏時代に當りては殆ど其舊型を存する能はざるに至れり。德川氏の世、古文學の研究盛なるに及び、建部綾足の西山物語、村田春海の竺志船物語等、遙に平安朝作り物語と相望んで、其遠裔末葉として現れしも、忽ちにしてまた亡びて其系統絕えたり。百科こゝにあるのは平安朝の物語類の代表的なものをさすのであらう。源氏物語や、勅撰歌集等を讀むことは女の素養の一として認められてゐた時代であつたからである。

【圍碁】　キゴ。碁をかこむこと。碁。碁盤の線の上に黑白の碁石を並べ、圍み鬪はせて勝負を決するもの、地を廣くしめたるを勝とす。廣辭。

【將棊】　ショウギ。象棋。戰陣の形勢に模擬し、盤上に棊子を使用して行ふ一種の遊戲其淵源頗る古く流布頗る廣く、東西諸國概ね類似のものあらざるはなし、我國には遣唐使又は入唐僧によりて將來せられたるらしく、中古以來貴紳の間に流行し、降りては武門の間に愛好せられ、遂に一般に普及せり、從て幾多の變遷を重ね數多の種類あり。中に就きて小將棊最も發達し今日に於て將棊といへば專ら小將棊を指していふ、兩人にて將棊盤を挾

みて對向し、互に盤上に將棊駒を式の如くに排列し、交互に其駒を固有の働き方によりて鬪はし、敵の王を擒にするを「つめる」といひ、つめたる方を勝となす。廣辭。

此等の遊戯は平安朝時代には女子の間に多く用ひられてゐた事は物語等によくみえてゐる徳川時代にはまだ其餘風が殘つてゐて一種の教養の樣になつてゐたものと考へられる。

【堪能】　カンノウ、才能すぐれて事に巧なり。宋書、明帝記「其文武、――隨才銓用」（字源）。

【香爐箱】　香爐は香を焚く器、座敷の裝飾具として用ひらる。多くは陶磁器、金器若しくは漆器にして其形種々あり。廣辭。

箱とあるから漆器の箱形をした香爐の事であらう。香爐を藏ふ箱とは一寸考へられない。

【琴】　コト。絃樂器の一種、長き桐の板を張り合せて中空にし、上面に弦を張り、彈じて鳴らすもの種類多し、普通に琴といへば十三弦の筑紫琴を指していふ。廣辭。

【つめを袋にして】　琴の爪を袋に入れての意。

【あや】　綾。模樣を織り出したる織物。廣辭。

【諺】　コトワザ。古來の云ひならはしたる言葉。世間にいひ傳ふる言葉。通俗の訓戒。廣辭。

【致仕】　チシ　官を君に納め還して隱居する。辭職する。公平　宣元「退而――」＝致政。字源

鑑賞

父母の風格が親しみと敬虔な筆で簡潔によく出てゐる。父なる人は土屋侯に仕へて、足輕小頭から御目付に上つた人であるが、白石の親にふさはしく餘程强情我慢の傑物で才氣のあつた人であつた。或時癰を煩つて醫者にみせたが痛いとは答へなかつたので、まだ療治が出來ないと歸りかけた所、母が出て、良人は痛いなどと弱々しい事は申しませぬが痛いに違ひありませんと云つたので、適當な療治をして歸つたといふ。（文會雜記）かうした一面が白石にもあつて、人物學識については既に定評があり、當時に於ても有名な學者達から非常な讃辭を受けてゐながら、一方敵を作つたり惡く云はれたりする樣になつたのである

然し各方面で偉大な人物であつた事は云ふに及ばない事で、本職の政治、經濟、外交方面の事は勿論、歷史を科學的に取扱つた初めての人としての功績は此に劣らない程で、「讀史餘論」。「古史通」、「藩翰譜」は今尙尊重されてゐる。其他「東雅」、「東音譜」、「同文通考」等の著者としての言語學方面にも「本朝軍器考」による考古學方面にも、「采覽異言」、「西洋紀聞」等の西洋の學問の開山としても、餘技とは云へないほど立派なもので、尙詩も大家の中に入るし、若い頃俳諧もしたと云ふ實に行くとして可ならざるはなき有樣であつた。

「折焚く柴記」は八代將軍が職につかれると間もなく斥けられて數年間失意の境遇に居たその不滿をもらす事が一つの動機となつて出來た白石の自傳である。此書は　祿正　忌年間の歷史上の好資料であるとともに文學的にも、高い識見と豊かな思想とが相まつて近古の良書たるは言ふまでもない。

本文に拔粹した所は上卷の初めの方で處々少しづつ畧した所もあるが畧原文によつた。參考の爲左に掲げておく。

家人と共にきこしめしけり。（一六六頁三行）のあと……酒はわづかに喉に下し給へば、大きは醉給ひしかばたゞ盃をとりて歡を交給ふのみなりき。茶をば好みて召しけり。

心にかけしなりなどのたまひたりき（一六七頁二行）のあと……約七頁畧（國書刊行會本）此間に父の持物のこと、父の逸話、父から聞いた話の二三、父の養子とした人のこと。母の實家の事等が記されてゐる。

挿　繪

【新井白石像】　大日本名家肖像集所載（東京帝室博物館藏）

【新井白石筆蹟】　國書刊行會の新井白石全集卷五、「白石先生手簡」中、室鳩巣宛のものに次の通り出てゐる。

「御手紙殊に八居御高作被ㇾ下候數回吟翫候處に皆々圓熟少も存寄無之候御舊草卽致ニ返上一候青雲への御一封可ニ相達一候此ほども申上候ごとく唐金よりの詩に九日の詩を貴樣より御うつし被ㇾ下候とて和し來り候これはいかやうにも間渡しの挨拶なく候てはと存じ候て昨夜枕上つゞり出し候を懸ニ御目一候誠の間わたしにてはなまじゐの笑草にも候はん敗遺すまじきとも存候如何

青楓江上暮雲隈、　萬里霜飛白雁催、
我本四愁思ニ路隔一、　君今八詠（得）識ニ樓開一、
採ㇾ芝差擬商山曲、　杷ㇾ菊且啣彭澤杯（盃）、
非ニ是（幸爲）滄浪清唱在一　誰憐憔悴贈（寄）言來、（但し筆蹟の文字は右傍括弧内の如くなつてゐる。）

四愁詩の我所ㇾ思兮在ニ桂林一また路遠莫ㇾ致倚ニ惆悵一また毛裕が八詠の事等用ひ申候一

筆蹟左方の小字は左の通りであらう。

右今歲重九宅畔生芝卽詩紀事滄浪先生賜和且以酡作錄示毛裕主人主人亦有和因咏戊戌十月白石

因に滄浪は鳩巣の別號である。

【新井白石の墓】　挿畫は教育畫報第六卷に出てゐるものに據つた。同挿畫には「東京府下中野町高德寺に在る。」とある。

二七　幼な正行

作者

【坪内逍遙】名は雄藏。文學博士。英文學者。早稲田大學名譽教授。安政六年五月二十二日美濃國加茂郡太田村尾張代官所に生れた。明治九年東京に遊學し明治十六年東京帝國大學政治科を卒業し、東京專門學校（今の早稲田大學の前身）に教鞭を執り、尋いで早稲田大學教授となり同校文科の柱石として多くの秀才を其の門から出した。十八年文學論「小說神髓」を著して藝術の至上目的は人生の眞相を描くにある事を主張し、勸善懲惡主義の小說を難じた。これ實に我が邦に於ける文藝革新の最初の警鐘であつた。なほこの論を裏書する具體的の小說一篇を著した。「當世書生氣質」これである。又雜誌「早稲田文學」を創刊して新文藝の鼓吹に努めた。脚本「桐一葉」「牧の方」「沓手鳥孤城落月」「名殘の星月夜」「義時の最後」「法難」等の外、樂劇では「新樂劇」「新曲浦島」「新曲かぐや姫」等の作がある。氏は新しい論を立ててはそを實際の作物によつて模範を示すといふやうに作と論と相俟つて劇壇の啓發に力め、四十二年文藝協會を起して新劇勃興に魁した。沙翁研究に於ては世界的の大家でその飜譯は全部に亙り、我が文壇の誇である。「文學そのをり〳〵」「英文學史」等の外、倫理の方面の著書も多い。大正十一年の春頃からペーヂェント劇を鼓吹し博士自身にも例の具體的見本としての創作がある。同冬になつて家庭用兒童劇數種を選んで早稲田大學より出版した。最近作の戲曲に「長生浦島」「大いに笑ふ淀君」等の他常用漢字の問題を取扱つた長篇の論文も發表し、演劇博物館を新設する等多方面の活動をなし、老いて益々盛なりの氣勢を示してゐる。

出所

【逍遙選集】全十二卷、別冊三卷、東京市日本橋區春陽堂發行。本課は大正十五年十一月發行のその第九卷「家庭用並びに學校用脚本」中の「をさな正行」の篇から抄錄したのである。

内容、氏の小說脚本論說等を選び集めたものである。第九卷には、氏が專らペーヂェントと兒童劇との鼓吹に力めてゐた頃の論說と其の主張を具體化するために書いた代表作とを收めてゐる　即ち、藝術と社會、藝術と家庭の二大篇に分ち、前者の方には新時代に對する藝術の職能・民衆教化と演劇等十一篇の論說と、熱海町の爲のペーヂェント・戸外劇三種を、又後者の方には、文化力として童話及び童話術・私の希望する家庭童話劇・兒童劇の進化・兒童劇の種類及び使命・兒童劇の效用・兒童劇

に對する種々の杞憂等十種篇の論說と、家庭用及び學校用脚本、（田舍の鼠と都會の鼠・因幡うさぎ・すくなびこな・をろち退治・文福茶釜等、すでに諸所で實演された事のある脚本十三篇）を收めてゐる。

要旨

正成公の首を迎へた時の楠氏一門の悲劇を描いたものである。この悲歎の中にも、取亂さず、よく病弱の正行を勵まし遂に父の志を繼がしめるに至つた賢明なる母の態度がこの劇の中心をなしてゐる。

劇としての藝術的興味を享樂せしめると共に、この楠氏一門の誠忠に感激せしめるのが本課の主眼である。

段落

一、高足二重舞臺……と、思案の思入れ。（一七一頁二行まで）

舞臺の樣。

奥方、皇運の衰へたのを慨き、夫の死を病身な多聞丸に知らせることの苦痛を歎じ、夫の首を送つてよこした足利の心底を訝しむ。

二、この時腰元甲……下手の奥へはいる。（一七二頁四行まで）

正行の腹臣恩地太郎が來たといふので、いつもの間に案内せしめ、奥方は夫の死を多聞丸に知らせ、その志を繼ぐやう教訓することを決心する。

三、暫くは空舞臺……腹を切らうとする。（一七四頁三行まで）

多聞丸、佛壇の前へ出て首桶の包を解き、父の首を見て非常に悲しみ、己れの病弱を歎じて切腹しようとする。

四、この少し前から……と爭ふ。（一八一頁九行まで）

多聞丸の切腹しようとするのを見て、侍女菊野や乙若が止める。奥方も出て來てその不心得を叱り、父の志をつぎ逆賊誅伐を思ひ立つやうに說く。多聞丸が無言でゐるので奥方は立腹して立上る。乙若や侍女が色々取りなす。

五、この時和田和泉守……舞臺しんとなる。（一八三頁八行まで）

そこへ、和田・恩地が出て來て、奥方の教訓を傍で聞いて感じた旨をいふと、奥方は苦衷を述べて歎く。

六、と、和田は靜かに……皆々嬉し涙にくれる。（一八七頁末文まで）

和田恩地も共々多聞丸を諫め、多聞丸もその心得ちがひを謝して逆賊誅伐の決心を誓ひ、一同喜ぶ。

解　釋

【高足】　タカアシ。大道具の一。俗に二重舞臺といふものの一なり。二重に高足・常足の二種あり。高足は御殿向或は大茶屋場、常足は低く造れるものにして商家或は農家に用ふ。百科。

【錦】　(一)數種の染絲にて種々の模樣を織出したる地質厚き絹布。(二)美しく麗しき物を譬へていふ稱。大國。こゝは(一)。

【きれ】　(一)きるゝこと。(二)双物のきれあぢ。(三)切れたる物の端。きれはし。きりくづ。(四)多くあるものゝ中の一部分。はしくれ。一端。(五)布帛のきれはしの特稱。(六)段物。織物。(七)書畫等の古人の筆蹟。又は、其の斷片。(八)石材の一尺立方のものの稱。(九)小判金の瑕の稱。大國。こゝは(六)。

【首桶】　クビヲケ。首級を入るゝ桶。くびいれ。廣辭。

【奥方】　オクガタ。貴人の妻の敬稱。奥御前。

【經文】　キヤウモン。(一)佛教の聖典として佛徒の遵奉する文書の特稱。(二)宗教の聖典として其の信徒の遵奉する文書の總稱。廣辭。こゝは(一)。

【讀誦】　ドクジュ。讀は文字に就きてよむ。誦は文字を離れて口に唱ふる義。經文を讀むことゝ誦することゝ。又、よみあぐること。大國。「トクショウ」と讀めば、ひろく讀み誦ふること。讀書すること。大國。

【南無阿彌陀佛】　梵語に "Namo'mitābhāya Buddhāya"(歸命無量光佛又は "Namo'mitāyuse Buddhāya"(歸命無量壽佛)といふ。これを合して光明無量・壽命無量の佛陀に歸命する意となる。親鸞の正信偈の劈頭に「歸命無量壽如來、南無不可思議光」と云へるは、共に南無阿彌陀佛といふに同じく、阿彌陀佛の救濟を仰ぐの意を表白せるものなり。普通に六字の名號といひ、又稱名といひ、又念佛といふ。觀無量壽經に出づ。唐の善導これを解釋して云はく、「言二南無一者、卽是歸命、亦是發願廻向之義、言二阿彌陀佛一者、卽是其行。以二此義一故、必得二往生一」と。これ願、行の具足によりて、行者の往生疑なきことを斷ぜるものなり。然るに、此の願行を行者に屬せしむべきか、佛陀に屬せしむべきかによりて、同一淨土門中に於て大略二派を分つ。淨土宗にては行者の發願起行となし、眞宗にては佛陀の大願大行となす。されば前者は念佛を稱ふる功名によりて往生を願ひ、後者は本願招喚の勅命に信順する信心だにあれば、稱名の如

何によらず往生を得べしとなし、從つて信後の稱名を以て救濟を喜ぶ上の報恩の念佛となす。眞宗に信心正因稱名報恩といふは卽ち是なり。又南無はたのむ機、阿彌陀はたすくる法、機法一體の南無阿彌陀佛といふは卽ち是なり。百科。

「南無」は梵語Namas.別に音譯して那謨・南謨・南牟・那模・納莫・納慕・娜謨等といひ、又義翻して度我(法華文句)・救我(涅槃經疏)・歸禮(玄應音義)・敬禮(慧琳音義・義林章)・歸命(玄應音義・涅槃經疏・仁王經良貫疏)といふ。歸命の命は、義によりて譯人の加へたるものなり。度我・救我は佛陀に向ひ濟度を求むるの意を取り、歸命は一歩を進めて歸投信順するの意を取る。(下略)。百科。

【よろしくあつて】　其の場にほどよい所作があつての意。

【經机】　キヤウヅクエ。經文をのせおく小さき机。丈低く横長くて、足は多く外へそりたるもの。大國。

【人盛なる時は天に勝つ】　大國に、「人衆ければ天に勝つ」とある。衆人の勢力强き時は一時は天理に勝つ。大國。

諺語には、「人定りて天に勝つ」の條に下の通り出てゐる。「人衆くして天に勝つともいふ。通俗編一、人定勝レ天、亢倉子政道篇、引二周之秩官一云、人强勝レ天、歸潛志、引レ傳云、天定能勝レ人、人定亦能勝レ天。」

【おほみ柱】　大御柱。柱石の意。たよりとすべき人に譬へていつた。

【かよわい細枝】　よわよわしい枝。おほみ柱とも頼んだその楠の幹に對する。幹は正成、細枝は正行兄弟をさす。

「かよわい」の「か」は接頭語、よわしに同じ。大國。

「ずはえ」ズワエと發音。すゞえの訛り。楚又は楮の字を當てる。木の枝また幹などの、細長く直きもの。しもと。ずはえ。大國。

【多聞丸】　正行のこと。父正成の戰死せし時年なほ幼なり。竊に遺志をつぎて南朝の恢復を圖らんとする志を懷く。後醍醐天皇の花山院亭より遁れて河內東條城に至りたまふや、和田氏の一族と共に車駕を護りて賀名生に入る。天皇其の功を賞して正四位下に叙し、帶刀となし、父の官を襲うて檢非違使左衞門尉に任じ、河內守を兼ねしむ。爾後東條に至りて時機を俟つ。正平の初、親房奧州より吉野に還り四條隆資等と共に京都恢復の計をめぐらし同二年七月兵を擧げて北軍を擊たんとす。泉・河・紀の南軍悉く集まり東條を本據となして河內の所々に戰ふ。足利尊氏細川顯氏をしてこれを攻めしむ。九月十七日正行竊かに顯氏を襲擊し大いに敎興寺に戰ふ。顯氏敗績す。山名時氏來り援けたるも住吉にて大敗し京都にかへる。尊氏驚き高師直・師泰をして來り擊たしむ。正行、弟正時・和田賢秀等と

吉野に參內し後醍醐帝の陵を拜し師直の軍を河內四條畷に迎擊し大いに敗れ諸將戰歿し正行亦これに死す。時に年二十三。明治六年十二月從三位を追賜せられ十年二月十七日特に勅使を其の墓に遣はさる。六月十七日神社を四條畷に建て別格官幣社に列せらる。〔百科〕に據る。

本戲曲では正行の年を十四歳としてある。太平記卷第十六、正成下二向兵庫一事の條には「嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを」云々、同卷、正成首送二故鄕一事の條にも「今年十一歳に成りける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣」云々とあり、卷第二十六、正行參二吉野一事の條には「父正成尪弱の身を以て……遂に播州湊河にして討死仕り候らひ了んぬ。其の時正行十三歳に罷り成り候ひしを」云々とある。この事に就いては、參考太平記二五ノ一五に「光陰過ぎ安ければ、年積りて正行已に二十五」の次に注記して、「今川家●毛利家●北條家●南都●天正本作二二十三一、按諸本第十六卷、正成下二向兵庫一段云、延元元年正行年十一、因而考レ之、正平三年年二十三、第二十六卷、參二吉野一段云、正成死時正行十三、據レ此則正平三年、正行年二十五也、然國太曆、以二藤井寺合戰一爲二正平二年一、是北朝貞和三年也、（中略）按藤井寺合戰、實貞和三年、而非二四年一也、毛利家本說爲レ得、餘本皆誤也、據二本文第十六卷、所謂十一歳一、而今年正行年二十二、若據二第二十六卷一所謂十三歳、則二十四也、未レ知二孰是一。」とある。又、正行の幼名を多聞丸といつたといふことは普通の書物には所見がない。正成に就いては「父を正康といひ子なく、其の妻志貴山の毘沙門に禱つて正成を生む。故に小字を多聞（多聞天は毘沙門天の一名）と曰ふ」といふ傳說があることは有名な話である。こゝは父の幼字を借つて附けたまでのことであらう。脚本のことであり、そこまで詮議する必要はないであらう。但し原文は多門丸としてある。

【櫻井でのあの御敎訓】「櫻井」は大阪府三島郡島本村の大字。正成が正行と訣別せし地とて其の名高し。山崎街道に沿ひ、古松の下に碑を建つ。「撫子にかゝる涙や楠の露」（芭蕉）又此所にて櫻井燒といふ陶器を製す。待宵侍從の墓は此の地の西南なる山にあり。（太田氏帝國地名辭典）。但し櫻井驛訣別の史實は確證が無いといふことである。奈良縣磯城郡に櫻井といふ町があるが、正成父子の話とは關係はない。

櫻井での敎訓は、太平記卷第十六、正成下二向兵庫一事の條に見えて居る「正成此を最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井の宿より河內へ返し遣はすとて、庭訓を殘しけるは、『獅子子を產んで三日を經る時、數千

丈の石壁よりこれを擲ぐ。其の子獅子の機分あれば、教へざるに中より跳ね返りて、死する事を得ずといへり。況んや汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留まらば、我が教誡に違ふ事なかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見ん事、これを限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りと雖も一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失ひて、降人に出づる事あるべからず。一族若黨の一人も死に殘つてあらんほどは、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。』と。泣く泣く

申し含めて各東西へ別れてけり。」云々。（養由は弓の名人、紀信は漢高祖の忠臣）。

【世瀨川祐隣】原文に、セゼガハスケチカと振假名がある。正成の首級を屆けた足利氏方の使者。太平記等にこの名は見えてゐないやうである。

【お首級】おシルシ。又、おシユキフ。原文、おシルシと振假名がある。「首級」支那にて秦の法、敵の首一つを斬れば、爵一級を得たるに基く。討取りたる首。しるし。大國。

【呑込む】（一）のみて喉へ下す。（二）納得す。會得す。合點す。理會す　大國。

【この深切を餌に……】首級を送つた深切を餌にしてこの楠を抱込まうといふ魂膽かも知れぬ。即ちこれで恩をきせて心を煮き、足利氏へ心を寄せしめようとするのではあるまいかの意。

「深切」ふかく切なること。ねんごろに物事をすること。剴切。「親切」人情のあつきこと。ねんごろなること。懇篤。以上大國。言海も右と同樣別々に解してゐる。言泉も右と同樣別々に解してない。廣辭は親切・深切を同一の條に揭げてある。なほ廣辭・諺辭には心切の字も認めてゐるが、これは用ひさせぬがよいと思ふ。このことは、本教科書卷一をろち退治の課でも注した。

「餌」（一）鳥獸・蟲魚などに與へて飼ひ又は其を誘ふ食物。ゑさ。ゑば。（二）人などを誘惑する種となす品物。釣寄するに用ふるもの。大國。

【思入れあつて】考へ込む所作があつて。

【油斷】下文の涅槃經より出でたる語といふ。氣をゆるすこと、不注意。涅槃經二二「王勅二一臣一、持二一油鉢一經二申中一過、莫レ令二傾覆一、若弃二一滴一當レ斷二汝命一」由斷。

【思案】思按とも書く。（一）考へめぐらすこと。かんがへ。思考。分別。（二）心配。苦心。大國。

【思入れ】（一）おもひいるゝこと。（二）心をこむること。（三）芝居にて、役者がおもひいるゝ所作。廣辭。こゝは（三）。「思ひいる」とは深く思ひ考ふ。かんがへこむ。

【腰元】　コシモト。(一)腰の邊。(二)貴人の傍に仕ふる侍女。(侍婢)。廣辭、こゝは(二)。

【下手】　シモテ。(一)下の方、上手の對。(二)芝居にて、見物席より見て舞臺の左方。廣辭　こゝは(二)。本教科書卷一、をろち退治の課でも注した。

【恩地左近太郎】　オンチサコンタラウ。正成股肱の臣なり。屢軍に從ひて功あり。就中、赤坂・千劍破の二ケ所を最も著しとなす。正成戰死するに及び子正行を助けて兵を擧ぐ　後終る所を知らず　所謂楠四天王の一人なり。人名、原文にはオンチサコンタラウと振假名をしてある。

【密々】　ミツミツ。(一)ひそか。(二)こまやか。(三)ぴつたり。廣辭、こゝは(一)。

【はいる】　はひるの轉。はひるは、はひいるの約。這入るの字を當てる。大國。國定讀本は專ら「はいる」を用ひてゐる。本教科書卷一の第二課でも注した。

【いつそ】　一層の音か。(一)むしろ。却つて。いつそう。(三)ほんに。ほんとに。じつに。大國。こゝは(一)。

【上手】　カミテ。(一)川上の方。(二)上座に近き所。(三)漁網の名所。袖中抄二十「網・大網を引くに、左の網をばかみてと云ひ、右の網をば下手と云ふ。(四)劇場にて、舞臺の右の方　下手の對。大國。こゝは(四)。

【空舞臺】　アキブタイ。

【佛壇脇】　ブツダンワキ。佛壇は正面にある。その左右に襖あり。上手寄りの襖。

【襖】　フスマ。障子の一種。骨の兩面より紙を貼り重ねて作りたるもの。多く唐紙にて張るより唐紙障子ともいふ。大國。衾(フスマ)は布帛などにて作り、寢ぬる時身を被ふ具。大國。

【生首】　ナマクビ。なまなましき首。斬りて程經ぬ首級。大國。原文生首(クビ)とある。

【上手を見て、きつと袖を嚙み】　上手の奥、襖の內の方には菊野や乙若が居るので、聲を立てて泣くと、すぐそれと氣づかれるから袖をしつかと嚙んで聲を殺したのである。「きつと」(一)きとの音便。(二)たしかに。しつかと。必ず。きと。(三)おごそかに。きびしく。(四)動かずに。ぢつと。(五)まつすぐに。すらりと。「きと」は、(一)たちまちに。俄に。ちよと。きっと。(二)たしかに　しかと。端然と。嚴然と。きっと。言泉　こゝは上記の何れにもぴたりとは合はぬが、まづ「きっと」の(三)の場合と見てよいであらう。

【意氣地】　イキヂ。いくぢといふは、いきぢの訛り。大國。

【一生懸命】　言海に「一所懸命の訛、命にかけてすること。必死となること。死物狂ひ。必死。」とあり、その「一所懸命」の條には、「一所賜はりたる知行の地を命にかけて頼みとす。」とある。詳漢や字彙には、一所懸命の

條に、「一箇所の領地を命にかけて賴みとする義、轉じていのちがけ、必死」の如く記し、「一所を一生と書くは不可」としてある。國定讀本は「一生けんめい」を使つてゐる。〔評釋〕や〔字源〕の不可說は穩當でないが、一所懸命の語に轉義として必死の意を認めて然るべきであらう。このことは本教科書卷一、最後の授業の課でも注した。

【御遺言】　ゴユヰゴン。

【拜をなし】　ハイをなし。

【暇乞】　イトマゴヒ　いとまを乞ふこと。別れを告ぐること。告別。〔大國〕。

【菊野】　キクノ。腰元の名。原文、役割のところに、十七八歳とある。

【乙若】　オトワカ。正時をさす。正時の幼名を乙若といつたといふことは普通の書には所見がない。

【お母樣】　おカアサマ。

【お兄樣】　おニイサマ。

【この體】　このテイ。

【つか〳〵】　忌憚なくことばやく進み出で、又はいひ出づるさま。この意味を強める時は濁つて「づかづか」といふ。〔廣辭〕。こゝは進み出でる方。

【肱】　ヒヂ。肘・臂とも書く。(一)腕の關節の折れ曲がれる處。かひなとたゝむきとの間。(二)曲がり出でて、臂の狀をなすものの稱。(三)幕串(マクグシ)の上部にある折釘　幕の手を懸くるもの。〔大國〕。

【中啓】　チユウケイ。親骨の上端を外へ反らしたる扇子。たゝみても尙ほなかばひらける狀をなす。折腰扇。〔廣辭〕。

【ちやうと】　ちやうどともいふ。(一)物と物と打合ふ音にいふ語。(二)きり〻と。きちんと。ちやんと。(三)目かどをたてて見つむるさまにいふ語。はたと。はつたと。〔大國〕。こゝは(一)。

【じつと】　ぢつととも書く。國定讀本はじつとを用ひて居る。

【取亂しましたね】　はしたないふるまひをしましたね。「取亂す」は、(一)ちらしみだす。とりちらす。(二)しどけなくす。しだらなくす。(三)はしたなくふるまふ。度を失す。〔廣辭〕。こゝは(三)

【嫡男】　チヤクナン。嫡出の長男。嫡子。〔大國〕。

【不俱戴天】　フグタイテン。ともに天をいただかざる義。即ちこれを斃さざれば止まざるばかりの仇怨あること。〔言泉〕　禮記に「父之讐、弗二與共戴一レ天、兄弟之讐、不レ反レ兵、交遊之讐不レ同レ國。」

【ないがしろ】　「無きが代」の音便。(一)其人あれども侮り輕んじて、恰もなきが如くにふるまふこと。あなどりかろんずること。なみすること。(二)しどけなきこと。とりみだしたること。「ひもうちときないがしろなるけしき。」〔廣辭〕。こゝは(一)。

【我意】　ガイ。我が心のまゝに事をなすこと。わがまゝ。大國。

【足利兄弟】　尊氏と直義の兄弟

【七生までも生れ代つて】　太平記十六「正成兄弟討死の事」の條に「楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行に竝み居て、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上に居つゝ、舍弟の正季に向つて「抑最期の一念に依つて、善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願ひなる。」と問ひければ、正季から〳〵と打笑ひて、「七生(シチシヤウ)まで唯同じ人間に生れて、朝敵を滅ぼさばやとこそ存じ候へ」と申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、「罪業深き

惡念なれども我も斯樣に思ふなり。いざさらば同じく生を替へて此の本懷を達せん。」と契つて、兄弟共に刺し違へて、同じ枕に伏しにけり。」云々。

【むざむざ】　惜しげもなく。わけもなく。廣辭

【犬死】　イヌジニ。死にて益なきこと。むだじに。　廣辭。

【うつけ者】　ばかもの、おろかもの。たはけもの。(痴漢)。空者とかく。「うつけ」は(一)から。あき。空虛。(二)うはのそら。ぼんやり。うっかり。(痴)。廣辭。こゝは(二)。

【なまなか】　(一)なまじひに。(二)なからはんと。中途半端。廣辭　こゝは(一)。「なまじひに」は(一)心に副はざるに強ひて。つとめて。(二)手出しせずとも善きに手を出して。むだに。廣辭。こゝは(一)。

【殉死】　ジュンシ。主君の死にたる時、臣屬の其あとをしたひて自殺すること。おひばら。廣辭

【根性】　コンジヤウ。こゝろね。こゝろだて。しやうね。大國。

【わたくし事】　おほやけならぬこと。わたくしなる事柄。一身上の事。廣辭。

【かすり疵】　刄物などの觸れて、皮膚に受けたる微傷。かすりで。かすれきず。大國。

【無念】　くやしきこと。殘念なること。くちをしきこと。廣辭。

【菊一文字】　キクイチモンジ。後鳥羽院の鍛工、備前則宗・貞次等に命じて作らしめたまひし名刀。廣辭。太平記には「菊水の刀」としてある。

【形見】　(一)死にし人又は別れし人の生存中又は昵懇中の事の思ひ出さるゝ種となる遺物。(二)過去の事の思ひ出さるゝ種となる遺物。廣辭。こゝは(一)。

【おろ〳〵】　(一)力なく。十分ならず。(二)泣聲するさま。廣辭。こゝは(二)。

【お詫】　わびること。「詫びる」は他動上一段、わぶの口語。過ち・罪などを謝するをいふ。「侘びる」と誤り易し。「侘」は、自動上一段。思ひわづらふ・さびしく思ふなどの意。

因に「詫」の本義は、ほこる・おごるで、「佗」

の本義は、他・ほか・かぶる・たのしむなどであるが、我が國では共に「わぶ」と訓じて用ひる。大字。

又字彙に「詫」は訑と同じく、あざむく・ほしいまゝなどの義、「詫」は、ほこる・あざむく・訝る、國訓でわぶ・謝罪する義としてゐる。

【勘辨】　カンベン。(一)考へ　わきまふること。(二)過失を斟酌してゆるすこと。廣辭。こゝは(二)。堪忍と同義の字であるが堪辨などと書かぬやう注意したい。

【合點】　ガッテン又、ガテン。「ガテン」はガッテンの」略。(一)詩歌などを評して、點を加ふること。批點。(二)過狀などに承知の旨を表して自己の名前に點を加ふること。(三)承知すること。うなづくこと。廣辭。こゝは(三)。

【苦肉の計略】　敵を謀る手段として、自己の苦を顧みぬはかりごと。言泉。敵をあざむく手段。

【うまうま】　たくみに。じやうずに。

【女々し】　メゝし。女らし。かよわし。柔弱なり。大國。

【どく】　退く。しりぞく。避く。大國。

【和田和泉守】　名は正武。楠氏の一族。後醍醐帝崩ずるに及び正行と共に入つて宿衛す。正平十五年足利義詮の兵天野行宮を犯す。乃ち正儀と赤坂城に據り之を拒ぐ。利あらず。

正平十七年攝津の守護代箕浦俊定を討ちて之を走らしむ。尋いで石塔頼房及び正儀と赤松光範を攻め、進みて湊川に至り兵庫の民家をやく。光範多部田城により固く守る。乃ち兵を引きてかへる。正儀、後出でて義滿に降る、正武宗族を率ゐて屢之を攻む。敵、天野行宮に迫るに及び藤原隆俊と之を拒ぐ、官軍利なし。帝吉野に還幸す。正武後終ふる所を知らず。人名

【兜】　冑・鍪の字も書く。「甲」をカブトと讀むは非であるが、戰記物語にはよく用ひてある。

【指圖】　差圖とも書く。大國。

【火急】　クッキフ。火のつくが如くに急なること。極めて急なること。(火速)。廣辭。

【持佛堂】　ヂブツダウ。持佛又は祖先の位牌を安置する堂。「持佛」は常に己の居間に安置するか若しくは身に持ちて信仰する佛體。廣辭。こゝは祖先の位牌を安置する堂。佛壇のある室。

【お次】　オツギ。貴人の御座近き次の間。大國。

【推參】　スヰサン。(一)推して參上すること。吾より訪問すること。(二)無禮なるふるまひ。無禮なること。大國。こゝは(一)。

【むせぶ】　噎の字を當てる。(一)喉につかへふさがる。むす。(二)むせび泣きをす。聲、咽につかへつゝ泣く。(三)むせび泣きするや

うに聞ゆ。(四)つかへとどこほる。大國。

【拭ふこなし】　涙を拭ふさまをする。「こなし」は、芝居にて、役者が或人物に扮して思を惱ますさま、又は怒りを包むさまなどをすること。廣辭。

【臆病根性】　オクビヤウコンジヤウ。臆病な心根。卑怯な氣性。

【竹童】　チクドウ。正成側近の小姓、正成自害の時敵將の兜を持たしめて鄕里へかへした。竹童はかへつたその夜切腹して主人に殉じたことになつてゐる。

【大殿さま】　オホトノさま。正成をさす。「大殿」は(一)正殿。寢殿。(二)貴人の當主の父の稱。(三)貴人の世子に對して、當主の稱。廣辭。こゝは(二)。

【前立】　マヘダテ。兜のたてもの「前立物(マヘタテモノ)」ともいふ。「たてもの」は兜のまびさしに飾る金物。廣辭。

【丸に二つ引き】　マルにフタつビき。紋所の名。ひろく引兩(ヒキリヤウ)といふ。「引兩」、輪の中に、横に二畫ある紋。新田氏・足利氏などの紋章。又輪無くして、一線・二線又は三線を引きたるもの。ふたつひき・二つ引兩。轉じて、立引・一つ引・三つ引等あり。いはきたてびき・にったなかぐろ・まるにみつたてひき・まるにひとつひき・まるにふたつひき・まるにみつひき等あり。大國。

【着料】　チヤクレウ。(一)着用の料とするもの。(二)黄八丈の幅狹きもの。言泉。

【二六時中】　十二時の間の義。一晝夜。又、終日。廣辭。

【片時】　カタトキ。又、ヘンシ、ヘンジ。しばし。暫時。大國。

【本來性】　ホンライセイ。本來の性質。元來のうまれつき。

【一念この事に及んでは】　一度父の敵の事に思ひ及びますと。

【遑】　イトマ。ひま。

【ひとへにお務めのやうに云々】　ひたすら、たすべき義務などと考へられるのは誤で、君父の敵とは俱に天を戴かぬといふのが本來性であるべきであるといふのである。

【念力】　ネンリキ。思ひ込みたる力。精神のそゝぎむかふ力。おもひの力。廣辭。

【肝腎】　カンジン。肝と腎又は心と共に人身に必要なる意より轉ず。肝要又は必要なること。肝心ともかく。廣辭。

【建武中興】　ケンムチユウコウ。後醍醐天皇の北條高時のために隱岐に蒙塵せらるゝや、勤王の士各地に起り、北條氏遂に滅亡せり。元弘三年六月五日天皇京師に還幸し、二條富小路殿に入御せられたるより、延元元年十二月二十一日花山院より吉野に潛幸されたるまで、凡そ四年間を建武中興時代といふ。(中略)革新第一に天子親ら政を執らるゝことゝなり、關白を廢し護良親王を征夷大將軍とし

帝室の親睦を志され、持明院統にも（後醍醐天皇は大覺寺統）先代相承の所領以外に新に領地をも附せられ、北條氏一類の土地を沒收し論功行賞せられぬ。即ち北畠顯家・足利高氏は從三位に叙し、高氏の功第一に居るとなし、武藏守鎭守府將軍となり、名を尊氏と更めしめらる。顯家は陸奥守に、新田義貞は越後守及び上野・播磨介となり、楠木正成は河內・攝津の守護となり、其の他諸將にも加恩せられたり。（中略）かく新政を布き人心を新にせられしと雖も、中興の成立は皇家多年の宿望に加ふるに、利祿を目的として立ちし足利・赤松等が一時に蜂起し、新田・名和・菊池・阿蘇・土居・得能等の不平連が楠木の如き純忠の士と結んで皇謨を翼贊大成したるものなれば、其の成立や疾風の如く速にして準備未だ十分熟せず、思慮及ばざるところ多かりき。（下略）。百科。かくて親政の世も暫時で瓦解されてしまつたのである。

【御大業】　ゴタイゲフ。

【爲さざるに忍びざるの御念力】　なさずに居られない深い御心。

【返辭】　ヘンジ。普通、返事と書く方が多い。返答。大國。

【きつと】　こゝは前に掲げた「きつと」の（二）。

【正八幡宮】　シヤウハチマングウ。正眞の八幡宮。變化の身に非ざる觀音を正觀世音といふ類。大國。八幡は世に應神天皇を祀ると爲せども誤なり。栗田博士は、神祇拾遺・神書鈔に、正八幡神は卽ち彥火々出見尊、比賣神は其の妃豐玉姬也とあるを、正說なるべしと云へり。（中略）八幡神を應神天皇としたるは、大神比義（宇佐八幡の社家）の假託の言に出づ。其の說始めて宇佐託宣集に見えたり。且託宣集は、比義を欽明天皇の代の人とし、其の子春麿を和銅年中の人となせども共に信じ難し。聖武天皇の時に比義の裔大神麿等豐前宇佐に神宮を造り、神託と稱し、八幡神を奉じて、大和に赴き、東大寺大佛を拜す。朝廷其の誣言を信じて、神を以て佛と同視し、天應元年遂に菩薩號を奉るに至れり。（中略）之に加ふるに清和源氏の諸將弓矢神として尊崇厚かりしを以て日本全國に八幡宮多く奉祀せらるゝに至れり。〔史辭〕

【嬉し涙にくれる】　嬉しさの涙をしきりに流すをいふ。「くる」（一）日入りはてて暗くなる。夜になる。（二）時節過ぐ。歲月たつ。年月終りになる。（三）目暗む。曇りて見えず。思ひ惑ふ。大國。こゝは（三）に屬する。

鑑賞

太平記十六「正成が首故鄕へ送る事」の條を劇化したものである。登場人物についてそれぞれ實演的の想像を描かしめつゝ、

二七　幼な正行

一、悲歎の裡にもとりみださぬ奥方の立派な態度、一言私事に及ばぬその訓言。
一、子供心にも行末を案ずる多聞丸のけなげさ、やがて翻然朝敵を討つ大決心をした、その心中。
一、幼いながらさすがに父の血をうけたと覺しき乙若のたのもしさと、いぢらしさ。
一、その間に主思ひの腰元菊野や恩地・和田等の赤心。

これ等この作の中に流れてゐる楠氏一門の尊いその精神を十分鑑賞せしめ度い。內容は實によく我が國民性に適應したもの、誠に深い感銘を與へさせずにはおかぬ。教育的にも又藝術的にも生徒の修養には頗る有益な劇と云へよう。

梗概

「幼な正行」は一幕二場であつて本課はその第二場である。第一場の梗概を左に記してみる。

第一場、金剛山城內多聞丸部屋

平舞臺、正面に床の間、そこに刀掛けに小太刀を掛け、其の下に菊一文字の短刀（櫻井驛で父と別れる時、父のなからん後はこれを以て朝敵を討てよとて賜つた刀）が置いてある。やゝ上手に六曲屏風を立て其の前に多聞丸（十四歲）が病にやつれた體で褥の中に寢てうなされてゐる。下手に腰元菊野（十七八歲）、上手に乙若（六歲）が介抱してゐる。

うなされてゐた多聞丸が目を覺ましたので乙若と菊野がどんな夢を見てゐたのかと聞く。多聞丸はいやな夢、氣持の惡い夢だつたといつて、御父樣が湊川の戰場で朝敵のために敗軍し伯父正季と刺しちがへてなくなつたのを見たといふ。もうこの時乙若と菊野は其の事實（正成の首が昨夜既に足利方より送り屆けられた事）を知つてゐるが、奥方からの深い注意で、病中の多聞丸に障りあつてはならぬと强ひて知らせずにゐる。併し多聞丸はそれとなく感づいてゐて、夕べ俄かにお父樣のお側去らずにゐる竹童がかへつて來たのはどういふわけか、竹童がかへつた以上、戰の模樣は分つてゐる筈、それになぜ私に知らせてくれぬか、病氣で寢ては居るがこの耳はよう聞える。竹童がかへつて來て切腹した事も、敵の使者世瀨川祐隣が來た事も知つてゐる。たとへ病中でも判官の子どんな悲しい目にあつても取亂さぬのを、皆で腹を一にしかくして知らせぬはこの多聞丸を見くびつてゐるといつてくやしがる。その中に菊野は藥を取りにゆくとて出て行つた後は乙若と二人になる。そこで多聞丸はかねて乙若が子供心に欲しがつてゐた半弓（櫻井で父が足利を討てとて下さつたもの）をやるからといつてうれしがらせて、すべての事實を云はせてしまひ、やつぱり夢の通りだつたといつて泣崩れる。乙若も幼心に云つてはならぬ事を云つてしまつた事を氣づいてうろ〳〵する。多聞丸はそれを制しつつ、傍の亂れ箱を引寄せ中から袴をとり出して穿き、立上つて刀掛から菊一文字をとり腰にさし、又

小太刀をとつて杖代りにして、父の首桶を安置してある持佛堂の方へ行く。乙若は不安さうにその後に追縋つて袖を捉へたが及ばぬ。泣いてゐる所へ菊野は藥湯を用意して持つて出て來る。そして多聞丸の居らないのを見て吃驚する。

第二場、持佛堂、

こゝは本課に出てゐるのであるが、後半は省略してあるから、參考までにその續きの梗概を記しておく。

多聞丸が逆賊誅伐の決心をしたので、一同嬉し涙にくれてゐる處へ、恩地新六（二十七八、左近太郎の弟）が入つて來て、敵の樣子を報告する。卽ち、氣轉のきく間者を八幡や尼ケ崎へ遣はして敵の動靜を探らせたら、意外にも敵は一同退却して、すでに五六里も退軍したといふので、和田、恩地等軍議に耽る。そして、それはきつと退陣するらしく見せかけておいて身方を油斷させ、急に引返して一擧に攝河泉を奪取しようとの苦肉の策であらう。若しくは、諸軍勢を一まとめにして都を襲擊しようとの魂膽かも知れん、若しさうならば、わざとその手に乘せられたと見せかけておいて急に軍備を整へ都へかけつけ、主上を守護して吉水院へ行幸を仰がうか等さまざま話す。すると奥方もそれを聞いて、その吉野への行幸は亡き夫の志である、せめてこの多聞丸が十五にもなつてゐれば、その軍隊の大將として初陣させ、初めて參殿もさせようものをと慨く。多聞丸之をきいて、假令元服はまだでもその初陣を許してくれと泣き、又小太刀を取つて竹童がもちかへつたかの兜を睨みつけ「おのれ逆賊足利尊氏め」と罵つて眞二つに割る。和田恩地等この多聞の意氣に恐れ入つて平伏する。一方、乙若も朝敵退治の眞似をする。この兄弟のたのもしさに恩地等喜ぶ事限りなく、そのうち夜も更けて、恩地・和田は夜と共に軍議を凝す、奥方は退いて改めて夫の回向をする。一同は佛壇の前へ坐つて平伏する。幕。

備考

一、本章の筋書の參考にするため

「太平記十六、正成が首故鄕へ送る事。」を左に抄錄する。

「湊川にて討たれし楠判官が首をば、六條川原に懸けられけり。去んぬる春もあらぬ首をかけたりしかば、これも又さこそあらめと云ふ者多かりけり。

疑ひは人によりてぞ殘りけるまささしげなるは楠が首。

と、狂歌を札に書いてぞ立てたりける。其の後尊氏卿楠が首を召されて、『朝家私日久しく相馴れし舊好の程も不便なり。跡の妻子共、今一度空しき貌をもさこそ見たく思ふらめ。』とて、遺跡へ送られけ

る情の程こそあり難けれ。楠が後室、子息正行これを見て、判官今度兵庫へ立ちし時、種々申し置きし事ども多かる上、今度の合戰に必ず討死すべしとて、正行を留め置きしかば、出でしを限りの別れなりとは豫てより思ひ儲けたる事なれども、「貌を見ればそれながら目塞り色變じて、替りはてたる首を見るに、悲しみの心胸に滿ちて歎きの涙せき敢へず。今年十一歳になりける帶刀、父が首の生きたりし時にも似ぬ有樣、母が歎きのせん方もなげなる樣を見て、流るゝ涙を袖に押へて持佛堂の方へ行きけるを、母怪しく思ひて則ち妻戸の方より行きて見れば、父が兵庫へ向ふ時形見に留めし菊水の刀を、右の手に拔き持ちて、袴の腰を押下げて、自害をせんとぞし居たりける。母急き走り寄つて、正行が小腕に取附いて、涙を流し申しけるは、『梅檀は二葉よりかんばしといへり。汝をさなくとも父が子ならば、これ程の理に迷ふべしや。小心にも能く〳〵ことのやうを思うて見よかし。故判官が兵庫へ向ひし時、汝を櫻井の宿より返し留めしことは、全く跡を弔はれんためにあらず、腹を切れとて殘し置きしにもあらず。われ縱令運命盡きて戰場に命を失ふとも、君いづくにも御座ありと承らば、死に殘りたらん一族若黨どもをも扶持し置き、今一度軍を起し、御敵を滅ぼして、君を御代にも立て進らせよといひ置きし處なり。其の遺言具に聞きて、我にも語りし者が、何時の程に忘れけるぞや。かくては父が名を失ひはて、君の御用に合ひ進らせん事あるべしとも覺えず』と泣く〳〵諫め留めて、拔きたる刀を奪ひとれば、正行腹を切り得ず、禮盤の上より泣倒れ、母と共にぞ歎きける。其の後よりは、正行、父の遺言、母の教訓心に染み肝に銘じつゝ、或時は童部共を打倒し、首を取る眞似をして『これは朝敵の頸を取るなり』と云ひ、或時は竹馬に鞭を當て、『これは將軍を追ひかけ奉る』などと云ひて、はかなき手ずさみに至るまでも、唯この事をのみぞ業とせる、心の中こそ恐ろしけれ。」

二、「筆蹟」頓作御造畢、無爲御遷宮、返々目出度喜入候必々可參詣候、恐々謹言　十二月一日　正行（花押）。

觀心寺（河内國南河内郡川上村）の鎭守の社壇炎後の造營落成遷宮につき、楠木正行の賀した書狀である。

女子國文大綱卷三　備考　終

昭和五年九月二十日印刷
昭和五年九月二十五日發行

〔非賣品〕

著作者　平林治德

發行者　立川熊次郎
大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地

印刷者　北隅茂
大阪市西區阿波座二番町三番地

著作權所有

發行所　大阪市南區安堂寺橋通三丁目四十五番地　立川書店

終